

平安京左京四条四坊一町跡・ 烏丸御池遺跡発掘調査報告書

2 0 2 1

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 160 番地 2 ほかで実施した、平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 20H046)
- 2 調査は、民間開発事業に伴い実施した。
- 3 現地調査は、開発原因者より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、辰巳陽一、菅田 薫（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和 3 年 4 月 1 日～7 月 13 日である。
- 5 調査面積は 444 m²である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は辰巳が行い、編集は辰巳、吉川絵里（文化財サービス）が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は辰巳が行い、出土遺物の撮影は写房 楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 10 現地作業に係る重機掘削作業は株式会社一誠建設、付帯工事、資機材リースは株式会社 Soid に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 望月麻佑、楠瀬康大、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平、
清須慶太（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 望月麻佑、早見由槻、多賀摩耶、吉川絵里、森下直子、中 優作、
場勝由紀菜、古谷眞由美、野地ますみ、神野いくみ、甲田春奈、
大崎みれい、赤羽 香、下市紗耶香、内牧明彦、溝川珠樹
(以上、文化財サービス)
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所 2019 年
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年
に依った。
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略)

國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）、鈴木久男（京都産業大学）

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	13
(1) 北区	13
(2) 南区	13
2 検出遺構	14
(1) 北区	14
i) 第1面	14
ii) 第2面	16
iii) 第3面	17
(2) 南区	17
i) 第1面	17
ii) 第2面	18
iii) 第3面	19
iv) 第4面	20
3 出土遺物	20
(1) 北区	21
i) 第1面遺構	21
ii) 第1層	21
iii) 第2面遺構	21
iv) 第2層	24
v) 第3面遺構	25
(2) 南区	28
i) 第1面遺構	28
ii) 第1層	31
iii) 第2面遺構	32
iv) 第2層	34

v) 第3面遺構	35
vi) 第3層	39
vii) 第4面遺構	39

第IV章 まとめ	40
----------	----

図版目次

図版1	北区東壁土層断面図（1：80）
図版2	北区西壁土層断面図（1：80）
図版3	北区北壁土層断面図（1：80）
図版4	南区東壁土層断面図（1：80）
図版5	南区北壁土層断面図（1：80）
図版6	北区全体平面紙割図（1：150）
図版7	北区第1面平面図①（1：100）
図版8	北区第1面平面図②（1：100）
図版9	礎石列0368平・断面図（1：40）、土坑0007平・断面図（1：80）
図版10	石室0005平・立面図（1：50）
図版11	井戸0028・0029・0043平・立面図（1：50）
図版12	北区第2面平面図①（1：100）
図版13	北区第2面平面図②（1：100）
図版14	礎石列0079・0369平・断面図（1：40）
図版15	暗渠状石組み遺構0081平・立面図（1：40）
図版16	北区第3面平面図①（1：100）
図版17	北区第3面平面図②（1：100）
図版18	柱穴0214平・断面図（1：20）
図版19	南区第1面平面図（1：100）
図版20	井戸0058・0070平・立面図（1：40）
図版21	南区第2面平面図（1：100）
図版22	土坑0148平・断面図、井戸0191平・立面図（1：60）
図版23	南区第3面平面図（1：100）
図版24	土坑0279・0286・0285平・断面図（1：60）
図版25	土坑0280遺物出土状況平・断面図（1：20）
図版26	南区第4面平面図（1：100）
図版27	出土遺物1（1：4）
図版28	出土遺物2（1：4）
図版29	出土遺物3（1：4、1：8）

図版30	出土遺物 4	(1 : 4)
図版31	出土遺物 5	(1 : 4)
図版32	南区・2019年調査区遺構概要図 1	(1 : 250)
図版33	南区・2019年調査区遺構概要図 2	(1 : 250)
図版34	南区・2019年調査区遺構概要図 3	(1 : 250)
図版35	南区・2019年調査区遺構概要図 4	(1 : 250)
図版36	遺構	1. 調査地全景 (調査地上空より三条通を望む)
図版37	遺構	1. 北区 第1面 遺構完掘状況 (上が西) 2. 北区 第1面 土坑0007景石検出状況 (南東から)
図版38	遺構	1. 北区 第1面 石室0005検出状況 (南西から) 2. 北区 第1面 石室0005検出状況 (北西から)
図版39	遺構	1. 北区 第2面 遺構完掘状況 (上が西) 2. 北区 第2面 暗渠状石組み遺構0081検出状況 (南東から)
図版40	遺構	1. 北区 第3面 遺構完掘状況 (上が西) 2. 南区 第1面 遺構完掘状況 (上が西)
図版41	遺構	1. 南区 第2面 遺構完掘状況 (上が北) 2. 南区 第2面 土坑0148甕検出状況 (北から)
図版42	遺構	1. 南区 第2面 井戸0191完掘状況 (南から) 2. 南区 第3面 遺構完掘状況 (上が北)
図版43	遺構	1. 南区 第3面 土坑0280検出状況 (南東から) 2. 南区 第4面 遺構完掘状況 (上が北)
図版44	遺物	1. 北区 第2層出土遺物 2. 北区 第3面 土坑0226出土遺物
図版45	遺物	1. 北区 第3面 土坑0211出土遺物 2. 北区 第3面 土坑0336出土遺物
図版46	遺物	1. 南区 第1層出土遺物 2. 南区 第2面 土坑0148出土遺物
図版47	遺物	1. 南区 第2面 土坑0165出土遺物 2. 南区 第2面 土坑0183出土遺物
図版48	遺物	1. 南区 第2面 土坑0187出土遺物 2. 南区 第3面 土坑0279出土遺物
図版49	遺物	1. 南区 第3面 土坑0280出土遺物 2. 南区 第3面 土坑0286出土遺物
図版50	遺物	1. 南区 第3層出土遺物 2. 南区 第4面 土坑0357出土遺物

插图目次

図 1	調査位置図 1 (1 : 2500)	1
図 2	調査経過写真	2
図 3	調査区地区割り・基準点配置図 (1 : 400)	4
図 4	調査位置図 2	5
図 5	既往調査位置図 (1 : 5000)	6

表目次

表 1	既往調査一覧表	10
表 2	遺構概要表	14
表 3	遺物概要表	20
表 4	遺物観察表	42

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

京都府京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 160 番地 2 ほかにおいて、千切屋株式会社による開発事業が計画された。開発予定地は平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡の範囲内にあたる。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。その結果、平安時代から江戸時代までの遺構および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、千切屋株式会社から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は令和3年4月1日から現地作業に着手し、7月13日に全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により敷地内の北西部および南東部に各1箇所、計2箇所を設定した。北西部の調査区（北区）はL字形で、東西短辺 10.0 m、長辺 18.0 m、南北 22.0 m、面積は 276.0 m²、南東部の調査区（南区）は横長方形で、東西 14.0 m、南北 12.0 m、面積は 168.0 m²、両調査区を合わせた総調査面積は 444.0 m²である。

近現代盛土および整地土を重機掘削によって除去し、その後、人力によって第1面の精査および遺構検出を行った。その結果、北区で江戸時代中期の遺物を埋土中に包含する土坑、井戸数基、石室1基、南区で江戸時代中期の遺物を埋土中に包含する土坑多数、井戸数基を検出した。これらを人力にて掘削後、記録作業を実施した。また、第1面の遺構ベース層を掘削、除去した後、第2面の精査、遺構検出を行った。当該遺構面においては、南北両調査区で安土桃山時代から江戸時代前期の遺物を埋土中に包含する土坑を多数検出し、第1面と同様に人力掘削および記録作

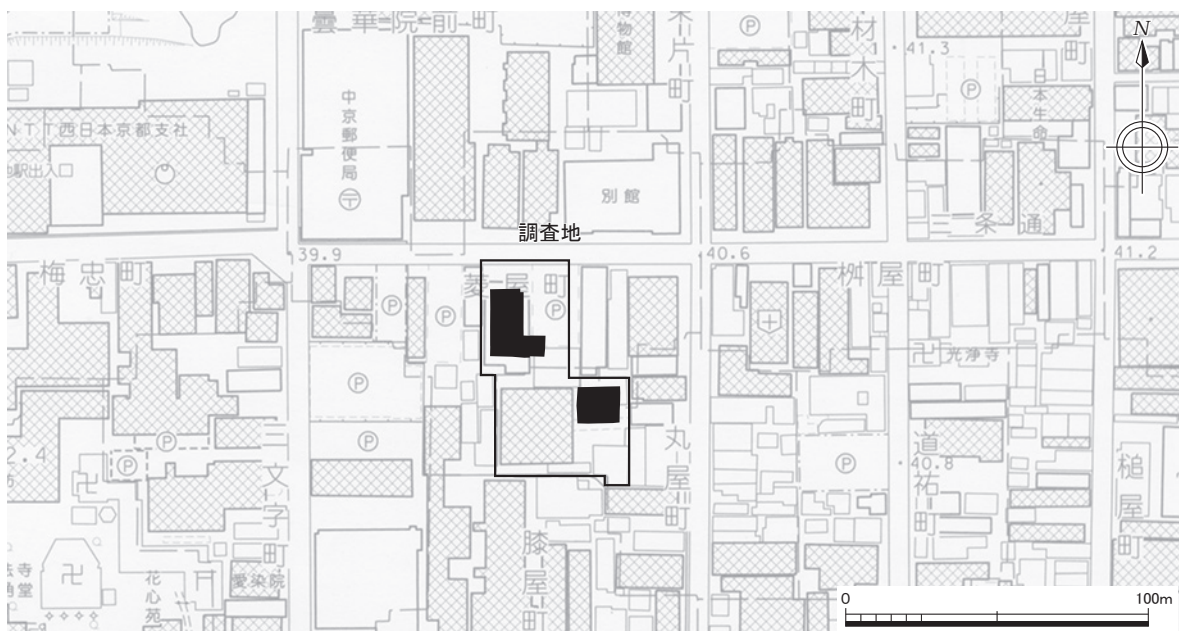


図1 調査位置図1（1：2500）



1. 北区調査前（南東から）



2. 北区重機掘削作業（北西から）



3. 北区層間掘削作業（北東から）



4. 北区第3面遺構掘削作業（北から）



5. 南区第3面遺構掘削作業（北西から）



6. 南区第4面遺構検出作業（南西から）



7. 南区埋め戻し作業（北から）



8. 北区調査完了後（北西から）

図2 調査経過写真

業を実施した。その後、第2面の遺構ベース層を掘削、除去した時点で北区では調査地における基盤層に達した。一方、南区においては平安時代中期の遺物を包含する堆積層が部分的に残存していることが判明した。そのため、北区では基盤層上面、南区では遺物包含層上面を第3面として精査、遺構検出を行い、北区で室町時代の遺物を埋土中に包含する土坑多数を、南区で鎌倉時代の遺物を埋土中に包含する土坑数基を検出した。これらを掘削、記録作業を実施後、南区については遺物包含層を掘削、除去したところ基盤層に達したため、当該層上面を第4面として精査、遺構検出を行った。その結果、溝状遺構2条とピット数基を検出し、これらの掘削、記録後、下層確認を行った後、埋め戻しを行った。

なお、写真撮影機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にT.1、T.2を設置し、その2点からトータルステーションによりT.3、T.4を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

T.1	X = -110,013.607 m	Y = -21,715.043 m	H = 40.563 m
T.2	X = -109,967.733 m	Y = -21,732.796 m	H = 40.765 m
T.3	X = -110,000.722 m	Y = -21,699.303 m	H = 40.789 m
T.4	X = -109,990.681 m	Y = -21,741.933 m	H = 40.719 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳陽一、編集作業は吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

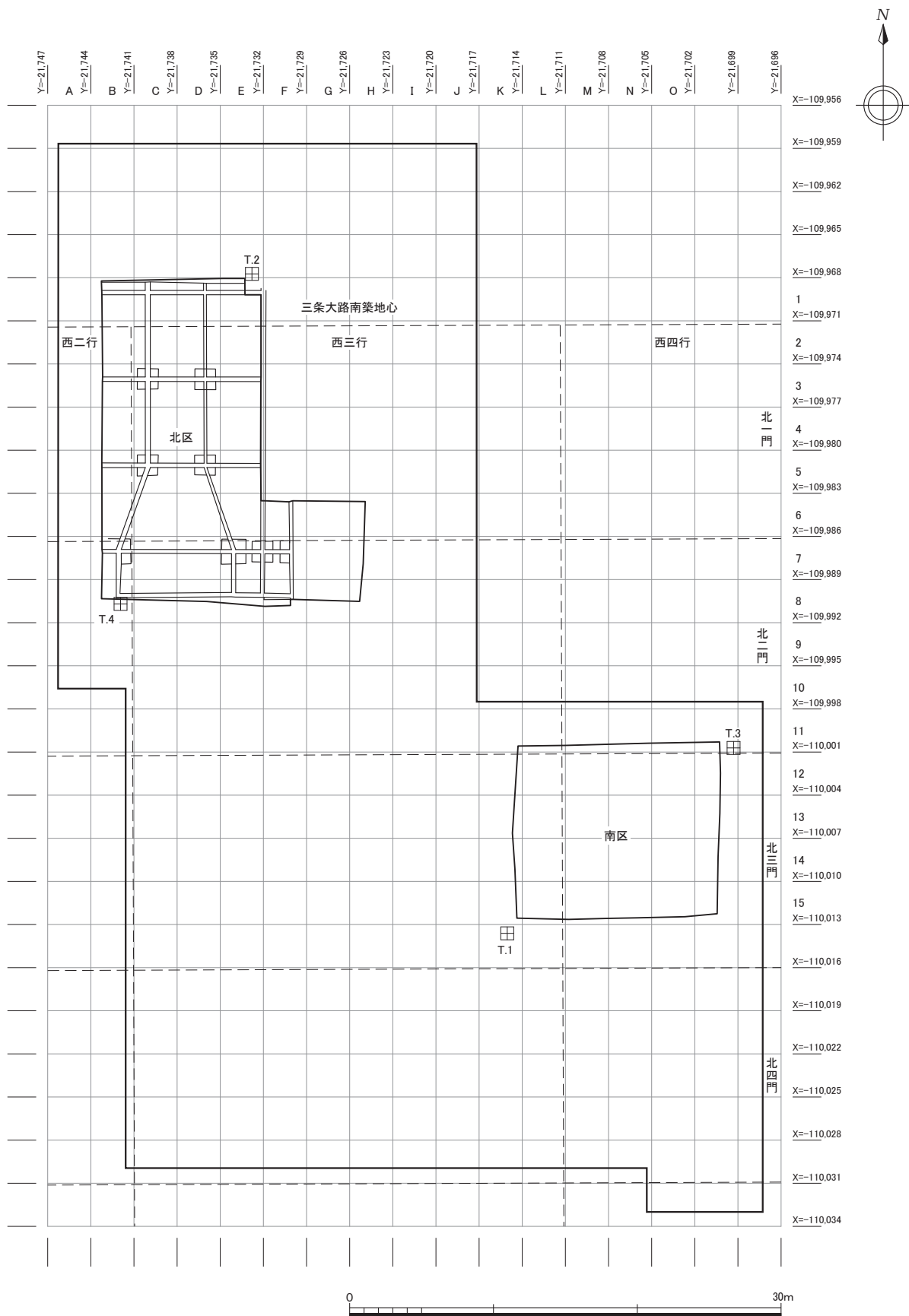


図3 調査区地区割り・基準点配置図 (1 : 400)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境（図4）

調査地は、鴨川扇状地上に位置し、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である烏丸御池遺跡の範囲内に含まれ、平安京の条坊では左京四条四坊一町の北東部に相当する。当町については、『山槐記』保元三（1158）年七月二十一日条に「今曉東洞院東六角北焼亡、故右衛門大夫光忠後家云々」とあり、平安時代後期には藤原光忠の邸宅が存在したようである⁽¹⁾が、調査地がその屋敷地の範囲に含まれていたかは不明である。

また、『吾妻鏡』正治三（1199）年二月三日条に「甲申。未尅。掃部入道。佐佐木左衛門尉定綱。小山左衛門尉朝政（為大番勤仕在京）朝親行幸仙洞（二条殿。）春宮二。七条院一宮。同臨幸。爰越後國住人城四郎平長茂（城四郎助國四男）引牽軍兵。圍朝政三条東洞院宿廬。」、元久二（1205）年閏七月二十六日条に「辛亥。晴。右衛門權佐朝雅候仙洞。－中略－退出于六角東洞院宿廬」とあり⁽²⁾、鎌倉時代初期には左京四条三坊十六町または四条四坊一町の東洞院通付近に鎌倉幕府京都守護である平賀朝雅の宿所があったと考えられる。

北隣の左京三条四坊四町は、平安時代末における以仁王と式子内親王の高倉宮の推定地であり、室町時代以降は瑞雲山通玄寺曇華院が存在していた。京都の市街地は室町時代後期の応仁・文明の乱（1467～1477年）以後、縮小して「上京」と「下京」に分かれ、各々「上京惣構」、「下京惣構」によって囲まれていたが、調査地は「下京」地域に包含され、「下京惣構」の南北中央東限付近に推定される⁽³⁾。

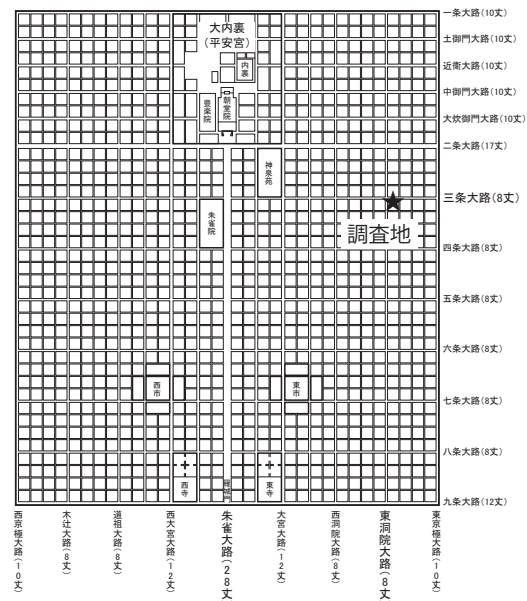


図4 調査位置図2

註

- (1) 日本史籍保存会編纂部編集 『史料通覧 山槐記 一』 1916年
- (2) 与謝野寛ほか 『日本古典全集第一回 吾妻鏡 第四』 1926年
- (3) 高橋康夫 『京都中世都市研究』 1983年

2 既往の調査（図5、表1）

調査地周辺でこれまでに実施された主要な調査について、概要を述べる。

2019年の発掘調査（図5-1、表1-1、以下図・表番号省略）は、今回の調査地に最も近接する。当該調査では平安時代中期の土坑、平安時代後期の高倉小路西側溝、建物、門、塀など、鎌倉時代から室町時代の門、塀など、室町時代後期から江戸時代前期の下京惣構の堀、塀、井戸など、江戸時代中期から末期の石室、竈、井戸、土坑などが検出されている。

この他、四条四坊一町跡の南西部で1978年に実施された発掘調査（2）では、室町時代の井戸、江戸時代の井戸が検出された。1993年の立会調査（3）では、古墳時代前期の流路、室町時代の土坑、1996年の立会調査（4）では、弥生時代の流路、平安時代中期、鎌倉時代、江戸時代の土坑を検出している。

四条四坊二町跡では1990～1991年（5）、1993年（6）、2008年（7）に発掘調査が実施され

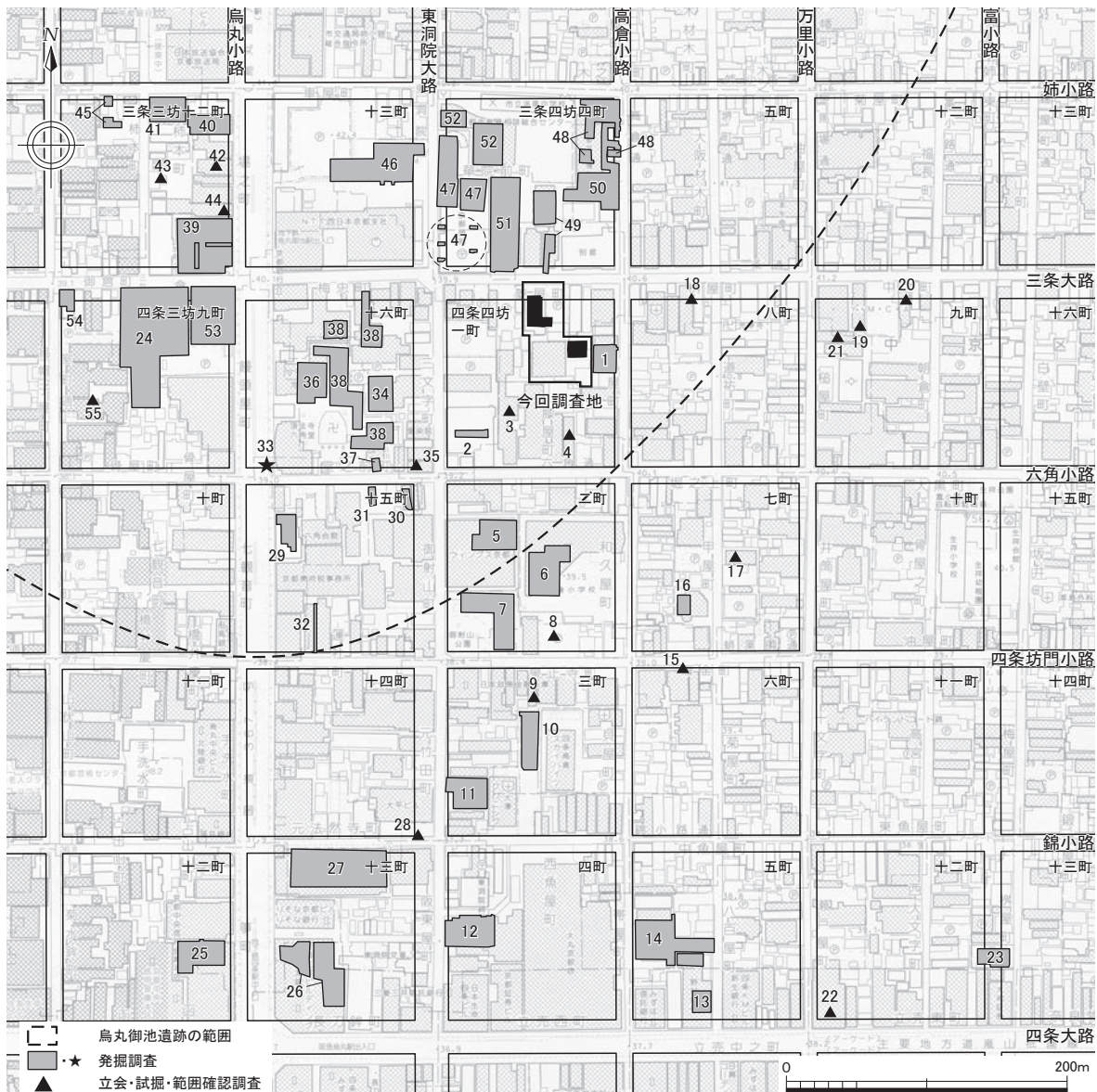


図5 既往調査位置図（1：5000）

ている。1990～1991年の調査では、縄文時代晩期から飛鳥時代の遺物を包含する流路、平安時代中期から後期の区画溝、井戸、土坑、江戸時代前期の溝、土坑が検出された。1993年の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の区画溝、井戸、土坑、室町時代の建物、礫敷遺構、柱穴、安土桃山時代から江戸時代の柵、建物、井戸、土坑、石室が検出されている。2008年の調査では、平安時代の井戸、鎌倉時代から室町時代の井戸、地下室、溝、土取り穴、江戸時代の井戸、溝が検出された。また、2015年の試掘調査（8）では、四条坊門小路北側溝を検出し、平安時代末期に埋没したと考えられる。

四条四坊三町跡では、1991年の立会調査（9）で飛鳥時代の流路、2006年の発掘調査（10）では、弥生時代の竪穴建物、流路、土坑、室町時代の堀、石組み井戸、溝、建物など、江戸時代中期から後期の掘立柱建物など、2019年の発掘調査（11）では、平安時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の土坑、柱穴、井戸、建物、流路、溝、戦国時代の土坑、井戸、溝、柱穴、建物、江戸時代の土坑、井戸、穴蔵、建物、溝が検出されている。

四条四坊四町跡では、南北中央部西辺で1991年に発掘調査が実施され（12）、弥生時代の溝、中世の土坑墓、江戸時代初期の鏡鑄造工房が検出された。

四条四坊五町跡では、南西部で1986年（13）、1989年（14）に発掘調査が実施されている。1986年の調査では、平安時代前期から後期の土坑、柱穴、落込み、鎌倉時代から室町時代の井戸、土坑、柱穴、江戸時代の井戸、土坑などが検出されている。1989年の調査では、古墳時代の流路、平安時代の整地層、土坑、鎌倉時代の井戸、柱穴など、安土桃山時代から江戸時代の井戸、溝、柱穴、石室、木棺墓を検出した。

四条四坊六町跡北辺部で2002年に実施された立会調査（15）では、古墳時代前期、鎌倉時代中期の遺物包含層が確認されている。

四条四坊七町跡内南西部で1987年に実施された発掘調査（16）では、弥生時代後期から古墳時代の溝、柱穴、平安時代中期の土坑、柱穴、溝状遺構、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸、土坑、安土桃山時代から江戸時代前期の井戸、土坑、江戸時代中期以降の井戸が検出された。1996年の立会調査（17）では、弥生時代の遺物が出土している。

四条四坊八町跡北辺部で2014年に実施された詳細分布調査（18）では、平安時代中期の三条大路路面が検出された。

四条四坊九町跡北部では1989年（19）、1993年（20）に立会調査、2007年（21）に試掘調査が実施されている。1989年および1993年の調査では、茶陶を含む陶磁器が大量に出土し、2007年の調査では、江戸時代前期の土師器、播鉢に加えて茶陶が僅かに出土している。

四条四坊十二町跡南西部で2000年に実施された発掘調査（22）では、平安時代中期から後期の湿地、井戸、溝、建物、四条大路北側溝、鎌倉時代から室町時代前期の方形竪穴建物、土坑、柱穴、室町時代中期から安土桃山時代の井戸、土坑、溝、柱穴を検出した。

四条四坊十二町、十三町跡・富小路跡で2020年に実施された発掘調査（23）では、飛鳥時代の遺物包含層、平安時代の富小路路面と東西側溝、堀、門、井戸など、室町時代の富小路路面と東

西側溝、江戸時代の石室、三和土、土坑が検出された。

四条三坊九町跡では、1987年、1988年、1996年に発掘調査が実施されている。1987年に実施された発掘調査（24）では、平安時代中期から後期の建物、池など、1988年の調査（54）では、室町時代後期の井戸、土坑、江戸時代以降の堆積層が検出された。1996年の調査（53）では、平安時代後期から末の鑑水、建物、井戸、土坑、鎌倉時代から室町時代の池、溝、石敷遺構、井戸、柱穴が検出されている。また、2009年の試掘調査（55）では中世の整地層が確認された。

四条三坊十二町跡の南東部で2020年に実施された発掘調査（25）では、弥生時代の方形周溝墓、竪穴住居、溝、古墳時代の土坑、平安時代のピット、土坑、溝、鎌倉時代から室町時代の土坑、埋甕遺構、井戸、石室、安土桃山時代から江戸時代の土坑、井戸、石組み遺構が検出されている。

四条三坊十三町跡では、南西部で1982年（26）、北辺部で1989～1990年（27）に発掘調査が実施されている。1982年の調査では、弥生時代の溝、建物、平安時代から江戸時代の井戸、土坑、溝など、1989～1990年の調査では、弥生時代の溝、落込、平安時代の井戸、土坑、溝、柱穴、鎌倉時代から室町時代の石組み井戸、礎石、溝、柱穴、落込、安土桃山時代以降の井戸、石室、土坑、溝状遺構、石組み遺構、埋甕、水琴窟などが検出された。

四条三坊十四町跡の南東角部で1983年に実施された立会調査（28）では、平安時代の流路が確認された。

四条三坊十五町跡の北西部で1977年に実施された発掘調査（29）では、平安時代の井戸、土坑、鎌倉時代の井戸、土坑、室町時代の建物、井戸、土坑などが検出された。北東角部で1978年に実施された発掘調査（30、31）では、平安時代の井戸、柱穴、中世の土坑、柱穴、近世の井戸、土坑、溝、石室などが検出されている。また、1979年に東西中央部南辺で実施された発掘調査（32）では、平安時代の四条坊門小路北側溝、中世の土坑、溝、柱穴、近世の瓦溜などが検出された。

四条三坊十六町跡南西隅部で1977年に実施された発掘調査（33）では、平安時代の六角小路路面および北側溝、1986年の発掘調査（34）では、平安時代後期の井戸、土坑、柱穴、鎌倉時代の柱穴、室町時代の柱穴列など、江戸時代の井戸、土坑、溝、落込、柱穴列、1992年に南東角部で実施された立会調査（35）では、室町時代後期の堀、東洞院大路の路面が検出されている。また、当町内の六角堂境内内では4次に亘って発掘調査が実施されている。1986年の1次調査（36）では、平安時代の井戸、室町時代の六角堂の東限の堀、門、池、江戸時代の六角堂の東限の堀が検出された。1992年の2次調査（37）では、平安時代の井戸、江戸時代の石室など、1994年および1996年の3・4次調査（38）では、平安時代の井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、堀、江戸時代の石列、太子堂に関連する池、参道、橋などが検出されている。

三条三坊十二町跡の南東隅部で1969年および1973年に実施された発掘調査（39）では、平安時代の井戸、土坑、三条大路北側溝、烏丸小路西側溝、鎌倉時代から安土桃山時代の井戸、柱穴、建物、石組み遺構が検出された。同町跡内北東部で1973年に実施された発掘調査（40、41）では、平安時代から鎌倉時代の井戸、土坑、室町時代の井戸、土坑、柱穴などが検出されている。北西部で2017年に実施された発掘調査（45）では、平安時代後期の姉小路南築地の内溝と考えられる

溝状遺構、鎌倉時代から室町時代前期の廃棄土坑と考えられる大規模土坑、姉小路南築地芯の推定ラインとはほぼ平行に走る溝状遺構、室町時代後期から江戸時代前期の区画溝と考えられる東西方向の溝状遺構、井戸が検出されている。また、1983年、2001年、2016年には試掘調査が実施されている。1983年の調査（42）では平安時代後期の整地層、室町時代から江戸時代の井戸、土坑、2001年の調査（44）では平安時代の土坑、室町時代の土坑、2016年の調査（43）では平安時代の整地土、室町時代から江戸時代の土坑、石室、石組み井戸が検出されている。

三条三坊十三町跡の南北中央東辺部で1991～1992年に実施された発掘調査（46）では、東洞院大路路面および西側溝、平安時代の井戸、室町時代の庭園遺構が検出された。

三条四坊四町跡西辺部で1977年に実施された調査（47）では、東洞院大路の東側溝が検出された。北東部で1979年に実施された発掘調査（48）では、平安時代の高倉小路の西側溝と江戸時代の石垣が検出された。その南西部で1983年に実施された発掘調査（49）では、江戸時代の遺構による削平のため、中世の遺構は検出されなかった。1979年調査の南で1986年に実施された発掘調査（50）では、平安時代の高倉小路路面および西側溝、室町時代の石室が検出された。1987年に実施された発掘調査（51）では、平安時代の井戸、築地、犬行、室町時代の築地、三条大路北側溝、江戸時代の石垣、地業、池状遺構が検出されている。北西部で2001年に実施された発掘調査（52）では、平安時代、室町時代、江戸時代の井戸が検出された。

表 1 既往調査一覧表

	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	左京四条四坊一町	発掘	平安時代の溝・堀・門・建物・柱穴列・土坑、鎌倉時代から室町時代の堀・門・布掘り基礎・土坑群、江戸時代の石室・地下室・竈・集石土坑・柱穴列・井戸を検出。	『平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-7 埋文研 2020 年
2	左京四条四坊一町	発掘	室町時代の井戸、江戸時代の井戸を検出。	「平安京左京四条四坊一町」『昭和 53 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
3	左京四条四坊一町	立会	古墳時代の流路、室町時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 5 年度』文化観光局 1994 年
4	左京四条四坊一町	立会	弥生時代の流路、平安時代の土坑、鎌倉時代の土坑、江戸時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』文化観光局 1997 年
5	左京四条四坊二町	発掘	古墳時代の流路、平安時代の溝・井戸、室町時代の蹲踞、江戸時代の井戸を検出。	「平安京左京四条四坊」『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994 年
6	左京四条四坊二町	発掘	平安時代から鎌倉時代の溝・井戸、室町時代の建物・溝・礎敷遺構、安土桃山時代から江戸時代の建物・井戸・石室・溝・路地を検出。	「平安京左京四条四坊」『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1996 年
7	左京四条四坊二町	発掘	平安時代の井戸、鎌倉時代の井戸・地下室、室町時代の甕掘付穴・井戸・集石土坑、江戸時代の土蔵・甕掘付穴・石室・井戸を検出。	『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-12 埋文研 1996 年
8	左京四条四坊二町	試掘	平安時代の四条坊門小路北側溝を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 27 年度』文化市民局 2016 年
9	左京四条四坊三町	立会	飛鳥時代の流路を検出。	「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 3 年度』文化観光局 1992 年
10	左京四条四坊三町	発掘	弥生時代の竪穴建物・流路、室町時代の堀・石組み井戸・溝・建物など、江戸時代の掘立柱建物などを検出。	『平安京左京四条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-28 埋文研 2007 年
11	左京四条四坊三町	発掘	平安時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の土坑・柱穴・井戸・建物・流路・溝、戦国時代の土坑・溝・井戸・柱穴・建物、江戸時代の土坑・井戸・穴蔵・建物・溝を検出。	『平安京左京四条四坊三町跡』京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643、645、646、646-1 の発掘調査（株）四門 2019 年
12	左京四条四坊四町	発掘	弥生時代の溝、鎌倉時代から室町時代の土坑墓、江戸時代の鏡鑄造工房を検出。	『平安京左京四条四坊』京都文化博物館調査研究報告第 9 集 京都府京都文化博物館 1993 年
13	左京四条四坊五町	発掘	平安時代の柱穴・落込など、鎌倉時代から室町時代の井戸・柱穴など、江戸時代の井戸・堀込などを検出。	「平安京左京四条四坊」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988 年
14	左京四条四坊五町	発掘	古墳時代の流路、平安時代の整地層・土坑、鎌倉時代の井戸・柱穴など、安土桃山時代から江戸時代の井戸・溝・柱穴・石室・木棺墓を検出。	「平安京左京四条四坊」『平成元年 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994 年
15	左京四条四坊六町	立会	古墳時代の遺物包含層、鎌倉時代の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 14 年度』文化市民局 2003 年
16	左京四条四坊七町	発掘	弥生時代の溝、平安時代の区画溝、室町時代の井戸、安土桃山時代から江戸時代の井戸・土坑を検出。	「平安京左京四条四坊」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1989 年
17	左京四条四坊七町	立会	鎌倉時代の土坑、江戸時代の落込を検出。弥生土器（甕）を採取。	「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』文化市民局 1997 年
18	左京四条四坊八町	詳細分布	平安時代の三条大道路面を検出。	『京都市内遺跡詳細分布報告 平成 26 年度』文化市民局 2015 年
19	左京四条四坊九町	立会	江戸時代の井戸を検出。	「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年 文化観光局 1990 年
20	左京四条四坊九町	立会	江戸時代の落込を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 5 年度』文化市民局 1994 年
21	左京四条四坊九町	試掘	江戸時代の廃棄土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 19 年度』文化市民局 2008 年
22	左京四条四坊十二町	発掘	平安時代の湿地・井戸・溝・建物・四条大路北側溝、鎌倉時代の方形竪穴建物・柱穴など、室町時代から安土桃山時代の井戸・溝・柱穴などを検出。	「平安京左京四条四坊」『平成 12 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2003 年

	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
23	左京四条四坊十二・十三町	発掘	飛鳥時代の遺物包含層、平安時代の富小路路面と東西側溝・堀・門跡・井戸・布掘り遺構・柱穴、室町時代の富小路路面と東西側溝・土坑、江戸時代の石室・タタキ・土坑を検出。	『平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-3 2020 年
24	左京四条三坊九町	発掘	平安時代中期から後期の建物・池などを検出。	『平安京左京四条三坊』『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991 年
25	左京四条三坊十二町	発掘	弥生時代の方形周溝墓・堅穴住居・溝、古墳時代の土坑、平安時代のピット・土坑・溝、鎌倉時代から室町時代の土坑・埋蔵遺構・井戸・石室、安土桃山時代から江戸時代の土坑・井戸・石組み遺構を検出。	『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-26 埋文研 2007 年
26	左京四条三坊十三町	発掘	弥生時代の建物跡・溝、平安時代の井戸・土坑・溝を検出。	『平安京左京四条三坊十三町 - 長刀鉾町遺跡 -』平安京跡研究調査報告第 11 輯 (財古代学協会 1984 年
27	左京四条三坊十三町	発掘	弥生時代の落込・溝、平安時代の井戸・溝・柱穴など、鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の石組み井戸・礎石・溝・柱穴・落込、安土桃山時代から江戸時代の井戸・石室・土坑・溝状遺構・石組み遺構・便所埋蔵・水琴窟などを検出。	『平安京左京四条三坊 2』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991 年
28	左京四条三坊十四町	立会	平安時代の流路を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 58 年度』文化観光局 1984 年
29	左京四条三坊十五町	発掘	平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸、室町時代の土坑を検出。	『平安京左京四条三坊十五町』『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
30	左京四条三坊十五町	発掘	平安時代の井戸、鎌倉時代の柱穴、江戸時代の井戸・区画溝を検出。	『平安京左京四条三坊十五町 1』『昭和 53 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
31	左京四条三坊十五町	発掘	平安時代の井戸、室町時代の六角堂関連の門・堀・池、江戸時代の六角堂東限の堀を検出。	『平安京左京四条三坊十五町 2』『昭和 53 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2012 年
32	左京四条三坊十五町	発掘	平安時代の四条坊門小路北側溝、鎌倉時代から室町時代の柱穴・溝、江戸時代の柱穴を検出。	『平安京左京四条三坊跡』『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
33	左京四条三坊十六町	発掘	平安時代の六角小路路面と北側溝、鎌倉時代の溝・土坑、室町時代の井戸・溝・土坑、安土桃山時代の井戸・礎石、江戸時代の井戸・土坑を検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982 年
34	左京四条三坊十六町	発掘	弥生時代の溝、平安時代の溝・地鎮、江戸時代の井戸を検出。	『平安京左京四条三坊』『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1989 年
35	左京四条三坊十六町	立会	平安時代の土坑・包含層、鎌倉時代の土坑・包含層を検出。	『左京四条三坊十六町』『京都市内遺跡立会調査概報 平成 4 年度』文化観光局 1993 年
36	左京四条三坊十六町	発掘	平安時代の井戸、室町時代の六角堂東限の門・堀・池、江戸時代の六角堂東限の堀・塵芥処理土坑を検出。	『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告第 2 輯 (財古代学協会 1980 年
37	左京四条三坊十六町	発掘	平安時代の井戸、室町時代の土坑、江戸時代の石室を検出。	『平安京跡六角堂跡第二次発掘調査概報』(財古代学協会 2006 年
38	左京四条三坊十六町	発掘	弥生時代の流路、平安時代の井戸・溝、鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の堀・溝、江戸時代の太子堂関連の池・参道・橋・堀・井戸などを検出。	『六角堂 3・4 次調査』平安京跡研究調査報告第 21 輯 (財古代学協会 2006 年
39	左京三条三坊十二町	発掘	平安時代の井戸・土坑・三条大路北側溝・烏丸小路西側溝、鎌倉時代から安土桃山時代の井戸・柱穴・建物・石組み遺構を検出。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第 7 輯 (財古代学協会 1983 年 (1 次・4 次)
40	左京三条三坊十二町	発掘	平安時代末から鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第 7 輯 (財古代学協会 1983 年 (2 次)
41	左京三条三坊十二町	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第 7 輯 (財古代学協会 1983 年 (3 次)
42	左京三条三坊十二町	試掘	GL-0.6 m 以下平安時代後期の整地層、室町時代から江戸時代の井戸、土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 58 年度』文化観光局 1984 年

	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
43	左京三条三坊十二町	試掘	GL-0.5 ～ 2.5 mの間で江戸時代、室町時代の多数の土坑、石室、石組み井戸などを確認。GL-2.5 mで平安時代の整地土を確認	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年
44	左京三条三坊十二町	試掘	平安時代の土坑、室町時代の土坑などを検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成13年度』文化市民局 2002年
45	左京三条三坊十二町	発掘	平安時代後期の姉小路南築地内溝、鎌倉時代から室町時代の廃棄土坑、姉小路南築地芯推定ラインにはほぼ平行する溝状遺構、室町時代後期から江戸時代前期の東西方向に走る溝状遺構、井戸などを検出。	『平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告19 株式会社イビソク 関西支店 2018年
46	左京三条三坊十三町	発掘	東洞院大路路面・西側溝、平安時代の井戸、室町時代の井戸・土坑・柱穴・堀・庭園遺構（池）を検出。	『平安京左京三条三坊』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概報』埋文研 1995年
47	左京三条四坊四町	発掘	平安時代の東洞院大路東側溝を検出。	『東洞院大路曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』平安京跡研究調査報告第3輯 近畿郵便局・平安博物館 1977年
48	左京三条四坊四町	発掘	平安時代の高倉小路西側溝、江戸時代の石垣を検出。	『平安京高倉宮・曇華院の発掘調査』叻古代学協会 1979年
49	左京三条四坊四町	発掘	鎌倉時代から江戸時代の遺物包含層を検出。	『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告第8輯 叻古代学協会 1983年
50	左京三条四坊四町	発掘	平安時代の高倉小路西側溝・井戸、室町時代の井戸・石室、江戸時代の火災処理土坑を検出。	『平安京高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第8輯 叻古代学協会 1987年
51	左京三条四坊四町	発掘	平安時代の井戸・三条大路北築地と犬走、室町時代の築地跡・三条大路北側溝、江戸時代の石垣・地業・池状遺構を検出。	『平安京左京三条四坊四町』京都文化博物館（仮称）調査研究報告第2集 叻京都文化財団 1988年
52	左京三条四坊四町	発掘	平安時代の井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代から江戸時代の井戸・溝を検出。	『平安京左京三条四坊四町跡』京都市埋蔵文化財調査概報2001-10 埋文研 2003年
53	左京四条三坊九町	発掘	平安時代後期から末の鑓水・建物・井戸・土坑、鎌倉時代から室町時代の池・溝・石敷遺構・井戸・柱穴などを検出。	『平安京左京四条三坊九町-第一勧業銀行京都支店改築に伴う調査-』古代文化調査会 2001年
54	左京四条三坊九町	発掘	室町時代後期の井戸・土坑、江戸時代以降の堆積層などを検出。	『平安京左京四条三坊』『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
55	左京四条三坊九町	試掘	GL-1.4 mで中世整地層、-1.8 mで基盤層を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』文化市民局 2011年

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序

(1) 北区 (図版 1～3)

調査開始時における現地表面の標高は、調査区北西部で40.701m、北東部で40.717m、南西部で40.655m、南東部で40.742mであり、北東から南西へと向かって下がる地形を呈する。当調査区内の大半に既存建物の基礎が格子状に残されており、その深度は現地表面から最小約0.5m、最大約1.0m、基礎掘方は現地表面から最大で約1.2mに達する。基礎に仕切られた柵目状の空間には近現代盛土が堆積しており、その層厚は最小で約0.9m、最大で約1.2mを測る。当該層を除去したところで10YR4/2～3灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する細～粗粒砂、10YR7/3～4にぶい黄橙色細粒砂からなる第1層に達する。層厚は最小で約0.4m、最大で約0.6m、17世紀後半の所産と考えられる遺物を包含する。第1層直下に10YR4～5/1褐灰色細粒砂、2.5Y4/1黄灰色細～粗粒砂からなる第2層が堆積しており、層厚は最小で約0.4m、最大で約0.7m、15世紀後半の所産と考えられる遺物を包含する。第2層を除去すると10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂からなる基盤層が露出する。当該層は無遺物層である。調査は、第1層上面を第1面、第2層上面を第2面、基盤層上面を第3面として実施した。

(2) 南区 (図版 4、5)

調査区北西部の現地表面の標高は40.684m、北東部で40.685m、南西部で40.501m、南東部で40.650mであり、北東から南西へ向かって下がる地形を呈する。現地表面から0.8～1.0mは近現代盛土で、当該層を除去したところで10YR4/2～3灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する細～粗粒砂からなる第1層に達する。層厚は最小で約0.4m、最大で約0.6mを測り、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる遺物を包含する。第1層直下に10YR3/1黒褐色細粒砂からなる第2層が堆積しており、層厚は約0.4m、15世紀中葉～後半の所産と考えられる遺物を包含する。第2層を除去すると10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂からなる基盤層が露出するが、主に調査区南東部において、9世紀後半～10世紀前半の所産と考えられる遺物を包含する5Y7/4浅黄色極細粒砂(第3層)が堆積する。層厚は最も良好に残存している調査区南東部で約0.4mを測る。第3層を除去すると上述の基盤層に達し、当該層は無遺物層である。調査は、第1層上面を第1面、第2層上面を第2面、第3層上面を第3面、基盤層上面を第4面として実施した。

2 検出遺構

表2 遺構概要表

	時代	遺構	備考
北区	室町時代	柱穴 0214、土坑群	
	安土桃山時代～江戸時代	礎石列 0079、礎石列 0369、暗渠状石組み遺構 0081、土坑群、柱穴	
	江戸時代	礎石列 0368、石室 0005、井戸 0028、井戸 0029、井戸 0043、井戸 0078、土坑群	
南区	古墳時代	土坑 0357	
	鎌倉時代	土坑群、ピット群	
	室町時代	井戸 0191	
	安土桃山時代～江戸時代	土坑 0148、土坑群	
	江戸時代	布基礎状遺構 0046、布基礎状遺構 0065、布基礎状遺構 0068、井戸 0058、井戸 0070、土坑群	

(1) 北区

i) 第1面 (図版7、8、37-1)

近代以降の攪乱に加え、礎石列、石室、井戸、土坑を主な遺構として検出した。

〔礎石列〕

礎石列0368 (図版9)

調査区北東部で検出した。礎石0019、0020、0021からなる、南北方向の礎石列である。掘方は何れも平面楕円形を呈し、0019が南北0.6m、東西0.39m以上、検出面から遺構底部までの深さ0.15m、0020が南北0.62m、東西0.44m以上、検出面から遺構底部までの深さ0.34m、0021が南北0.59m、東西0.53m以上、検出面から遺構底部までの深さ0.23mを測る。遺構埋土は10YR4/1褐灰色細粒砂あるいは10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂である。柱間寸法は1.0mを測る。西と南に攪乱、東に土坑0022、0023が切り込まれ、北は調査区外となるため、検出した3基の礎石列の南北延長、東西への展開は不明である。

〔土坑〕

土坑0007 (図版9、37-2)

調査区南西部で検出した、東西長4.17m、南北長2.25m、検出面から遺構底部までの深さ0.77mを測る横長方形の土坑である。遺構埋土は10YR2/1黒色細～粗粒砂で、遺構の西半に景石と考えられる石が2石、東西方向にほぼ並行して据えられていた。北側のものは幅0.99m以上、厚さ0.7m、高さ0.9m、南側のものは幅1.92m、厚さ0.63m、高さ0.9mを測る。これら景石の直下には17世紀後半の所産と考えられる遺物が包含されていた。南側の景石には、南面東端部に直径0.3m、深さ6.0cmの削り込みが施されていることから、これら2石は、元来は蹲踞として用いられた

ていたと考えられる。

〔石室〕

石室0005（図版10、38）

調査区北東部で検出した。外寸で東西2.0 m、南北3.5 mの南北方向の石室であるが、既存建物基礎によって遺構の北西部が破壊されており、側壁の石組みは西辺および北辺の大部分が失われていた。遺構内には、当遺構の上から切り込まれた攪乱0003の埋土が包含されていた。当該攪乱が掘り込まれた際、当遺構の石組みは破壊されずに残されたためと考えられる。残存していた石組みは三段分で、石間の目地には漆喰が塗り込まれていた。検出面から遺構底部までの深さは最大1.5 m、内法は東西1.5 m、南北2.5 mを測る。また、南辺の側壁石組みが二重になっており、改修がなされていると考えられ、改修前の南北内法は2.8 mである。加えて、南東部には東西0.75 m、南北0.7 mの方形を呈する張り出し状に石組みが構築されており、この石組の下端が石室底部よりも0.1 m上位に位置する。このことから、この張り出しは石室の構築後に追加されたものと考えられる。したがって、当遺構は少なくとも二度の改修を受けているものと考えられる。

〔井戸〕

井戸0028（図版11）

調査区の南北中央部東壁際で検出した。石組みの枠を有し、枠内面は全面に漆喰が塗られ、平滑に仕上げられていた。掘方は直径約1.9 mの円形で、枠外寸が直径1.6 m、内寸は直径1.3 m、検出面から遺構底部までの深さは2.3 mを測る。埋土は10YR3/1 黒褐色細粒砂で、近代の遺物が包含されていたことから、埋没時期は近代に入ってからと考えられる。掘方を断割って遺構底部を確認したが、枠が崩落したため、遺構立面図の下半についてはレベル高から復元した。

井戸0029（図版11）

井戸0028の南で検出した。掘方は東西1.57 m以上、南北1.7 mの楕円形平面を呈し、石組みの円形枠を有する。石間の目地には漆喰が塗り込まれていた。枠外寸が直径1.57 m、内寸は直径1.17 m、検出面から遺構底部までの深さは2.77 mを測る。埋土は10YR3/4 暗褐色細粒砂で、近代の遺物が包含されていたことから、埋没時期は近代に入ってからと考えられる。掘方を断割って遺構底部を確認したが、枠が崩落したため、遺構立面図の下半についてはレベル高から復元した。

井戸0043（図版11）

調査区南東角部で検出した。掘方は直径約1.8 mの平面円形を呈し、石組みの円形枠を有する。枠の外寸は直径1.56 m、内寸は直径1.25 mを測る。検出面から3.25 mまで掘削を行ったが、遺構底部には達しなかったため、安全性を鑑み、遺構完掘を断念した。埋土は2.5Y4/1 黄灰色細粒砂で、近代の遺物が包含されていたことから、埋没時期は近代に入ってからと考えられる。また、掘方を断

割った際、杵が崩落したため、遺構立面図の下半についてはレベル高から復元した。

井戸0078（図版8）

調査区南東部で検出した。掘方は直径1.2mの平面円形を呈し、石組みの円形杵が一段残存していた。杵の外寸は直径1.15m、内寸は直径0.68m、検出面から遺構底部までの深さは0.8mである。埋土は強い粘性を有する5Y7/1灰白色細粒砂～6/1灰色細粒砂である。

ii）第2面（図版12、13、39－1）

調査区中央部は、第1面で検出した攪乱および土坑が基盤層にまで達しており、当遺構面に属する遺構は残存していなかった。一方で、調査区北東部で礎石列1条、調査区南北中央西半で礎石列1条、礎石を有する柱穴数基、調査区南北中央東部で暗渠状の石組み遺構1基を検出した。

〔礎石列〕

礎石列0079（図版14）

調査区南北中央西壁際で検出した、南北方向に並ぶ4石からなる礎石列で、柱間は1.0mを測る。各柱穴の掘方は平面楕円形を呈し、規模は南北0.43m～0.55m、東西0.21m以上～0.38m以上、検出面から遺構底部までの深さは4.0cm～0.18mを測る。当礎石列が西へ展開するか否かは調査区外になるため不明であるが、南北方向の延長上および当礎石列以東において、当礎石列に並ぶ礎石や柱穴は検出されなかった。これらのことから、検出した礎石列を東限として西へ展開する南北3間の東西棟建物の可能性が考えられる。

礎石列0369（図版14）

第1面で検出した礎石列0368の直下で検出した。検出された礎石は礎石列0368と同じく三石で、南北方向に並んでおり、柱間は1.0mである。南と東には第1面で検出した攪乱および土坑が切り込まれ、西には土坑0086、0087があり、北は調査区外になるため、南北延長および東西への展開は不明である。

〔石組み遺構〕

暗渠状石組み遺構0081（図版15、39－2）

調査区南北中央部東寄りで検出した。遺構の北西部は第1面から切り込まれた攪乱0003および0027に切られる。幅0.25mの北西から南東に向かって走る溝状の窪みの両肩部分に約0.3m四方、厚さ0.1m～0.2mの石を並べ、それらの直上に長辺0.47m、短辺0.38m、厚さ8.0cmの平坦な石を天板として据えたと思われる状態で検出された。溝両肩部の石組み直上に、溝に蓋をするような状況で平坦な石が据えられていたことから、暗渠状遺構と判断した。溝内の埋土は10YR3/1黒褐色細粒砂で、長2.15m分を検出し、両肩石組み上面から溝底部までの深さは0.19mを測る。

iii) 第3面 (図版16、17、40-1)

多数の大型土坑に加え、ピット数基、礎石を有する柱穴1基を検出した。土坑群からは15世紀前半の所産と考えられる遺物が出土しており、基盤層を形成する黄褐色シルト層直下の砂礫層にまで達していることから、シルト層を目的とした室町時代の土取り土坑と考えられる。ピットは調査区南北中央西壁際に集中しているが、建物としてまとまるものは検出されなかった。

〔柱穴〕

柱穴0214 (図版18)

調査区北東部で検出した。掘方平面形は方形に近く、南北0.77m、東西0.8m、検出面から遺構底部までの深さは0.36mを測る。遺構埋土は2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂からなり、基盤層のシルトブロックを含む。遺構底部中央西寄りに礎石が据えられており、その規模は長辺0.38m、短辺0.31m、厚さ0.18mを測る。一方で、当遺構は単独での検出であり、建物を想定することができる他の柱穴や礎石は検出されなかった。

(2) 南区

i) 第1面 (図版19、40-2)

近代以降の攪乱に加え、近世の布基礎状遺構3基、井戸2基、土坑を検出した。

〔布基礎状遺構〕

布基礎状遺構0046

調査区北西角部で検出した、東西方向の布基礎状遺構である。幅0.8m、検出長4.2m、検出面から遺構底部までの深さは約0.4mを測る。埋土は5Y7/1灰白色細～粗粒砂で、10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂が混じる。18世紀前半の所産と考えられる遺物が出土している。

布基礎状遺構0065

調査区北東角部で検出した、L字形の布基礎状遺構である。南北辺は幅0.55m、長2.7m、検出面から遺構底部までの深さ0.35m、東西辺は幅1.2m、長4.5m、検出面から遺構底部までの深さ0.3m～0.5mを測る。南北辺は調査区北壁から、東西辺は調査区東壁から調査区外へと延伸する。埋土は5Y7/1灰白色細～粗粒砂で、10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂および小礫が混じる。17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる遺物が出土している。

布基礎状遺構0068

調査区南東角部で検出した、南向きのコ字形平面を呈する布基礎状遺構である。東辺東肩は調査区外になるため、検出できなかった。北辺は幅0.98m、東西長4.2m、検出面から遺構底部までの深さ0.15m～0.2m、西辺は幅0.8m、南北長1.9m、検出面から遺構底部までの深さ0.1m～0.2m、東辺は幅0.28m以上、南北長2.5m、検出面から遺構底部までの深さ0.1mを測る。埋土は5Y7/1灰白色細～粗粒砂で、拳大から人頭大の礫が多量に混じる。西辺および東辺は調査区南壁から調査区

外へと延伸する。

〔井戸〕

井戸0058（図版20）

調査区南西端部で検出した。掘方は直径1.0mの平面円形を呈し、円形の埴積み杵を有する。杵は外寸で直径0.8m、内寸は直径0.9m、検出面から遺構底部までの深さは3.1mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色細粒砂で、18世紀の所産と考えられる遺物が包含されていた。掘方を断割って遺構底部を確認したが、杵が崩落したため、遺構立面図の下半についてはレベル高から復元した。

井戸0070（図版20）

調査区北東部の東壁際で検出した。掘方は直径1.2mの平面円形を呈し、円形の埴積み杵を有する。杵は外寸で直径0.8m、内寸は直径0.75m、検出面から遺構底部までの深さは3.0mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色細粒砂である。杵の構築方法が井戸0058と同一であることから、両者は同時期の遺構と考えられる。掘方を断割って遺構底部を確認したが、杵が崩落したため、遺構立面図の下半についてはレベル高から復元した。

ii) 第2面（図版21、41－1）

大型の土坑多数に加え、埋め甕を有する土坑1基、井戸1基を検出した。調査区西半および北東部で検出した土坑群は平面規模が大きく、遺構底部も基盤層にまで達する。これらの土坑群は埋土中に16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる遺物を包含していた。柱穴はいずれも単独であり、建物としてまとまるものは検出されなかった。

〔土坑〕

土坑0148（図版22、41－2）

調査区北西部で検出したが、遺構の西半が調査区外となる。掘方は平面円形で、直径1.4m、検出面から遺構底部までの深さは1.1mを測る。埋められていた甕は17世紀前半の所産と考えられる備前産の大甕で、甕内の埋土中には17世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されていた。

〔井戸〕

井戸0191（図版22、42－1）

調査区北東部で検出した。土坑0165、0182の直下で検出しており、遺構最上部は当該土坑2基によって破壊されていると考えられる。検出した掘方は東西2.16m、南北1.95m、検出面から遺構底部までの深さは2.9mを測る。検出面から1.76m掘削した時点で平面楕円形を呈する石組み杵を検出した。杵は外寸で長径1.37m、短径1.31m、内寸で長径1.0m、短径0.94m、石組みは三段から四段分が残存しており、高さは0.76mを測る。石組み杵直下には一辺0.7mを測る平面方形を呈する木製杵が据えられており、石組み杵下端から遺構底部までの深さは0.35mである。掘方検出面

から石組み枡検出面までの埋土中には17世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されており、石組み枡内には16世紀後半の所産と考えられる遺物が極わずかに包含されていた。これらのことから、当遺構は室町時代に構築され、上半部が江戸時代の土坑によって破壊されたことによって、下半部が残存していたものと考えられる。

iii) 第3面（図版23、42－2）

当遺構面では主に土坑、ピット群を検出した。土坑は調査区西半および北東部、ピットは調査区南東部に集中して検出された。土坑群からは12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる遺物が出土している。ピット群は、建物としてまとまるものは検出されなかった。

〔土坑〕

土坑0279（図版24）

調査区東西中央部北半で検出した大型土坑で、北は調査区外へ伸び、南部は土坑0280の北半を切る。平面形は長方形を呈し、規模は南北2.8m分を検出した。東西2.5m、検出面から遺構底部までの深さ0.12mを測る。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥で、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる遺物を包含していた。

土坑0280（図版25、43－1）

調査区中央部で検出した土器溜り土坑で、土坑0286の北西部を切り、北半を土坑0279に切られる。平面規模は、南北0.67m以上、東西1.6m、検出面から遺構底部までの深さは0.22mである。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色砂泥で、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されていた。

土坑0282

調査区東西中央部南半で検出した。土坑0286の西に位置し、土坑0286西部の一部を切る。平面形は不定形で、南北長2.7m、東西幅最大1.1m、検出面から遺構底部までの深さ0.54mを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色砂泥で、12世紀末の所産と考えられる遺物が包含されていた。

土坑0286（図版24）

調査区東西中央部南半で検出した土坑で、土坑0279の南に位置し、北西部を土坑0280に、北東部を土坑0291に切られる。平面形は長方形を呈し、規模は南北4.3m、東西2.4m、検出面から遺構底部までの深さは最大0.94mを測る。埋土は上下2層に分かれ、上層は2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、下層は2.5Y4/1黄灰色細粒砂で、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されていた。

土坑0291

調査区東西中央部北半で検出した土坑で、土坑0279の東に位置し、土坑0286の北東部を切る。平面形は不定形で、南北長3.2m、東西幅は最小0.29m、最大1.3m、検出面から遺構底部までの深

さ0.5mを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色砂泥で、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されていた。

iv) 第4面（図版26、43－2）

溝状遺構、ピット、土坑を検出したが、遺構密度は低く、遺物量も僅少である。

〔土坑〕

土坑0357

調査区南西部南壁近くで検出した平面方形を呈する土坑で、東端部を第3面で検出した土坑0286に切られる。南北0.48m、東西0.45m以上、検出面から遺構底部までの深さ0.26mである。埋土は5Y7/3浅黄色極細粒砂で、5世紀後半～6世紀前半の所産と考えられる遺物が包含されていた。

3 出土遺物

遺物はコンテナで76箱分が出土した。土師器が主で、他に瓦質土器、緑釉陶器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦埴類が出土している。また、北区第1面で検出した遺構から出土した遺物は極小片が大半で、図化できるものが少なかった。

表3 遺物概要表

	時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク 箱数
北区	平安時代～ 鎌倉時代	軒平瓦		軒平瓦 1 点	土師器 5 点	
	室町時代	土師器、瓦質土器、 施釉陶器		土師器 30 点、瓦質土器 2 点、施釉陶器 1 点	土師器 1 点	
	安土桃山時代～ 江戸時代	土師器、瓦質土器		土師器 14 点、瓦質土器 2 点		
	江戸時代	土師器、瓦質土器、 施釉陶器		土師器 8 点、瓦質土器 1 点、施釉陶器 1 点	土師器 3 点、青白磁 1 点	
南区	古墳時代	土師器		土師器 1 点		
	平安時代	土師器、緑釉陶器、 軒丸瓦、軒平瓦		土師器 1 点、緑釉陶器 3 点、軒丸瓦 5 点、軒 平瓦 3 点		
	鎌倉時代	土師器、白色土器、 山茶碗、白磁		土師器 29 点、白色土器 1 点、山茶碗 1 点、白 磁 1 点	土師器 4 点	
	室町時代	土師器		土師器 9 点	土師器 1 点、瓦質土器 1 点、施釉陶器 1 点	
	安土桃山時代～ 江戸時代	土師器		土師器 3 点		
	江戸時代	土師器、瓦質土器、 施釉陶器、焼締陶 器、染付、白磁、 青磁、道具瓦、埴		土師器 38 点、瓦質土器 1 点、施釉陶器 7 点、 焼締陶器 2 点、染付 5 点、白磁 1 点、青磁 1 点、 道具瓦 1 点、埴 1 点	土師器 6 点、施釉陶器 1 点	
	合計		84 箱	174 点（9 箱）	24 点（1 箱）	74 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で8箱増加した。

(1) 北区

i) 第1面遺構(図版27)

第1面で検出した遺構から出土した遺物は細片が多く、図化できたものは少ない。

〔土坑〕

土坑0007(図版27-1、2)

1は土師器皿Sで、口径11.0cm、器高1.7cmである。底部は平坦で、口縁部は直線的に緩やかに立ち上がり、端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11C～12A段階に属し、17世紀末～18世紀初頭の所産と考えられる。

2は土師器焙烙鍋で、口縁部および体部上部が残存しており、口径31.2cm、残存器高7.0cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外方へ強く屈曲して伸び、口縁端部は尖り気味に整形される。体部外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にハケ調整が施される。11B段階に属し、17世紀後半の所産と考えられる。

土坑0022(図版27-3)

3は土師器皿Sで、土坑0022から出土した。口径10.8cm、器高1.5cmで、底部は平坦で、口縁部は直線的に緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11C段階に属し、17世紀末の所産と考えられる。

ii) 第1層(図版27-4～8)

第1層に包含されていた遺物は、17世紀後半の所産と考えられるものが主体をなす。

4、5は土師器小壺である。4は口径2.1cm、器高2.3cm、5は口径2.6cm、器高2.6cmを測る。11C段階に属し、17世紀末の所産と考えられる。

6は土師器皿Nで、口径6.4cm、器高1.2cm、底部中央部がやや突出し、口縁端部は尖り気味である。11B～C段階に属し、17世紀後半の所産と考えられる。

7は土師器塩壺で、口径5.4cm、器高8.8cm、底部は平坦で、体部は直立し、口縁部は外反して口縁端部は丸く整形される。11C～12A段階に属し、17世紀末～18世紀の所産と考えられる。

8は施釉陶器の蓋で、底径5.2cm、器高2.1cmである。

iii) 第2面遺構

土坑から出土した遺物が大半を占め、16世紀後半～17世紀前半の所産と考えられる物が主体をなす。

〔土坑〕

土坑0086（図版27－9、10）

9は土師器皿Nで、口径7.9cm、器高1.5cm。底部外面は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く整形される。体部外面にオサエ、口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

10は瓦質土器の羽釜で、口縁部の一部が残存している。口径32.6cm、残存器高5.0cmで、口縁部は直立し、口縁端部が平坦に整形され、鐏は口縁端部から1.5cm下に張り付けられる。口縁部外面から端部にかけてヨコナデのちミガキ、内面にナデのちミガキが施される。

土坑0087（図版27－11）

11は土師器皿Sで、口径11.6cm、器高2.0cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯び、見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0088（図版27－12、13）

12は土師器皿Nで、口径8.4cm、器高1.3cm。底部外面は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。体部および口縁部の内外面にヨコナデが施される。11A～B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

13は土師器皿Sで、口径12.9cm、器高2.4cm。口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、上半部でやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。10C～11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0094（図版27－14）

14は土師器皿Sで、口径10.4cm、器高2.3cm。底部外面は平坦で、口縁部は斜め上方へ直線的に伸びる。口縁部上半はやや肥厚し、端部は丸みを帯びるが尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエの痕跡が残り、上半から内面にかけてヨコナデが施され、見込み部に圈状凹線が認められる。11A～B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0109（図版27－15、16）

15は土師器皿Sで、口径11.4cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く整形され、見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデが施される。10C～11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

16は瓦質土器の火鉢で、口径38.0cm、器高11.5cm、底部は平坦で、体部は直立気味に立ち上が

り、内湾しながら上方へ伸び、口縁部で内側へ強く屈曲して平坦面を形成し、端部は丸く仕上げられる。底部外面にナデ、体部外面および口縁部の平坦面にミガキ、口縁部および体部内面に横方向のナデが施される。

土坑0114（図版27－17、18）

17は土師器皿Nで、口径6.4cm、器高1.2cm。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に整形されるが丸みを帯びる。底部、口縁部ともにナデが施される。11A～B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

18は土師器皿Sで、口径14.0cm、器高2.9cm。口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、上半でやや肥厚し、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施され、見込み部に圈状凹線が認められる。10C～11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0120（図版27－19）

19は土師器皿Sと考えられる。口径12.5cm、器高2.1cmで、口縁部は直線的に斜め上方に伸びて上半は僅かに外反し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。10C～11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0124（図版27－20）

20は瓦質土器の羽釜で、口縁部の一部が残存している。残存器高は4.1cmで、口縁端部は平坦に整形され、鐙は口縁端部から約1.0cmの位置に貼り付けられる。口縁部内外面および端部にヨコナデ、体部内面にハケのちナデが施される。

土坑0144（図版27－21～23）

21は土師器皿Nである。口径6.0cm、器高1.1cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部、口縁部ともに内外面にナデが施される。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

22、23は土師器皿Sbである。22は口径8.9cm、器高1.6cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がって上半がやや肥厚し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデが施される。23は口径8.6cm、器高1.7cm、丸みを帯びる底部から口縁部が直線的に斜め上方へ立ち上がり、口縁部上半がやや外反して端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、口縁部上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。これらは11A段階に属し、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0196（図版27－24）

24は土師器皿Sbと考えられる。口径10.6cm、器高2.2cmで、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く整形される。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0197（図版27－25、26）

25は土師器皿Nである。口径7.4cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

26は土師器皿Sである。小片のため口径は復元できず、器高は2.2cm。底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、上半がやや外反して端部は丸みを帯び、見込み部に圈状凹線が確認できる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。10C段階に属し、16世紀後半の所産と考えられる。

iv) 第2層（図版27－27～32）

第2層に包含されていた遺物は、15世紀後半の所産と考えられる物が主体をなす。

27は土師器皿Nで、口径6.8cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。口縁部上半はやや肥厚して外反し、端部は丸く整形される。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、口縁部上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。9B段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

28は土師器皿Sで、口径14.4cm、器高2.5cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方に立ち上がり、端部近くで外反して端部は丸みを帯びる。見込み部に浅い圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9C～10A段階に属し、15世紀末～16世紀の所産と考えられる。

29、30は土師器皿Shである。29は口径6.3cm、器高1.4cm。底部突出部の高さは0.5cmで、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、上半が肥厚し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。30は口径6.3cm、器高1.7cm、底部突出部高は0.6cm、口縁部は外反気味に斜め上方へ立ち上がり、上半が屈曲して内湾しながら伸び、やや肥厚する。口縁端部は丸く整形される。底部外面から、口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。これらは9C段階に属し、15世紀末の所産と考えられる。

31は瓦質土器の羽釜で、口縁部と鐙部の一部が残存している。口径26.4cm、残存器高4.5cm、口縁は直立し、口縁端部は平坦で、鐙は断面長方形を呈する。鐙部から口縁部内面にかけてヨコナデ、体部内面にハケが施される。9B～C段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

32は施釉陶器（古瀬戸）の卸し目付大皿と考えられる。（図版44－1）体部立ち上がり部が残存しており、復元底径18.0cm、残存器高5.4cmである。体部は直線的に斜め上方へ伸び、立ち上がり

部に低い脚が張り付けられ、外面に回転ケズリが施される。内面の立ち上がり部から約2.0cmの範囲に施釉されており、残存していないが底部内面にも釉がかけられていたと考えられる。体部内面には卸し目が刻まれているが、口縁部を欠損しているため、卸し目の範囲は不明。9B～C段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

v) 第3面遺構

第3面で検出した遺構から出土した遺物は、第2面と同様、土坑から出土したものが殆どを占め、15世紀前半の所産と考えられる物が主体をなす。

〔土坑〕

土坑0202（図版27－33）

33は土師器皿で、口径7.0cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部は外反気味に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0208（図版27－34）

34は土師器皿Nで、口径10.6cm、器高1.4cm、底部は平坦で、口縁部上半は外反して端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0210（図版27－35～37）

35は土師器皿Nで、口径12.1cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部が立ち上がり部で屈曲し、外反しながら斜め上方へ伸び、端部は丸く整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

36、37は土師器皿Sである。36は口径13.4cm、器高2.3cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。37は口径14.0cm、器高2.5cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味であるがやや丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデが施される。これらは9A～B段階に属し、15世紀前半～半ばの所産と考えられる。

土坑0211（図版27－38～41、45－1）

38、39は土師器皿Nである。38は口径10.8cm、器高1.9cm、口縁部が外反気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデが施される。39は口径10.9cm、器高2.1cm、底部はやや丸みを帯び、口縁部が立ち上がり部で屈曲し

て直線的に伸び、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

40は土師器皿Sで、口径11.4cm、器高2.7cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。8B～9A段階に属し、14世紀末～15世紀前半の所産と考えられる。

41は土師器皿Shで、口径7.2cm、器高1.5cm、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0215（図版27－42、43）

42は土師器皿Nで、口径10.8cm、器高1.9cm、口縁部が内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部付近で屈曲して外反し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

43は土師器皿Shで、口径6.3cm、器高1.5cmで、底部突出部の高さは0.5cmである。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0216（図版27－44～48）

44は土師器皿Nと考えられる。口縁部が外反気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

45は土師器皿Sで、口径11.7cm、器高2.8cm、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。8B～9A段階に属し、14世紀末～15世紀前半の所産と考えられる。

46～48は土師器皿Shである。46は口径6.8cm、器高2.0cm、底部突出部の高さは0.5cmである。口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。47は口径6.4cm、器高1.8cm、底部突出部の高さは0.8cmである。口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部付近でやや屈曲して外反し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。48は口径6.6cm、器高1.2cm、底部突出部の高さは0.7cmである。口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、やや屈曲して外反し、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面にかけてオサエ、口縁端部から口縁部内面にかけてヨコナ

デ、底部内面にナデが施される。これらは9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0226（図版27－49～52）

49は土師器皿Nで、口径6.6cm、器高1.3cm、底部は平坦で、口縁部が立ち上がり部で屈曲し、外反して斜め上方へ伸び、端部は尖り気味であるがやや丸みを帯びる。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9B段階に属し、15世紀半ばの所産と考えられる。

50は土師器皿Sbと考えられる。口径8.8cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9C段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

51は瓦質土器の羽釜で、口径21.1cm、残存器高10.5cm、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は凹面を形成する。15世紀の所産と考えられる。

52は唐草文軒平瓦である。（図版44－2）残存幅8.2cm、瓦当厚5.0cm、瓦当面の成形は折り曲げ技法によると考えられる。凹面側は布目圧痕を残すが、瓦当面から0.6cmの範囲にナデを施し、凸面側には縄叩きの痕跡を残す。瓦当裏面に横方向のナデ、顎部に横方向のケズリを施す。12世紀の所産と考えられる。

土坑0227（図版27－53～55）

53、54は土師器皿Nである。53は口径9.7cm、器高2.0cm、底部はやや丸みを帯び、口縁部が立ち上がり部で屈曲し、外反しながら斜め上方へ伸び、端部は丸く整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にかけてナデが施される。54は口径10.8cm、器高2.0cm、底部は平坦で、口縁部が立ち上がり部で屈曲し、外反しながら斜め上方へ伸び、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

55は土師器皿Shと考えられる。口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸く整形される。9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

土坑0334（図版27－56）

56は土師器皿Nで、口径6.9cm、器高1.5cm、底部は平坦で、口縁部が立ち上がり部で屈曲し、直線的に斜め上方へ伸び、端部は丸く整形される。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9B段階に属し、15世紀半ばの所産と考えられる。

土坑0336（図版27－57～60、45－2）

57、58は土師器皿Nである。57は口径7.4cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ緩やかに立ち上がり、端部は丸く整形される。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。58は口径10.0cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁が立ち上がり部で屈曲し、外反しながら斜め上方へ伸び、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは9A段階に属し、15世紀前半の所産と考えられる。

59は土師器皿Sで、残存器高3.0cm、底部はやや丸みを帯び、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部付近でやや外反して端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9B段階に属し、15世紀半ばの所産と考えられる。

60は土師器皿Sbと考えられる。口径9.0cm、器高1.8cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。9C段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

（2）南区（図版28～31）

i）第1面遺構

第1面で検出した遺構から出土した遺物は、17世紀後半～18世紀の所産と考えられる物が主体をなす。

〔布基礎状遺構〕

布基礎状遺構0046（図版28－61、62）

61は土師器皿Nと考えられる。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

62は土師器鉢と考えられる。端部付近で内傾し、端部は尖り気味であるが、やや丸みを帯びる。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

布基礎状遺構0065（図版28－63～66）

63は土師器皿Sで、口径11.2cm、残存器高2.3cmで、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

64は施釉陶器蓋で、口径7.0cm、底径4.3cm、器高1.5cmである。

65は染付の蓋で、口径7.0cm、器高2.3cmである。

66は道具瓦で、瓦当を有する。残存長12.9cm、残存幅14.8cm、瓦当径は10.0cmを測る。

〔井戸〕

井戸0058（図版28－67～71）

67は土師器皿で、口径8.0cm、器高1.7cm。底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上

り、端部はやや丸みを帯びる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面に掛けてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

68は土師器皿Nで、残存器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。18世紀の所産か。

69は染付の皿で、口径13.0cm、底径7.1cm、器高2.4cmである。輪高台は低く、外面が内傾し、端面は平坦面を形成する。口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部はやや丸みを帯びる。18世紀の所産と考えられる。

70は染付の椀で、底径4.2cm、残存器高2.7cm。高台は削り出しの輪高台でやや高く、直立気味に伸び、丸みを帯びた三角形の断面形を呈する。体部は内湾しながら立ち上がる。18世紀の所産と考えられる。

71は備前産焼締陶器の播鉢で、残存器高4.8cm、内面に13本1組の播り目が密に刻まれる。

井戸0070（図版28－72）

72は井戸0070の枠材として用いられていた塼である。全長29.8cm、全幅25.9cm、厚さ2.9cmを測り、凹凸両面にナデ、側面および上下端面にケズリが施され、凹面側下端部は、端面から3.5cmの範囲が大きく面取りされる。左右側面には上端面から約6.0cm、下端面から約6.0cmの位置に方形の穿孔が施される。穿孔は幅1.3cm、高さ0.5cm、深さ2.2～2.5cmを測る。この穿孔は井戸0070の枠を構成する塼すべてに設けられていることから、隣り合う塼を連結するためのダボ穴のようなものの可能性が考えられる。

〔土坑〕

土坑0050（図版28－73）

73は土師器皿S bと考えられる。口径8.0cm、器高1.4cmで、底部はやや平坦で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

土坑0062（図版28－74～79）

74は土師器小壺で、口径2.1cm、器高2.1cmである。底部は平坦で、体部は内湾しながらほぼ直立し、口縁部で内傾して端部は尖り気味であるがやや丸みを帯びる。11C段階に属し、17世紀末の所産と考えられる。

75は土師器皿Nで、口径5.0cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部が直線的に立ち上がり、端部付近で外面が直立気味になり、端部は尖り気味に整形される。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

76は土師器皿Sで、口径11.0cm、残存器高2.0cm、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯び、見込み部に圈状凹線が認められる。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

77は施釉陶器の皿で、底径11.5cm、残存器高4.4cm、削り出しの輪高台はやや高く、幅広で、端面は平坦面を形成する。体部は内湾しながら立ち上がる。

78、79は施釉陶器の天目椀である。78は底部のみ残存しており、底径5.0cm、残存器高2.35cmである。79は底部のみ残存しており、底径5.3cm、残存器高1.4cmである。

土坑0063（図版28－80、81）

80は土師器皿Nで、残存器高1.2cm、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。18世紀の所産か。

81は白磁の椀で、底径6.6cm、器高3.9cm。削り出しの輪高台はやや外向きに伸び、端面は平坦面を形成する。体部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、見込み部に圈線が1条巡る。12世紀の所産で、伝世品または後世の当遺構に破片が混入した可能性が考えられる。

土坑0069（図版29－82～85）

82は土師器皿Nで、口径6.5cm、器高1.0cmで、底部は丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

83は土師器皿Sで、口径11.0cm、器高1.4cmで、底部はやや丸みを帯び、口縁部は直線的に緩やかに立ち上がり、端部は尖り気味であるがやや丸みを帯びる。見込み部に圈状凹線が認められ、凹線の断面はV字形を呈する。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

84は染付の椀で、口径6.4cm、底径2.7cm、器高4.1cmである。高台は削り出しで、直線的に伸び、端面は平坦である。体部は内湾しながら直立気味に立ち上がり、口縁部は直線的に伸び、口縁端部が尖り気味に整形される。18世紀の所産と考えられる。

85は染付の椀で、口径11.0cm、底径4.7cm、器高5.6cmである。高台は削り出しで、やや高く、直線的に伸び、端面は平坦である。体部は内湾しながら急に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に整形される。18世紀の所産と考えられる。

土坑0072（図版29－86～93）

86～88は土師器皿Nである。86は口径5.3cm、器高1.6cm、底部は丸みを帯び、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。87は口径5.2cm、器高1.5cm、底部は丸みを帯び、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。88は口径5.8cm、器高1.5cm、底部は丸みを帯び、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。これらは12B段階に属し、18世紀前半の所産と考えられる。

89、90は土師器皿Sである。89は口径11.6cm、器高2.2cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。90は口径10.6cm、器高

1.8cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に緩やかに立ち上がり、端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。これらは12A段階に属し、17世紀末～18世紀初頭の所産と考えられる。

91は土師器塩壺の蓋で、口径7.7cm、器高2.0cmである。11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

92、93は土師器塩壺である。92は口径6.5cm、器高10.3cm、底部は平坦で、体部は直立気味に立ち上がるが、胴部がやや膨らみ、口縁部は外反して端部は丸く整形される。外面に刻印があり、『御塩壺師』と読める。93は口径5.4cm、器高8.4cm、底部は平坦で、体部は直立し、口縁端部は尖り気味に整形されるが、丸みを帯びる。11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

土坑0077（図版29－94）

94は土師器塩壺で、口径5.5cm、残存器高6.3cm、体部は直立し、口縁端部は丸みを帯びる。11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

ii）第1層（図版29－95～101）

第1層に包含されていた遺物は、17世紀後半～18世紀初頭の物が主体をなす。

95～97は土師器皿Nである。95は口径5.6cm、器高1.2cm、底部は丸みを帯び、口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面、口縁部外面にオサエ、底部内面、口縁部内面にナデが施される。96は口径5.7cm、器高1.2cm、底部は丸みを帯び、口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面、口縁部外面にオサエ、底部内面、口縁部内面にナデが施される。97は口径7.0cm、器高1.4cm、底部はやや平坦で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は外面が直立気味になる。底部外面、口縁部外面にオサエ、底部内面、口縁部内面にナデが施される。これらは11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

98、99は土師器皿Sである。98は口径10.5cm、器高2.0cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。99（図版46－1）は口径10.8cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近で屈曲して外方へ開き、端部は丸く整形される。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。外面に、8本の直線が放射状に配置されるように、墨書で描かれている。これらは11C～12A段階に属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

100は土師器の塩壺で、口径5.7cm、器高8.7cm、底部は平坦で、体部は直立し、口縁部は外反して口縁端部は尖り気味である。11C～12Aに属し、17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。

101は小高杯形の土師器で、口径8.4cm、残存器高6.8cmを測る。杯部内面に煤が付着しており、灯火具として用いられた可能性が考えられる。18世紀の所産か。

iii) 第2面遺構

土坑から出土した遺物が大半を占め、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる物が主体をなすが、上半を近世土坑に破壊されたと考えられる井戸0191枠内からは16世紀後半の所産と考えられる土師器皿が出土している。

〔井戸〕

井戸0191（図版29－102）

102は土師器皿Sで、口径13.8cm、残存器高2.4cmである。10B～C段階に属し、16世紀後半の所産と考えられる。

〔土坑〕

土坑0148（図版29－103～105）

103は土師器皿Nで、埋甕内から出土した。口径5.6cm、器高1.4cm、底部は平坦で、内湾しながら直立気味に口縁部が立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部、口縁部とも内外面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

104は土師器皿Sで、埋甕内から出土した。口径10.9cm、器高2.0cm、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形され、見込み部に圈状凹線が認められる。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

105は当遺構において埋甕として用いられた甕である。（図版46－2）備前産の焼締陶器の大甕で、口径63.4cm、残存器高99.7cmを測る。17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0150（図版29－106）

106は土師器皿Sで、口径11.8cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0151（図版29－107）

107は土師器のミニチュア羽釜で、口径2.3cm、器高3.5cm。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0152（図版29－108～110）

108は土師器皿Nと考えられる。口径7.2cm、器高1.8cm、底部は平坦で口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

109は土師器皿Sで、口径10.4cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち

上がり、端部は尖り気味に整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

110は瓦質土器のミニチュア羽釜である。口径3.2cm、器高4.2cmで、体部に竹管文が不規則に施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0160（図版29－111）

111は土師器皿Sで、口径10.7cm、器高2.4cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部はやや尖り気味に整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0163（図版29－112）

112は土師器皿Sで、口径10.8cm、器高2.0cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0165（図版29－113～115）

113、114は土師器皿Sである。113は口径11.9cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。114は口径10.9cm、器高2.4cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

115（図版47－1）は土師器皿Sbで、口径9.4cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部中心部に約0.4cmの穿孔が施されている。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

土坑0183（図版30－116～119）

116は土師器皿Nで、口径6.5cm、器高1.6cm、底部は平坦で、中央部がやや突出する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部付近で直立気味になり、端部は丸みを帯びる。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

117は土師器皿Sで、口径10.8cm、器高2.2cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。見込み部に圈状凹線が認められる。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。11A～B段階に属し、16世紀末～17世紀前半の所産と考えられる。

118（図版47－2）は施釉陶器の輪花鉢で、口径14.3cm、底径4.0cm、器高4.7cmを測る。底部は削り出しの輪高台で、高さが低く、端面は平坦である。体部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、口縁部下で直立気味に立ち上がって段を作る。口縁部は外反して伸び、端部は丸みを帯びる。底部内外面の各々4か所にトチン痕が確認できる。底部外面、体部外面は無釉である。17世紀の所産と考えられる。

119は青磁の鉢で、口径25.2cm、底径9.0cm、器高9.9cmを測る。底部は削り出しの輪高台で、幅は広く、やや外方へ直線的に伸びる。体部は内湾気味に立ち上がり、直線的に伸びて口縁端部付近で外反し、口縁端部は平坦面を形成する。底部内面に蛇の目形状に釉剥ぎを施す。

土坑0187（図版30－120）

120（図版48－1）は施釉陶器の輪花鉢で、口径12.4cm、底径4.0cm、器高4.2cmを測る。底部は削り出しの輪高台で、やや外向きに伸びる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下で直立気味に立ち上がって段を作る。口縁部は外反して伸び、端部は丸みを帯びる。底部外面および体部外面下半は無釉である。17世紀の所産と考えられる。

土坑0190（図版30－121）

121は施釉陶器の天目椀で、口径10.8cm、底径5.0cm、器高6.5cm、底部は削り出しの輪高台で、体部は直線上に斜め上方へ立ち上がる。口縁部で屈曲してほぼ直立し、端部付近で外反して端部は丸く整形される。11B段階に属し、17世紀前半の所産と考えられる。

iv）第2層（図版30－122～130）

第2層に包含されていた遺物は、15世紀中葉～後半の所産と考えられる物が主体をなす。

122～124は土師器皿Nである。122は器高1.6cm、底部から口縁部が強く屈曲して直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。123は口径9.6cm、器高1.7cm。口径については、小片であることに加え、歪みが大きいと、精度は低いと思われる。底部から強く屈曲して口縁部が立ち上がり、上半は肥厚するとともに外反して大きく開き、端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。124は口径11.0cm、器高2.0cm。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、上半で肥厚するとともに外反して大きく開き、端部は丸みを帯びる。口縁部下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。これらは9B段階に属し、15世紀中葉の所産と考えられる。

125～127は土師器皿Shである。125は口径6.5cm、器高1.8cm。底部突出部の高さは0.7cmで、口

縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、上半で外反し、口縁端部が尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。126は口径7.0cm、器高2.0cm、口縁部は外反しながら立ち上がり、上半が内湾して端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。127は口径7.2cm、器高1.6cm、底部突出部の高さは0.9cmで、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。9B～C段階に属し、15世紀中葉～後半の所産と考えられる。

128、129は土師器皿Sbである。128は口径8.6cm、器高1.8cm、口縁部が直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。129は口径8.1cm、器高1.7cm、底部は中央部がやや突出するがほぼ平坦である。口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。底部外面から口縁部外面下半にオサエ、上半から底部内面にかけてヨコナデが施される。これらは9C段階に属し、15世紀後半の所産と考えられる。

130は唐草文軒平瓦で、瓦当部の最大残存幅11.9cm、最大残存高4.0cm、最大残存長8.1cmを測る。折り曲げ技法によると考えられる。平瓦部凹面側には布目圧痕を残すが、瓦当面から2.0cmの範囲は横方向のケズリを施し、布目を消す。瓦当裏面は縦方向のナデのち横方向のナデ、平瓦部凸面側は縦方向のナデにより叩き痕跡を残さない。

v) 第3面遺構

遺物は大半が土坑から出土しており、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる物が主体をなす。

〔土坑〕

土坑0279（図版30－131～136、48－2）

131は土師器皿Acで、口径9.6cm、器高1.3cm、底部は平坦で、口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

132～135は土師器皿Nである。132は口径9.0cm、器高1.5cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に緩く立ち上がる。口縁端部付近で外面が直立気味になり、端部は丸みを帯びた三角形状を呈する。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。133は口径9.8cm、器高1.8cm、底部は丸みを帯び、体部は外反気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。134は口径10.5cm、器高1.9cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近で直立気味になり、端部は丸みを帯びる。135は土師器皿Nで、口径13.8cm、器高2.7cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

136は輸入陶磁の白磁碗で、底部のみ残存しており、底径5.8cm、残存器高2.1cmである。高台は削り出しの輪高台で、断面形は台形状を呈する。12世紀末～13世紀前半の所産か。

土坑0280（図版30－137～146、49－1）

137は土師器皿Acで、口径9.1cm、器高1.6cm、底部は丸みを帯び、口縁部が内傾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面および底部内面にヨコナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

138～145は土師器皿Nである。138は口径8.6cm、器高1.4cm、口縁部は内湾気味に緩やかに立ち上がり、端部付近で直立気味になり、端部は尖り気味に整形される。口縁部外面下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデが施される。139は口径9.0cm、器高1.3cm、底部は平坦で、口縁部が内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く整形される。底部外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。140は口径9.2cm、器高1.7cm、底部は丸みを帯び、口縁部が内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。141は口径9.8cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。142は口径9.8cm、器高2.5cm、底部はやや丸みを帯びる。口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部近くで直立して端部は丸く整形される。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。143は口径11.2cm、器高1.9cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部付近で外面が直立し、端部は丸みを帯びた三角形状を呈する。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。144は口径13.6cm、器高3.2cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。145は口径14.6cm、器高2.6cm。底部は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部近くで屈曲して直立し、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

146は唐草文軒平瓦で、残存幅20.9cm、残存長10.0cm、瓦当厚3.0cmを測る。凹面側は無調整で布目圧痕を残すが、瓦当面から1.6cmの範囲を大きく面取りする。凸面側は縄叩きの痕跡が残る。

土坑0282（図版30－147）

147は土師器皿Nで、口径11.0cm、器高2.8cm、底部はやや丸みを帯び、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は上方へ突出して三角形断面を呈する。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

土坑0285（図版30－148）

148は土師器碗で、口径8.0cm、底径3.4cm、器高2.7cm、底部は糸切りの平高台で、体部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸みを帯びる。

土坑0286（図版30－149～159、49－2）

149～152は土師器皿Nである。149は口径9.3cm、器高2.1cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。150は口径9.6cm、器高1.4cm、口縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。151は口径14.2cm、器高2.8cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、端部付近で直立気味に伸び、端部は尖り気味に整形される。底部外面から口縁部下半にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。152は口径14.1cm、器高2.3cm、底部は平坦で、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

153は白色土器皿で、口径9.6cm、底径4.0cm、器高2.2cmである。底部は糸切りの平高台で、口縁部はやや内湾しながら緩やかに斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部内外面、底部内面にロクロナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

154は山茶碗の小碗で、口径9.5cm、底径5.0cm、器高2.8cm、底部は平坦で、輪高台が貼り付けられる。高台は低く、幅広で丸みを帯びる。体部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、口縁部で外反し、口縁端部は丸く整形される。体部および口縁部の内外面にロクロナデ、底部内外面にナデが施される。尾張型第4型式に属し、12世紀後半の所産と考えられる。

155～158は軒丸瓦である。155は単弁蓮華文軒丸瓦で、復原瓦当径14.0cm、瓦当厚1.5cmである。小片のため、弁数は不明、弁区外周に凸圈線が巡り、周縁は素文である。丸瓦は瓦当部上縁付近に無加工で接合され、凹面側に補填粘土を充填後、ナデが施される。156は単弁蓮華文軒丸瓦で、周縁部を欠くため、瓦当径は復元できなかった。花卉および子葉は肥厚し、中房は平坦で、1+4と思われる蓮子を配する。丸瓦は無加工で接合され、凹面側は補填粘土充填後にオサエが施される。157は複弁蓮華文軒丸瓦で、復元瓦当径12.0cm、瓦当厚2.5cm。周縁は素文で、弁区外周に凸圈線が巡る。花卉および子葉がやや肥厚し、弁間に間弁が配される。周縁側面にナデ、瓦当裏面にオサエが施される。158は瓦当下端部のみ残存している。復元瓦当径14.0cm、瓦当厚2.0cm。周縁は素文で、外区に珠文が配される。内区の文様構成は、残存していないため不明である。周縁から瓦当裏面にかけてオサエおよびナデが施されるが、丸みを帯びた断面形状を呈し、粗雑なつくりである。

159は唐草文軒平瓦で、残存幅4.8cm、残存長10.4cm、瓦当厚4.8cm、顎部の幅は1.7cmを測る。瓦当面は折り曲げ技法によって成形される。凹面側に布目圧痕を残すが、瓦当面から0.7cmの範囲にナデを施し、側面凹面側を浅く面取りする。凸面側は平瓦部に縦方向のナデ、瓦当裏面に横方向の

ナデ、顎部に横方向のケズリが施される。

土坑0287（図版31－160、161）

160は土師器皿Acで、口径11.0cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部は強く屈曲して内傾し、端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

161は土師器皿Nで、口径7.8cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸みを帯びた三角形断面を呈する。6B段階に属し、13世紀前半の所産と考えられる。

土坑0291（図版31－162～165）

162は土師器皿Acで、口径8.0cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁部は強く屈曲して内湾し、端部は丸く整形される。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。6A段階に属し、12世紀末の所産と考えられる。

163～165は土師器皿Nである。163は口径9.1cm、器高1.7cm、底部は平坦で、口縁部が内湾しながら斜め上方に立ち上がり、端部は外面が内傾し、丸みを帯びる。底部外面から口縁部下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。164は口径14.0cm、器高2.2cm、底部は平坦で、口縁部が内湾しながら斜め上方に立ち上がり、端部は丸みを帯びた三角形断面を呈する。底部外面から口縁部外面下半にかけてオサエ、上半から口縁部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。165は口径13.9cm、器高3.0cm、底部は平坦で、口縁部は内湾しながら斜め上方に立ち上がり、端部付近でやや直立気味になり、端部は丸みを帯びる。これらは6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

土坑0297（図版31－166）

166は土師器皿Nで、口径9.4cm、器高1.4cm、底部は中央部がやや突出し、口縁部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。6A～B段階に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

〔ピット〕

ピット0325（図版31－167、168）

167、168は土師器皿Nである。167は口径8.8cm、器高1.2cm、底部は平坦で、口縁端部は丸く整形される。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。168は口径8.8cm、器高1.5cm、底部は平坦で、口縁端部は丸く整形される。底部外面にオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。これらは6B～C段階に属し、13世紀前半の所産と考えられる。

vi) 第3層 (図版31-169~173、50-1)

第3層に含まれていた遺物は、9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる物が主体をなす。

169は土師器杯Aで、口径14.0cm、残存器高2.0cm、口縁部が内湾気味に緩く立ち上がり、端部付近で屈曲して口縁端部は突起状に突出する。3A段階に属し、10世紀前半の所産と考えられる。

170は緑釉陶器皿と考えられる。底径7.8cm、残存器高1.6cm、高台は貼り付けの輪高台で、ほぼ直立し、端面は平坦で、断面は長方形を呈する。9世紀後半~10世紀前葉の所産と考えられる。

171、172は緑釉陶器碗である。171は底径9.2cm、残存器高2.1cm、高台は削り出しの平高台で、体部は内湾気味に立ち上がり、見込み部に沈線一条が認められる。172の高台は貼り付けの輪高台で、やや外方へ向かって伸び、端面は平坦で、断面は長方形を呈する。体部は内湾しながら斜め上方へ立ち上がる。見込み部に沈線一条が認められる。これらは9世紀後半~10世紀前葉の所産と考えられる。

173は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当径12.0cm、瓦当厚2.5cmである。周縁は素文で、花卉間に楔形の間弁が配され、花卉はやや肥厚するが中房は平坦で、1+4の蓮子が表現される。丸瓦は瓦当裏面周縁近くに無加工で接合され、凸面側に縦方向のナデ、凹面側は補填粘土充填後にナデが施される。

vii) 第4面遺構

〔土坑〕

土坑0357 (図版31-174、50-2)

174は土師器甕で、口径16.8cm、器高23.3cm、丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で屈曲して外反し、端部は丸く整形される。体部に板ナデ、頸部に縦方向のハケ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にケズリが施される。5世紀後半~6世紀前半の所産と考えられる。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査地は平安京左京四条四坊一町跡の北東部にあたる。調査地敷地内の北西部および南東部に各々調査区を設定し、北区および南区として調査を実施した。北区においては、既存建物の基礎が残存している状態での調査となったが、第1面に設定した基礎直下で、江戸時代の礎石列、石室、井戸、土坑、景石を主な遺構として検出した。礎石列、石室、井戸は調査区北東部から南北中央東部にかけてと南東部に分布しており、土坑群はこれら以外の箇所でも検出された。礎石列の北延長は調査区外となり、他三方は攪乱が切り込まれているため、平面プランの想定が困難であるが、南に石室、南東部に井戸が検出されていることから、調査区の東部が屋敷地に包含されると考えられる。これらのことから、江戸時代における調査地北西部は宅地としての土地利用がなされていたと考えられるが、今回設定した北区においては調査区東部を除く大半が屋敷地内における居住空間から外れた裏手にあたると考えられる。

第2面では、調査区北東部において第1面で検出した礎石列（礎石列0368）とほぼ同位置で同様の礎石列（礎石列0369）を検出した。また、調査区南北中央西壁際でも礎石列（礎石列0079）を検出し、それらの東部で礎石を有する柱穴を複数、南北中央部東寄りでも暗渠状の石組み遺構、これらに加えて、土坑を複数検出した。これらの遺構からは江戸時代初頭～前期の遺物が出土している。これらのことから、当該期における北区は、中央部は第1面から掘り込まれた土坑が基盤層にまで達し、当該面の遺構が失われているが、少なくとも東部および南北中央西部には建物が存在したと考えられる。

第3面は基盤層上面であるが、調査区全域で不定形の平面形を有する土坑が多数検出され、これらの遺構からは室町時代前期の遺物が出土している。また、調査区北東部において、単独ではあるものの、礎石を有する柱穴を1基確認している。このことから、室町時代においても何らかの建物が存在したことが想定されるが、調査区のほぼ全域に土坑群が分布することは、今調査で設定した北区の大半が屋敷地内における居住空間からは外れていたことを示唆する。また、これらの土坑群によって鎌倉時代以前の遺構が失われていると考えられる。

南区においては、第1面で近代以降の攪乱に加えて、埋土中に江戸時代中期の所産と考えられる遺物を包含する布基礎状遺構、井戸、土坑を主に検出した。東隣接地で2019年に実施された発掘調査⁽¹⁾において江戸時代中期から末期の石室、井戸が検出されており、当該調査地が高倉小路に門を開いた宅地として土地利用がなされていたことが明らかになっている。今調査において江戸時代中期以降の布基礎状遺構、井戸が検出されたことは、当該期の南区が宅地として利用されていたことを示唆し、2019年調査の成果を補強するものといえよう。（図版32）

第2面では多数の土坑に加えて井戸を検出した。土坑は調査区全域で検出され、これらの遺構埋土中には安土桃山時代から江戸時代前期の所産と考えられる遺物が包含されていた。一方で、調査区北東部で検出した土坑0165、0182の直下で井戸0191を検出しており、これらの土坑および井戸枠検出面より上位の埋土から安土桃山時代から江戸時代初頭、枠内からは僅少なが室町時代末

から安土桃山時代の所産と考えられる遺物が出土している。これらのことから、第2面において井戸0191は掘削深度が深いために残存していたが、室町時代の遺構は安土桃山時代から江戸時代の土坑群によって破壊されたものと考えられる。また、2019年調査区では、室町時代後期に開削された下京惣構の堀が安土桃山時代に埋め戻され、調査地が宅地としての機能を回復したとされるが、西隣接地である今調査区において安土桃山時代から江戸時代初頭の土坑群を検出したことは、江戸時代中期以降と同じく、高倉通に門を開く宅地の一部として利用されていた可能性が考えられる。(図版33) 第3面では調査区南東部でピット群、西半および北東部で土坑を複数検出した。これらの遺構からは、主に平安時代末期から鎌倉時代初頭の所産と考えられる遺物が出土している。第4面では調査区南東部において、ピット、溝状遺構、土坑を検出したが、調査区南西部で検出した土坑0357を除き、遺物の出土量は僅少であることに加え、極小片であったため、その時期は判然としない。何れにしても、2019年の東隣接地の調査において、平安時代から室町時代まで高倉小路が位置を変えることなく存在し、小路西側には宅地が営まれていたことが明らかになっている一方で、今回調査の南区においては室町時代の遺構は井戸1基を除き、検出されなかった。これは、江戸時代の土坑によって当該期の遺構が破壊され、残存していなかったためと考えられる。これらの攪乱は、とりわけ調査区西半および北東部において顕著であり、多くの土坑が基盤層にまで達していた。(図版34、35)

今回の調査では、南北両調査区において第1面で江戸時代中期以降、第2面で安土桃山時代から江戸時代前期の遺構、北区第3面(基盤層上面)では室町時代前期の遺物を包含する土坑群、南区第3面では平安時代末から鎌倉時代初頭の遺物を包含する土坑群を検出した。特に南区については、室町時代の遺構が井戸1基を除き江戸時代以降の遺構によって残存していなかったと考えられるものの、平安時代後期から室町時代にかけて継続して宅地として利用され、室町時代後期に開削された下京惣構の堀が安土桃山時代に埋め戻された後、高倉小路西側に宅地が開発されるようになったという、2019年調査成果からの想定を補強するものといえよう。

註

- (1) 松永修平・布川豊治 『平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-7 埋文研 2020年

表4 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	北区	A～C-5・6	土坑 0007	11.0	1.7	-	-	5YR7/4 にぶい橙色	
2	土師器	炮烙鍋	北区	A～C-5・6	土坑 0007	31.3	(7.0)	-	-	7.5YR7/6 橙色	
3	土師器	皿	北区	D-1・2	土坑 0022	10.8	1.5	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
4	土師器	小壺	北区	A・B-5～7	第1層	2.1	2.3	-	-	10YR7/6 明黄褐色	
5	土師器	小壺	北区	E～G-6～8	第1層	2.6	2.6	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
6	土師器	皿	北区	E～G-6～8	第1層	6.4	1.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
7	土師器	塩壺	北区	A・B-5～7	第1層	5.4	8.8	-	-	5YR6/8 橙色	
8	施釉陶器	蓋	北区	A・B-5～7	第1層	-	5.2	2.1	-	(胎土)2.5Y7/2 灰黄色 (釉)7.5YR3/4 暗褐色	
9	土師器	皿	北区	C・D-1・2	土坑 0086	7.9	1.5	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
10	瓦質土器	羽釜	北区	C・D-1・2	土坑 0086	32.6	(5.0)	-	-	N4/0 灰色	
11	土師器	皿	北区	C・D-2	土坑 0087	11.6	(2.0)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
12	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0088	8.4	1.3	-	-	10YR8/1 灰白色	
13	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0088	12.9	(2.4)	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
14	土師器	皿	北区	B-4	土坑 0094	10.4	2.3	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
15	土師器	皿	北区	F-6・7	土坑 0109	11.4	(2.1)	-	-	7.5YR8/2 灰白色	
16	瓦質土器	火鉢	北区	F-6・7	土坑 0109	38.0	(11.5)	-	-	N2/0 黒色	
17	土師器	皿	北区	B-1・2	土坑 0114	6.4	1.2	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
18	土師器	皿	北区	B-1・2	土坑 0114	14.0	(2.9)	-	-	10YR8/2 灰白色	
19	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0120	12.5	(2.1)	-	-	10YR8/2 灰白色	
20	瓦質土器	羽釜	北区	B-3	土坑 0124	-	(4.1)	-	-	2.5Y6/1 黄灰色	
21	土師器	皿	北区	B-6	土坑 0144	6.0	1.1	-	-	5YR6/4 にぶい橙色	
22	土師器	皿	北区	B-6	土坑 0144	8.9	1.6	-	-	10YR8/1 灰白色	灯明皿
23	土師器	皿	北区	B-6	土坑 0144	8.6	1.7	-	-	10YR8/2 灰白色	
24	土師器	皿	北区	A・B-7	土坑 0196	10.6	(2.2)	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
25	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0197	7.4	1.2	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
26	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0197	-	(2.2)	-	-	10YR8/2 灰白色	
27	土師器	皿	北区	E-7・8	第2層	6.8	1.7	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
28	土師器	皿	北区	A・B-4	第2層	14.4	2.5	-	-	5YR7/6 橙色	
29	土師器	皿	北区	A・B-4	第2層	6.3	1.4	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
30	土師器	皿	北区	F・G-6・7	第2層	6.3	1.7	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
31	瓦質土器	羽釜	北区	A・B-4	第2層	26.4	(4.5)	-	-	N5/0 灰色	
32	施釉陶器	卸し目付 大皿	北区	F・G-6・7	第2層	-	(5.4)	18.0	-	(胎土)2.5Y7/2 灰黄色 (釉)2.5Y6/3 にぶい黄色	古瀬戸
33	土師器	皿	北区	A・B-2	土坑 0202	7.0	(1.7)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
34	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0208	10.6	1.4	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
35	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0210	12.1	(2.1)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
36	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0210	13.4	2.3	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
37	土師器	皿	北区	C-2	土坑 0210	14.0	(2.5)	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
38	土師器	皿	北区	C・D-1・2	土坑 0211	10.8	(1.9)	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
39	土師器	皿	北区	C・D-1・2	土坑 0211	10.9	(2.1)	-	-	10YR8/2 灰白色	
40	土師器	皿	北区	C・D-1・2	土坑 0211	11.4	(2.7)	-	-	10YR8/2 灰白色	
41	土師器	皿	北区	C・D-1・2	土坑 0211	7.2	1.5	-	-	7.5YR8/2 灰白色	
42	土師器	皿	北区	C・D-2・3	土坑 0215	10.8	(1.9)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
43	土師器	皿	北区	C・D-2・3	土坑 0215	6.3	1.5	-	-	10YR8/2 灰白色	
44	土師器	皿	北区	D-2・3	土坑 0216	-	(2.0)	-	-	7.5YR7/6 橙色	
45	土師器	皿	北区	D-2・3	土坑 0216	11.7	(2.8)	-	-	2.5Y8/1 灰白色	
46	土師器	皿	北区	D-2・3	土坑 0216	6.8	2.0	-	-	5Y8/1 灰白色	
47	土師器	皿	北区	D-2・3	土坑 0216	6.4	1.8	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
48	土師器	皿	北区	D-2・3	土坑 0216	6.6	1.2	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
49	土師器	皿	北区	D-4	土坑 0226	6.6	1.3	-	-	2.5Y7/3 浅黄色	
50	土師器	皿	北区	D-4	土坑 0226	8.8	1.7	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	灯明皿
51	瓦質土器	羽釜	北区	C-4	土坑 0226	21.1	(10.5)	-	-	N6/0 灰色	
52	瓦	軒平瓦	北区	D-4	土坑 0226	残存長 (4.2)	残存幅 (8.2)	-	瓦当厚 (5.0)	N7/0 灰白色	
53	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0227	9.7	2.0	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
54	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0227	10.8	2.0	-	-	7.5YR7/2 明褐灰色	
55	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0227	-	(2.2)	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	
56	土師器	皿	北区	D-4	土坑 0334	6.9	1.5	-	-	2.5Y7/3 浅黄色	
57	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0336	7.4	1.7	-	-	5YR6/3 にぶい橙色	灯明皿
58	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0336	10.0	1.7	-	-	5YR6/4 にぶい橙色	
59	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0336	-	(3.0)	-	-	2.5Y8/2 灰白色～ 2.5Y4/1 黄灰色	
60	土師器	皿	北区	C・D-4	土坑 0336	9.0	1.8	-	-	10YR8/2 灰白色	灯明皿
61	土師器	皿	南区	K・L-12	布基礎状遺構 0046	-	(1.1)	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
62	土師器	鉢	南区	K・L-12	布基礎状遺構 0046	-	(3.4)	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
63	土師器	皿	南区	M～O-12	布基礎状遺構 0065	11.2	2.3	-	-	7.5YR7/2 明褐灰色	
64	施釉陶器	蓋	南区	M～O-12	布基礎状遺構 0065	7.0	1.5	4.3	-	(胎土)10YR7/4 にぶい黄橙色 (釉)2.5YR3/3 暗赤褐色	
65	染付	蓋	南区	M～O-12	布基礎状遺構 0065	7.0	2.3	-	-	(胎土)9/0 白色 (釉)呉須	
66	瓦	道具瓦	南区	M～O-12	布基礎状遺構 0065	残存 (12.9)	残存 (14.8)	小丸径 10.0	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
67	土師器	皿	南区	K-17	井戸 0058	8.0	1.7	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	

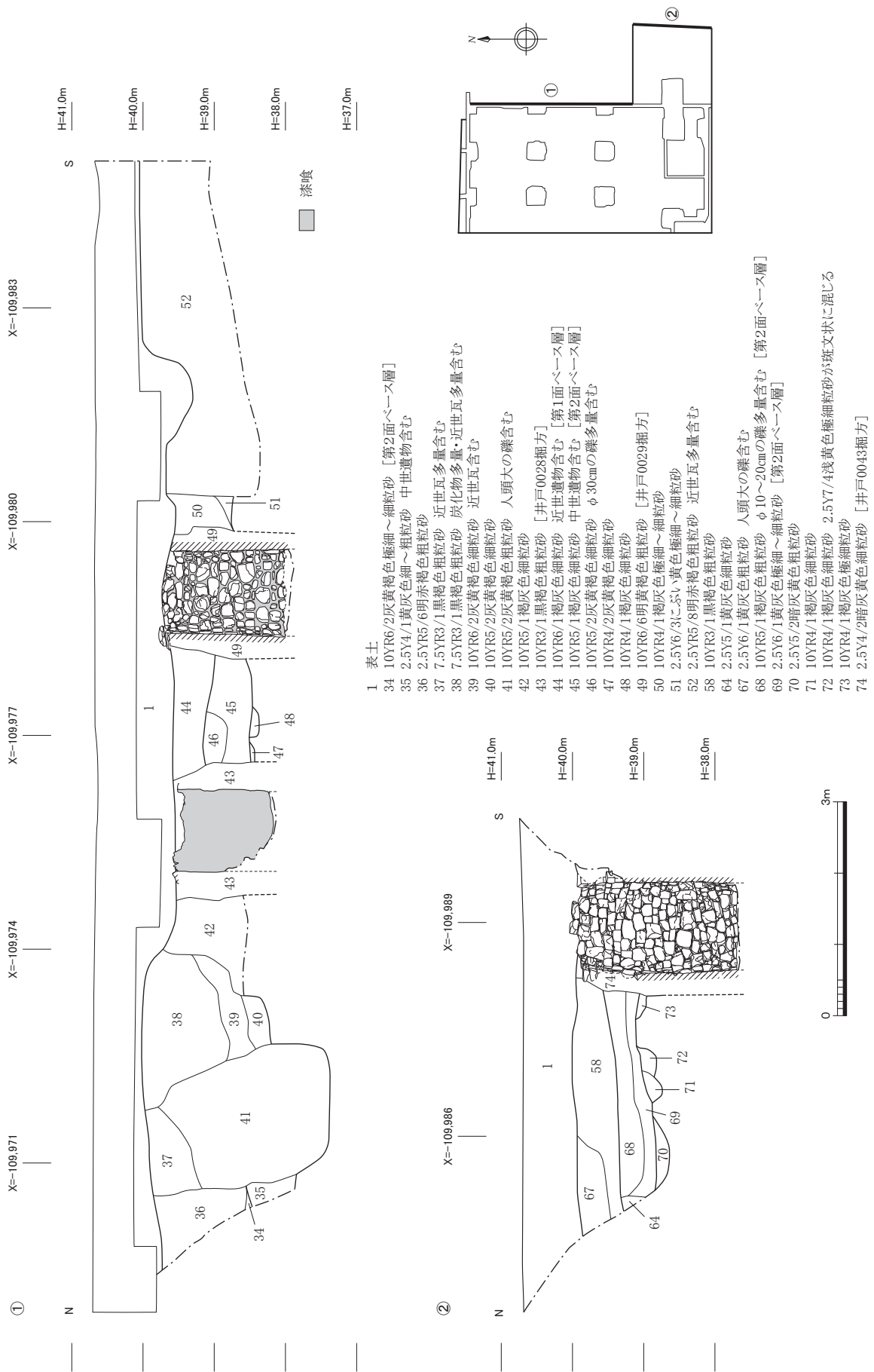
掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
68	土師器	皿	南区	K-15	井戸 0058	-	(1.2)	-	-	10YR7/3 におい黄橙色	
69	染付	皿	南区	K-15	井戸 0058	13.0	2.4	7.1	-	(胎土)9/0 白色 (釉)呉須	
70	染付	椀	南区	K-16	井戸 0058	-	(2.7)	4.2	-	(胎土)N8/0 灰白色 (釉)呉須	
71	焼締陶器	掃鉢	南区	K-18	井戸 0058	-	(4.8)	-	-	2.5YR4/6 赤褐色	備前
72	埴	埴	南区	O-13	井戸 0070	全長 29.8	全幅 25.9	-	2.9	N5/0 灰色	
73	土師器	皿	南区	K・L-13	土坑 0050	8.0	1.4	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
74	土師器	小壺	南区	L・M-14	土坑 0062	2.1	2.1	-	-	2.5Y8/3 淡黄色	
75	土師器	皿	南区	L・M-14	土坑 0062	5.0	1.2	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
76	土師器	皿	南区	L・M-14	土坑 0062	11.0	2.0	-	-	5YR7/3 におい橙色	
77	施釉陶器	皿	南区	L・M-14	土坑 0062	-	(4.4)	11.5	-	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)5Y8/2 灰白色	
78	施釉陶器	天目椀	南区	L・M-14	土坑 0062	-	(2.4)	5.0	-	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)5YR4/3 におい赤褐色	
79	施釉陶器	天目椀	南区	L・M-14	土坑 0062	-	(1.4)	5.3	-	(胎土)2.5Y8/1 灰白色 (釉)2.5YR1.7/1 赤黒色	
80	土師器	皿	南区	L-14	土坑 0063	-	(1.2)	-	-	7.5YR7/6 橙色	
81	白磁	椀	南区	L-14	土坑 0063	-	(3.9)	6.6	-	(胎土)10Y8/1 灰白色 (釉)7.5Y7/1 灰白色	輸入陶磁
82	土師器	皿	南区	N-13	土坑 0069	6.5	1.0	-	-	7.5YR7/4 におい橙色	
83	土師器	皿	南区	N-13	土坑 0069	11.0	1.4	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
84	染付	椀	南区	N-13	土坑 0069	6.4	4.1	2.7	-	(胎土)9/0 白 (釉)呉須	
85	染付	椀	南区	N-13	土坑 0069	11.0	4.7	5.6	-	(胎土)9/0 白 (釉)呉須	
86	土師器	皿	南区	N・O-13・14	土坑 0072	5.3	1.6	-	-	7.5YR7/2 明褐灰色	
87	土師器	皿	南区	N・O-13・14	土坑 0072	5.2	1.5	-	-	2.5YR6/4 におい橙色	
88	土師器	皿	南区	N・O-13・14	土坑 0072	5.8	1.5	-	-	5YR6/4 におい橙色	
89	土師器	皿	南区	N・O-13・14	土坑 0072	11.6	2.2	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
90	土師器	皿	南区	N・O-13・14	土坑 0072	10.6	1.8	-	-	7.5YR7/4 におい橙色	
91	土師器	塩壺蓋	南区	N・O-13・14	土坑 0072	7.7	2.0	-	-	5YR6/4 におい橙色	
92	土師器	塩壺	南区	N・O-13・14	土坑 0072	6.5	10.3	-	-	2.5YR6/8 橙色	
93	土師器	塩壺	南区	N・O-13・14	土坑 0072	5.4	8.4	-	-	5YR6/6 橙色	
94	土師器	塩壺	南区	L・M-13	土坑 0077	5.5	(6.3)	-	-	10YR6/4 におい黄橙色	
95	土師器	皿	南区	K・L-12～14	第1層	5.6	1.2	-	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
96	土師器	皿	南区	K・L-12～14	第1層	5.7	1.2	-	-	7.5YR7/4 におい橙色	
97	土師器	皿	南区	K・L-12～14	第1層	7.0	1.4	-	-	7.5YR7/6 橙色	
98	土師器	皿	南区	M～O-12・13	第1層	10.5	2.0	-	-	5YR7/6 橙色	
99	土師器	皿	南区	M～O-12・13	第1層	10.8	2.1	-	-	10YR7/4 におい黄橙色～ 10YR3/1 黒褐色	
100	土師器	塩壺	南区	M～O-12・13	第1層	5.7	8.7	-	-	5YR6/8 橙色	
101	土師器	高坏形	南区	O-14	第1層	8.4	6.8	-	-	10YR6/2 灰黄褐色	灯火具か？

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
102	土師器	皿	南区	N-13	井戸 0191 枠 内	13.8	(2.4)	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
103	土師器	皿	南区	J・K-12	土坑 0148 甕 内	5.6	1.4	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
104	土師器	皿	南区	J・K-12	土坑 0148 甕 内	10.9	(2.0)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
105	焼締陶器	大甕	南区	K-12	土坑 0148	63.4	99.7	-	-	10YR4/2 灰赤色	
106	土師器	皿	南区	K・L-12	土坑 0150	11.8	(2.1)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
107	土師器	ミニチュ ア羽釜	南区	K・L-12	土坑 0151	2.3	3.5	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙	
108	土師器	皿	南区	K・L-13・14	土坑 0152	7.2	1.8	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
109	土師器	皿	南区	K・L-13・14	土坑 0152	10.4	2.1	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
110	瓦質土器	ミニチュ ア羽釜	南区	K・L-13・14	土坑 0152	3.2	4.2	-	-	N4/0 灰色	
111	土師器	皿	南区	M-13	土坑 0160	10.7	2.4	-	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
112	土師器	皿	南区	N-13	土坑 0163	10.8	(2.0)	-	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
113	土師器	皿	南区	M・N-12・13	土坑 0165	11.9	2.1	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
114	土師器	皿	南区	M・N-12・13	土坑 0165	10.9	2.4	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
115	土師器	皿	南区	M・N-12・13	土坑 0165	9.4	2.1	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
116	土師器	皿	南区	N-13	土坑 0183	6.5	1.6	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
117	土師器	皿	南区	N-13	土坑 0183	10.8	2.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
118	施釉陶器	鉢	南区	N-13	土坑 0183	14.3	4.7	4.0	-	(胎土)10YR7/4 にぶい黄橙色 (釉)10YR6/3 にぶい黄橙色、 10YR3/2 黒褐色	唐津
119	青磁	鉢	南区	N-13	土坑 0183	25.2	9.9	9.0	-	(胎土)N7/0 灰白色 (釉)10Y7/1 灰白色	
120	施釉陶器	鉢	南区	M-14	土坑 0187	12.4	4.2	4.0	-	(胎土)2.5Y7/2 灰黄色 (釉)2.5Y7/2 灰黄色	唐津
121	施釉陶器	天目碗	南区	K・L-12	土坑 0190	10.8	6.5	-	-	(胎土)2.5Y8/2 淡黄色 (釉)5Y4/4 にぶい赤褐色	
122	土師器	皿	南区	L・M-12～ 15	第2層	-	(1.6)	-	-	5YR7/6 橙色	
123	土師器	皿	南区	L・M-12～ 15	第2層	9.6	(1.7)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
124	土師器	皿	南区	L・M-12～ 15	第2層	11.0	(2.0)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
125	土師器	皿	南区	M・N-14・15	第2層	6.5	1.8	-	-	10YR8/2 灰白色	
126	土師器	皿	南区	L・M-12～ 15	第2層	7.0	(2.0)	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
127	土師器	皿	南区	M・N-14・15	第2層	7.2	(1.6)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
128	土師器	皿	南区	L・M-12～ 15	第2層	8.6	(1.8)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
129	土師器	皿	南区	M・N-14・15	第2層	8.1	1.7	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
130	瓦	軒平瓦	南区	M・N-14・15	第2層	残存長 (8.1)	残存幅 (11.9)	-	瓦当厚 (4.1)	N6/0 灰色	
131	土師器	皿	南区	L・M-12・13	土坑 0279	9.6	1.3	-	-	5YR6/6 橙色	
132	土師器	皿	南区	L・M-12・13	土坑 0279	9.0	1.5	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
133	土師器	皿	南区	L・M-12・13	土坑 0279	9.8	1.8	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
134	土師器	皿	南区	L・M-12・13	土坑 0279	10.5	1.9	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
135	土師器	皿	南区	L・M-12・13	土坑 0279	13.8	2.7	-	-	10YR8/2 灰白色	

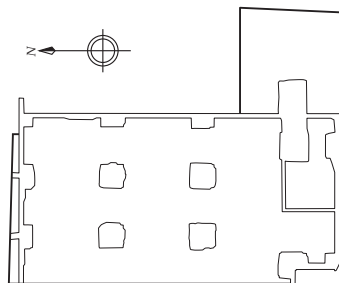
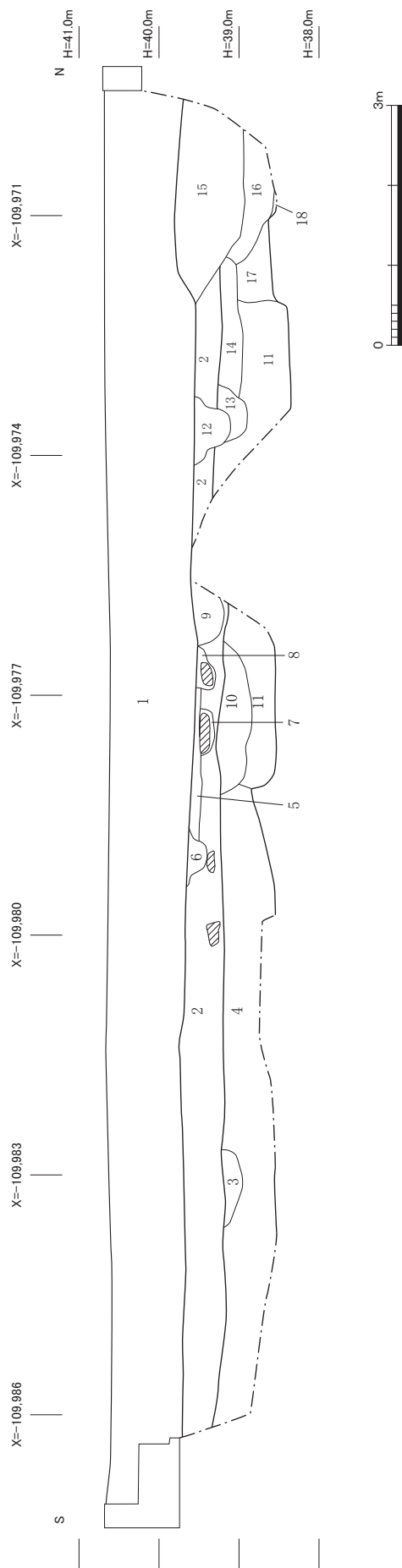
掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
136	白磁	椀	南区	L・M-12・13	土坑 0279	-	(2.1)	5.8	-	(胎土)25Y8/1 灰白色 (釉)5Y7/1 灰白色	輸入陶磁
137	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	9.1	1.6	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
138	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	8.6	1.4	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
139	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	9.0	1.3	-	-	5YR6/4 にぶい橙色	
140	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	9.2	1.7	-	-	5YR7/4 にぶい橙色	
141	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	9.8	1.7	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
142	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	9.8	2.5	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
143	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	11.2	1.9	-	-	10YR8/2 灰白色	
144	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	13.6	3.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
145	土師器	皿	南区	L・M-13	土坑 0280	14.6	2.6	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
146	瓦	軒平瓦	南区	L・M-13	土坑 0280	残存長 (10.0)	残存幅 (20.9)	-	瓦当厚 3.0	10YR7/2 にぶい黄橙色	
147	土師器	皿	南区	L-13・14	土坑 0282	11.0	2.8	-	-	10YR8/2 灰白色	
148	土師器	椀	南区	L・M-14・15	土坑 0285	8.0	3.4	-	-	2.5Y8/4 淡黄色	
149	土師器	皿	南区	L・M-13・14	土坑 0286	9.3	2.1	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
150	土師器	皿	南区	L・M-13・14	土坑 0286	9.6	1.4	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
151	土師器	皿	南区	L・M-13・14	土坑 0286	14.2	2.8	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
152	土師器	皿	南区	L・M-13・14	土坑 0286	14.1	2.3	-	-	7.5YR7/6 橙色	
153	土師器	皿	南区	L・M-13・14	土坑 0286	9.6	2.2	4.0	-	10YR8/2 灰白色	
154	山茶碗	小椀	南区	L・M-13・14	土坑 0286	9.5	2.8	5.0	-	N7/0 灰白色	
155	瓦	軒丸瓦	南区	L・M-13・14	土坑 0286	残存長 (3.1)	-	瓦当径 (14.0)	瓦当厚 1.5	2.5Y5/2 暗灰黄色	
156	瓦	軒丸瓦	南区	L・M-13・14	土坑 0286	残存長 (3.9)	-	瓦当径 -	瓦当厚 2.2	5Y5/1 灰色	
157	瓦	軒丸瓦	南区	L・M-13・14	土坑 0286	-	-	瓦当径 (12.0)	瓦当厚 (2.5)	7.5YR7/6 橙色	
158	瓦	軒丸瓦	南区	L・M-13・14	土坑 0286	-	-	瓦当径 (14.0)	瓦当厚 2.3	10YR8/3 浅黄橙色	
159	瓦	軒平瓦	南区	L・M-13・14	土坑 0286	残存長 (10.4)	残存幅 (11.4)	-	瓦当厚 (4.8)	2.5Y8/2 灰白色	
160	土師器	皿	南区	M-12	土坑 0287	11.0	1.2	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
161	土師器	皿	南区	M-12	土坑 0287	7.8	2.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
162	土師器	皿	南区	M-12・13	土坑 0291	8.0	1.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
163	土師器	皿	南区	M-12・13	土坑 0291	9.1	1.7	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
164	土師器	皿	南区	M-12・13	土坑 0291	14.0	2.2	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
165	土師器	皿	南区	M-12・13	土坑 0291	13.9	3.0	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
166	土師器	皿	南区	M-14・15	土坑 0297	9.4	1.4	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
167	土師器	皿	南区	N-15	ビット 0325	8.8	1.2	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
168	土師器	皿	南区	N-15	ビット 0325	8.8	1.5	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	
169	土師器	杯	南区	L～N-12～ 15	第3層	14.0	(2.0)	-	-	10YR8/4 浅黄橙色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
170	緑釉陶器	皿	南区	L～N-12～ 15	第3層	-	(1.6)	7.8	-	(胎土)5Y6/1 灰色 (釉)7.5Y6/3 オリーブ黄色	
171	緑釉陶器	椀	南区	L～N-12～ 15	第3層	-	(2.1)	9.2	-	(胎土)2.5Y7/1 灰白色 (釉)7.5Y6/2 灰オリーブ色	
172	緑釉陶器	椀	南区	L～N-12～ 15	第3層	-	(3.4)	8.8	-	(胎土)2.5Y6/3 にぶい黄色 (釉)7.5Y4/3 暗オリーブ色	
173	瓦	軒丸瓦	南区	L～N-12～ 15	第3層	残存長 (5.0)	-	瓦当径 -	瓦当厚 2.5	2.5Y7/1 灰白色	
174	土師器	甕	南区	L-14・15	土坑 0357	16.8	23.3	-	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	

図 版

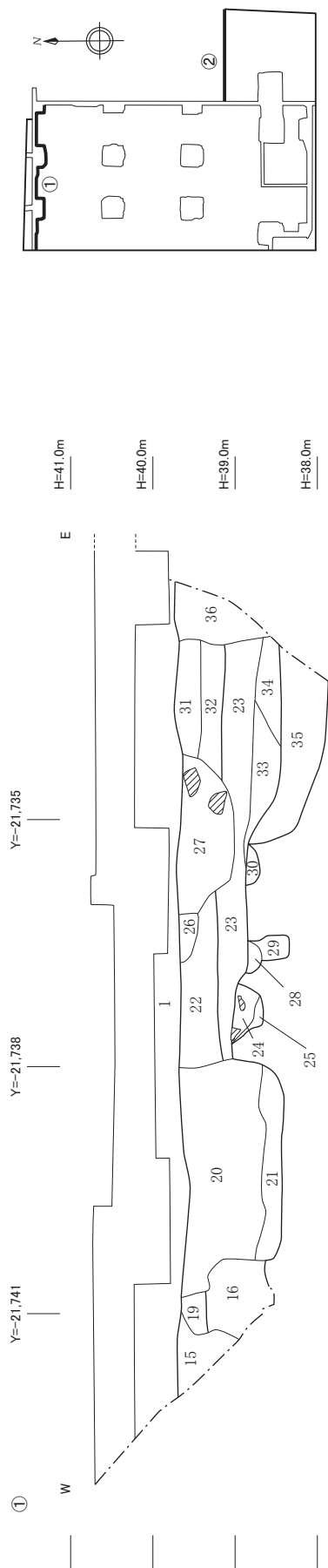


北区東壁土層断面図 (1 : 80)

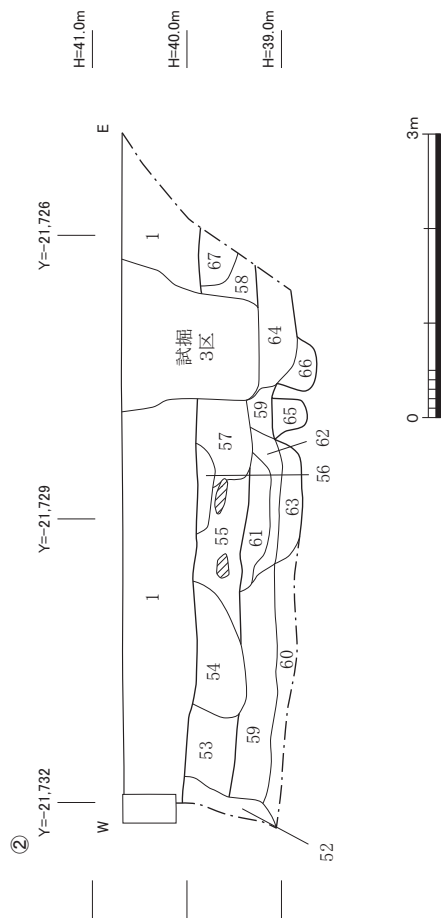


- | | | |
|----|----------------------|-------------------------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 10YR4/3にぶい、黄褐色細～粗粒砂 | φ5～20cmの礫含む [第1面～ス層] |
| 3 | 10YR4/2/灰黄褐色細粒砂 | 10YR8/6黄褐色極細～細粒砂(粘性あり)ブロック混じる |
| 4 | 10YR4/1褐灰色細粒砂 | 中世遺物含む [第2面～ス層] |
| 5 | 10YR4/2/灰黄褐色細粒砂 | 10YR4/1褐灰色細粒砂 [第1面～ス層] |
| 6 | 10YR5/2/灰黄褐色粗粒砂 | |
| 7 | 10YR5/3にぶい、黄褐色極細～細粒砂 | |
| 8 | 10YR6/3にぶい、黄褐色極細～細粒砂 | |
| 9 | 10YR6/4にぶい、黄褐色細～粗粒砂 | 礫含む |
| 10 | 2.5YR/6/8橙色細粒砂 | 遺物含む |
| 11 | 10YR4/1褐灰色細粒砂 | 中世遺物含む |
| 12 | 10YR6/2/灰黄褐色細粒砂 | φ20cmの礫含む |
| 13 | 10YR4/1褐灰色細粒砂 | 10YR7/6明黄褐色極細粒砂が斑・文状に混じる |
| 14 | 10YR4/1黒褐色極細～細粒砂 | 中世遺物含む |
| 15 | 10YR3/2黒褐色細～粗粒砂 | φ15cmの礫・近世遺物含む |
| 16 | 10YR5/1褐灰色細粒砂 | 中世遺物含む |
| 17 | 5Y7/3黄黄色粗粒砂 | |
| 18 | 2.5Y5/1黄灰色細粒砂 | 10YR7/4にぶい、黄褐色極細粒砂が斑・文状に混じる |

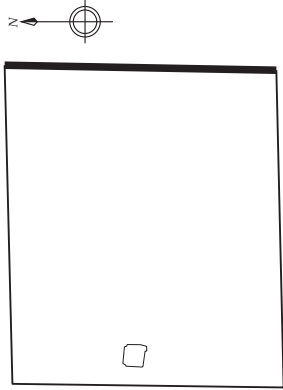
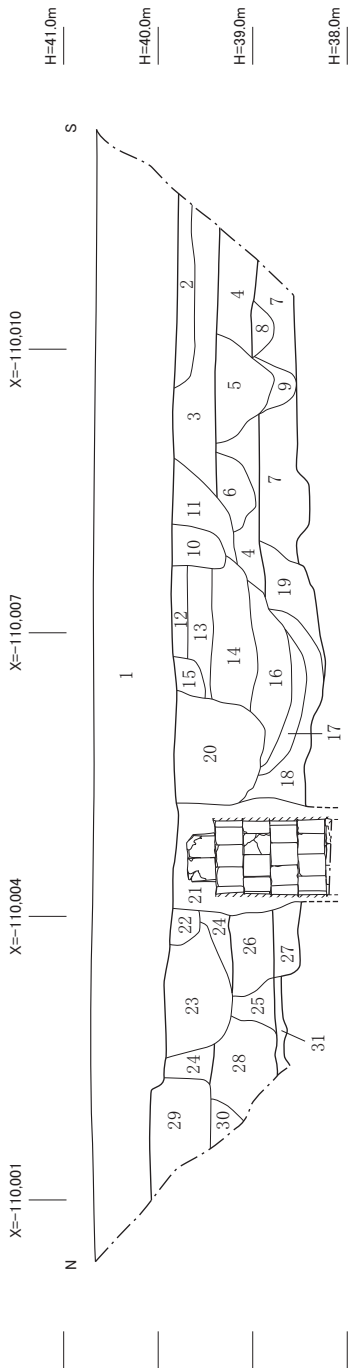
北区西壁土層断面図 (1 : 80)



- 1 表土
- 15 10YR3/2黒褐色細～粗粒砂 φ15cmの礫・近世遺物含む
- 16 10YR5/1褐灰色細粒砂 中世遺物含む
- 19 10YR7/3にぶい、黄褐色細粒砂 2.5Y7/6明黄褐色粗粒砂ブロック混じる [第1面ベース層]
- 20 2.5YR6/8橙色粗粒砂 壁土・炭化物含む
- 21 7.5YR4/1褐灰色細～粗粒砂
- 22 2.5Y5/1黄灰色細粒砂 近世遺物含む [第1面ベース層]
- 23 2.5Y4/1黄灰色細～粗粒砂 φ20cmの礫少量・中世遺物含む [第2面ベース層]
- 24 10YR5/3にぶい、黄褐色細粒砂
- 25 10YR5/1褐灰色極細～細粒砂 2.5Y7/4浅黄色極細粒砂が斑文状に混じる
- 26 2.5Y8/4淡黄色細粒砂 (漆喰)
- 27 10YR4/2灰黄褐色細～粗粒砂 近世遺物含む
- 28 10YR5/1褐灰色細粒砂
- 29 10YR4/1褐灰色極細～細粒砂 2.5Y7/4浅黄色極細粒砂が斑文状に混じる
- 30 10YR5/2灰黄褐色細～粗粒砂
- 31 10YR7/4にぶい、黄褐色細粒砂 [第1面ベース層]
- 32 10YR6/1褐灰色極細～細粒砂 [第1面ベース層]
- 33 10YR4/1褐灰色細粒砂 [第2面ベース層]
- 34 10YR6/2灰黄褐色極細～細粒砂 [第2面ベース層]
- 35 2.5Y4/1黄灰色細～粗粒砂 中世遺物含む
- 36 2.5YR5/6明赤褐色粗粒砂
- 52 2.5YR5/8明赤褐色粗粒砂 近世瓦多量含む
- 53 10YR5/4にぶい、黄褐色細粒砂 [第1面ベース層]
- 54 10YR4/3にぶい、黄褐色細粒砂 人頭犬の礫含む
- 55 10YR6/1細粒砂 [第1面ベース層]
- 56 10YR4/1褐灰色細粒砂
- 57 10YR6/3 にぶい、黄褐色細～粗粒砂 近世瓦含む
- 58 10YR3/1黒褐色粗粒砂
- 59 10Y5/1褐灰色粗粒砂 2.5Y7/6明黄褐色極細粒砂が斑文状に混じる [第2面ベース層]
- 60 2.5Y6/2灰黄褐色細粒砂 2.5Y7/4浅黄色細粒砂が斑文状に混じる
- 61 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂
- 62 2.5Y4/1黄灰色細～粗粒砂
- 63 2.5Y3/1黒褐色極細粒砂と10YR6/1褐灰色粗粒砂の互層
- 64 2.5Y5/1黄灰色細粒砂
- 65 10YR4/1褐灰色極細～細粒砂 2.5Y7/4浅黄色極細粒砂が斑文状に混じる
- 66 10YR5/1褐灰色粗粒砂 φ10cmの礫含む
- 67 2.5Y6/1黄灰色粗粒砂 人頭犬の礫含む



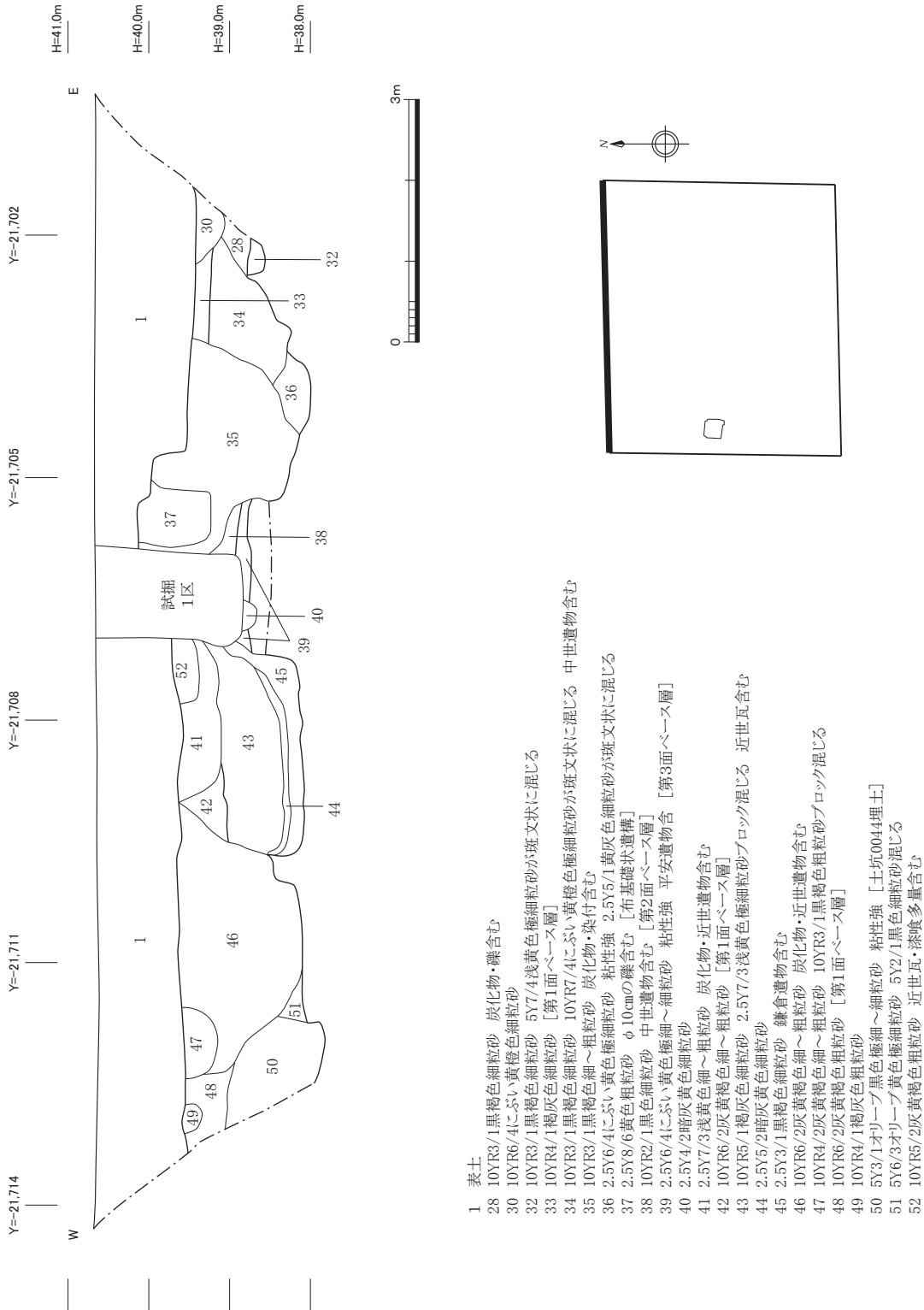
北区北壁土層断面図（1：80）

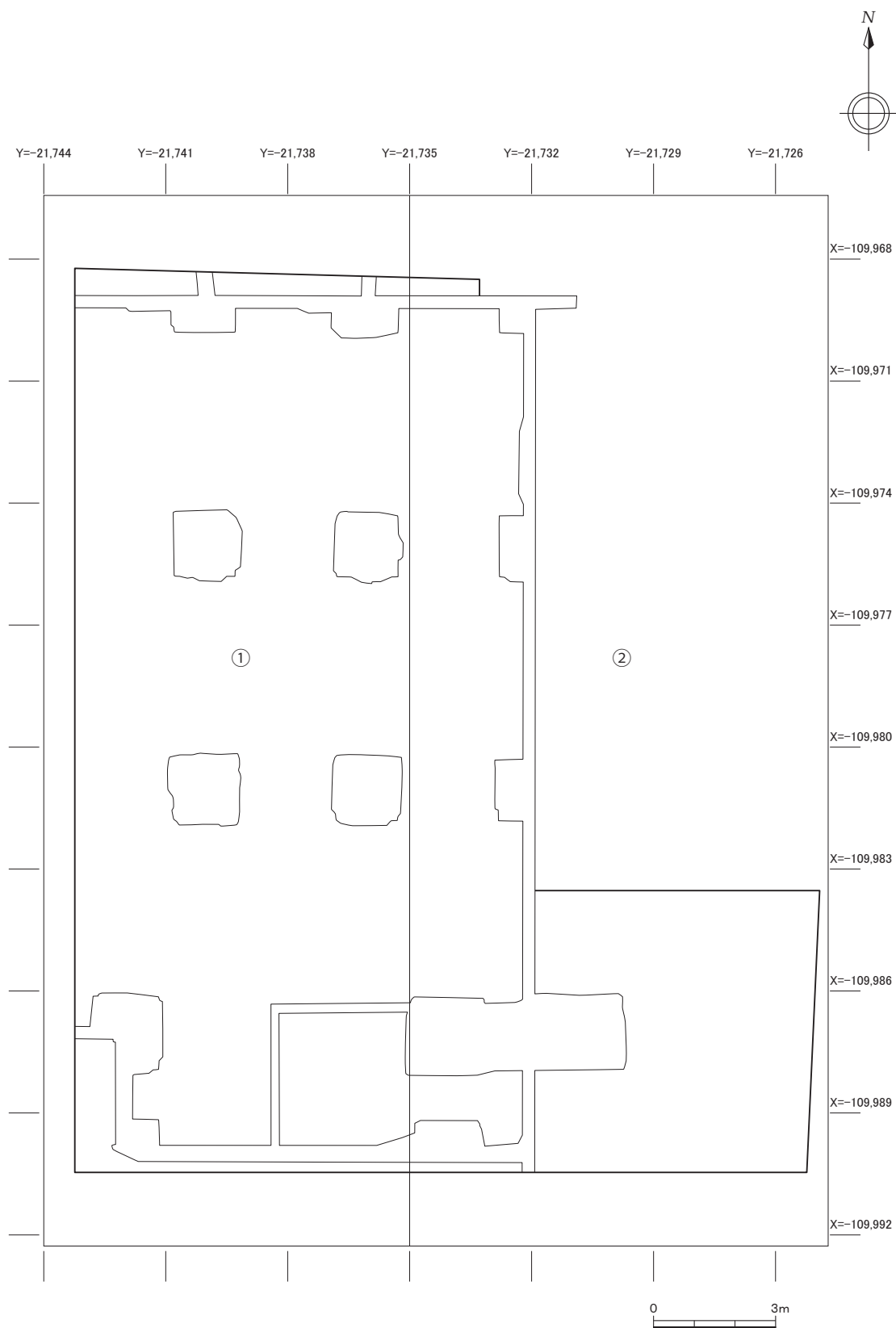


- 1 表土
- 2 2.5Y8/6黄色粗粒砂 [布基礎状遺構]
- 3 10YR4/2灰黄褐色細～粗粒砂 炭化物・近世遺物含む [第1面ベース層]
- 4 10YR3/1黒褐色細粒砂 中世遺物含む [第2面ベース層]
- 5 10YR2/1黒色細粒砂 炭化物・中世遺物含む
- 6 10YR2/2黒褐色細粒砂 炭化物・中世遺物含む
- 7 5Y6/4オリーブ黄色極細～細粒砂 平安遺物含む [第3面ベース層]
- 8 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 炭化物・遺物含む
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂 炭化物・遺物含む
- 10 7.5YR2/1黒色細～粗粒砂 炭化物・漆喰片含む
- 11 10YR3/2黒褐色細～粗粒砂 近世瓦・漆喰片含む
- 12 2.5Y7/6明黄褐色極細粒砂 粘性あり [近世盤地?]
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 炭化物含む
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂 炭化物・近世瓦含む
- 15 10YR5/2灰黄褐色細粒砂 近世瓦含む
- 16 10YR4/2灰黄褐色細粒砂 10YR6/8明黄褐色細粒砂が斑文状に混じる 染付含む
- 17 N4/0灰色極細粒砂 粘性強 炭化物・染付含む
- 18 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂 5Y7/3浅黄色細粒砂混じる 遺物含む
- 19 10YR3/1黒褐色細～粗粒砂 遺物含む
- 20 10YR3/1黒褐色粗粒砂 漆喰・近世遺物含む
- 21 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂 φ5cmの礫多量含む [井戸0070掘方]
- 22 7.5YR4/2灰褐色粗粒砂 近世遺物含む
- 23 2.5Y8/6黄色粗粒砂 φ10cmの礫含む [布基礎状遺構]
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 炭化物含む [第1面ベース層]
- 25 10YR3/1黒褐色極細～細粒砂 [第2面ベース層]
- 26 10YR3/1黒褐色細粒砂 中世遺物含む
- 27 10YR2/1黒色細～粗粒砂 中世遺物含む
- 28 10YR3/1黒褐色細粒砂 炭化物・礫含む
- 30 10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂
- 31 5Y7/4浅黄色極細粒砂 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂が斑文状に混じる [第3面ベース層]

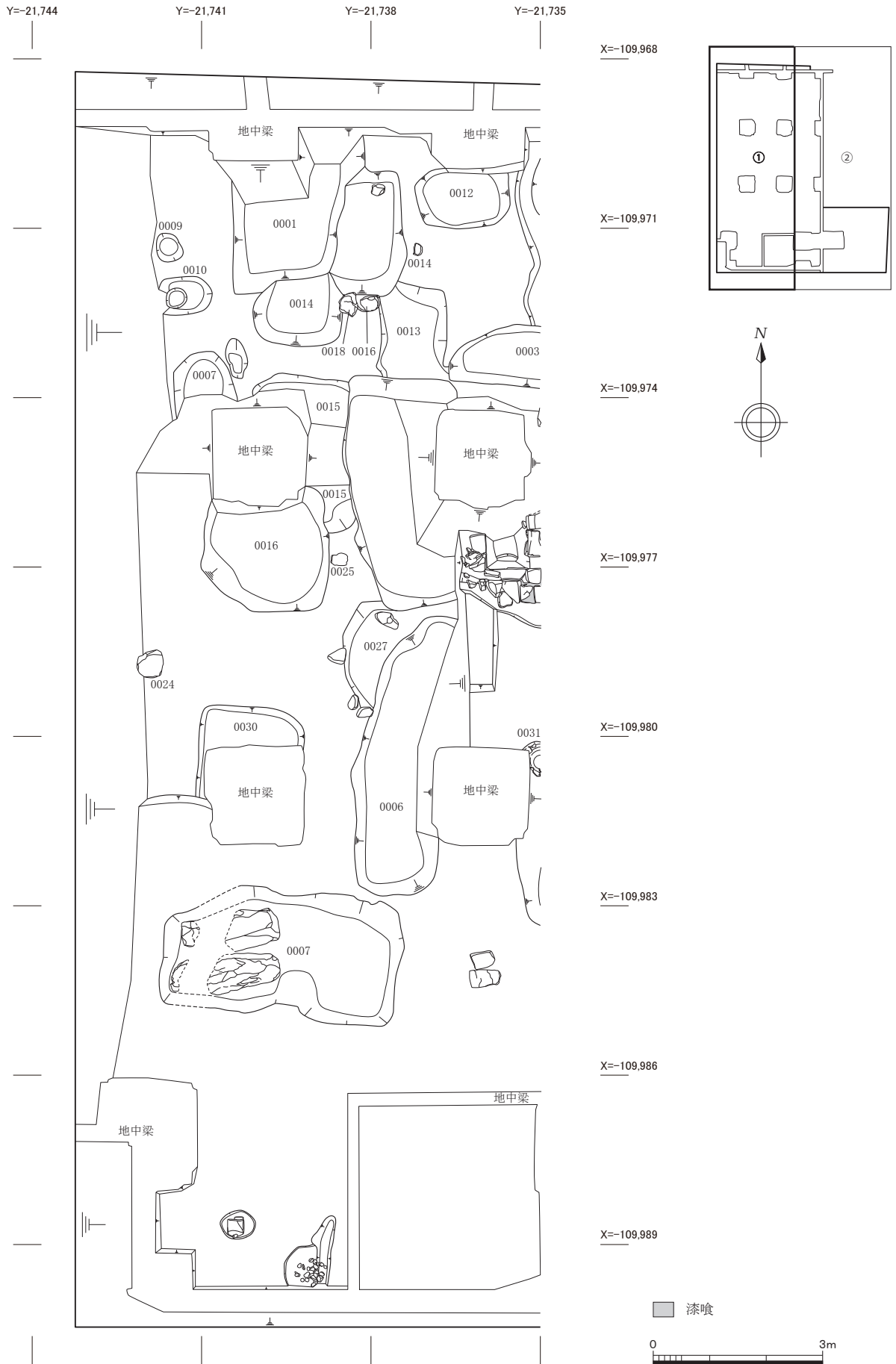
南区東壁土層断面図（1：80）

南區北壁土層断面図（1：80）

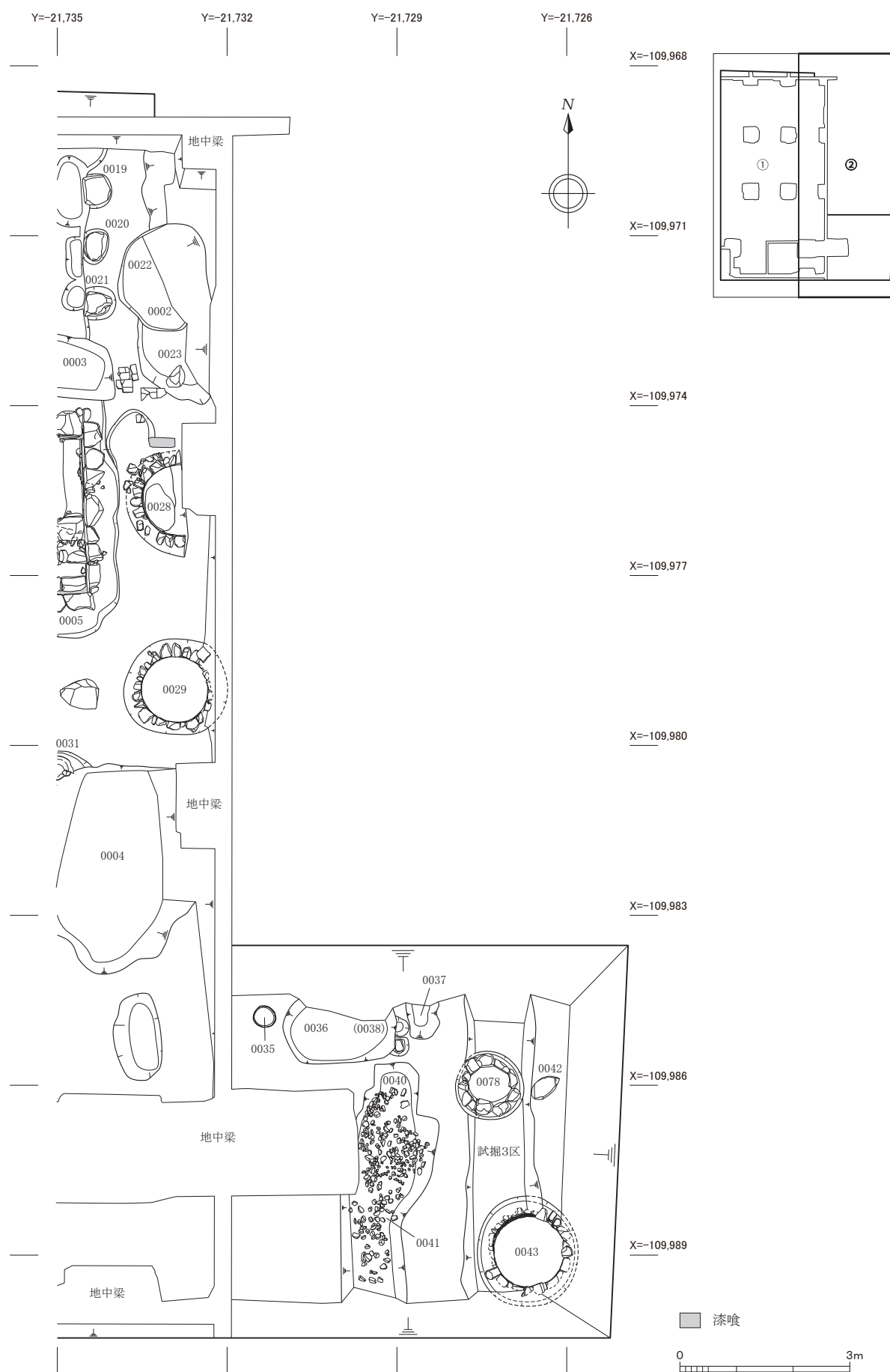




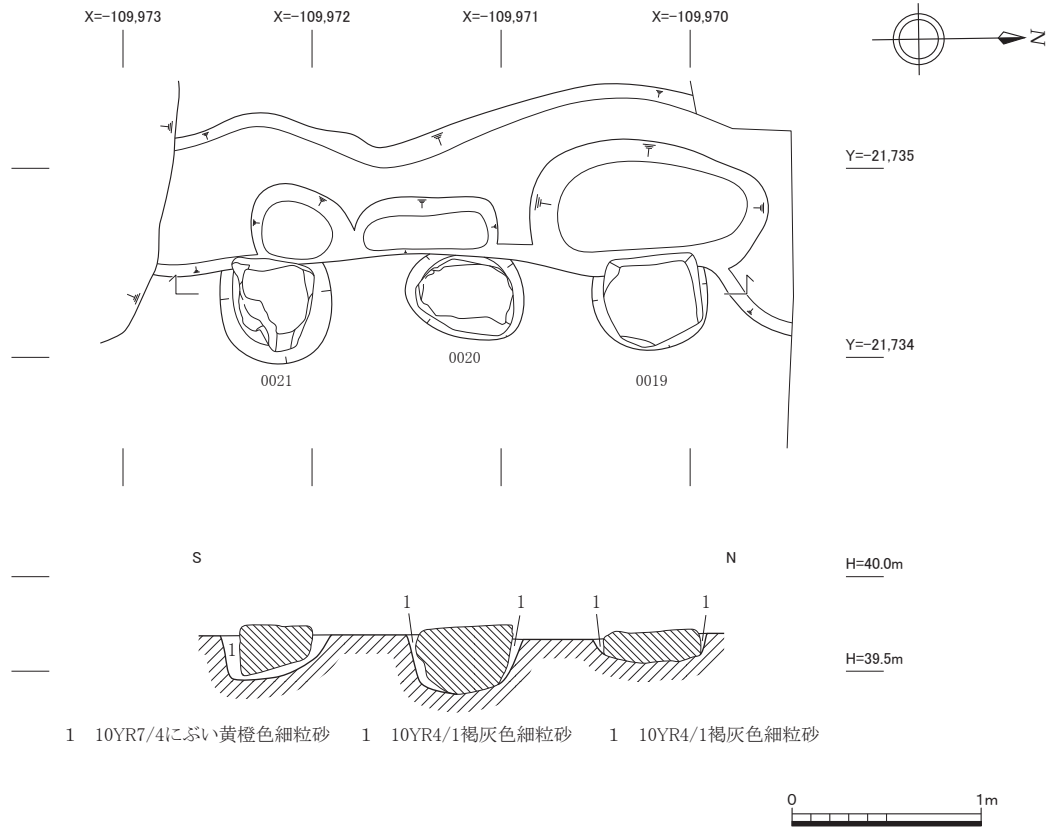
北区全体平面紙割図（1：150）



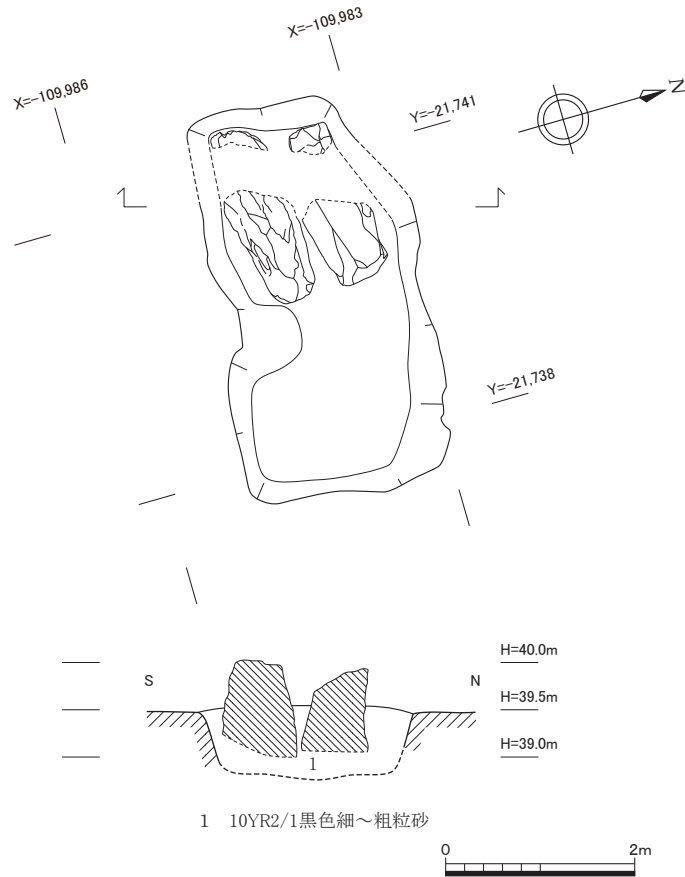
北区第1面平面図① (1 : 100)



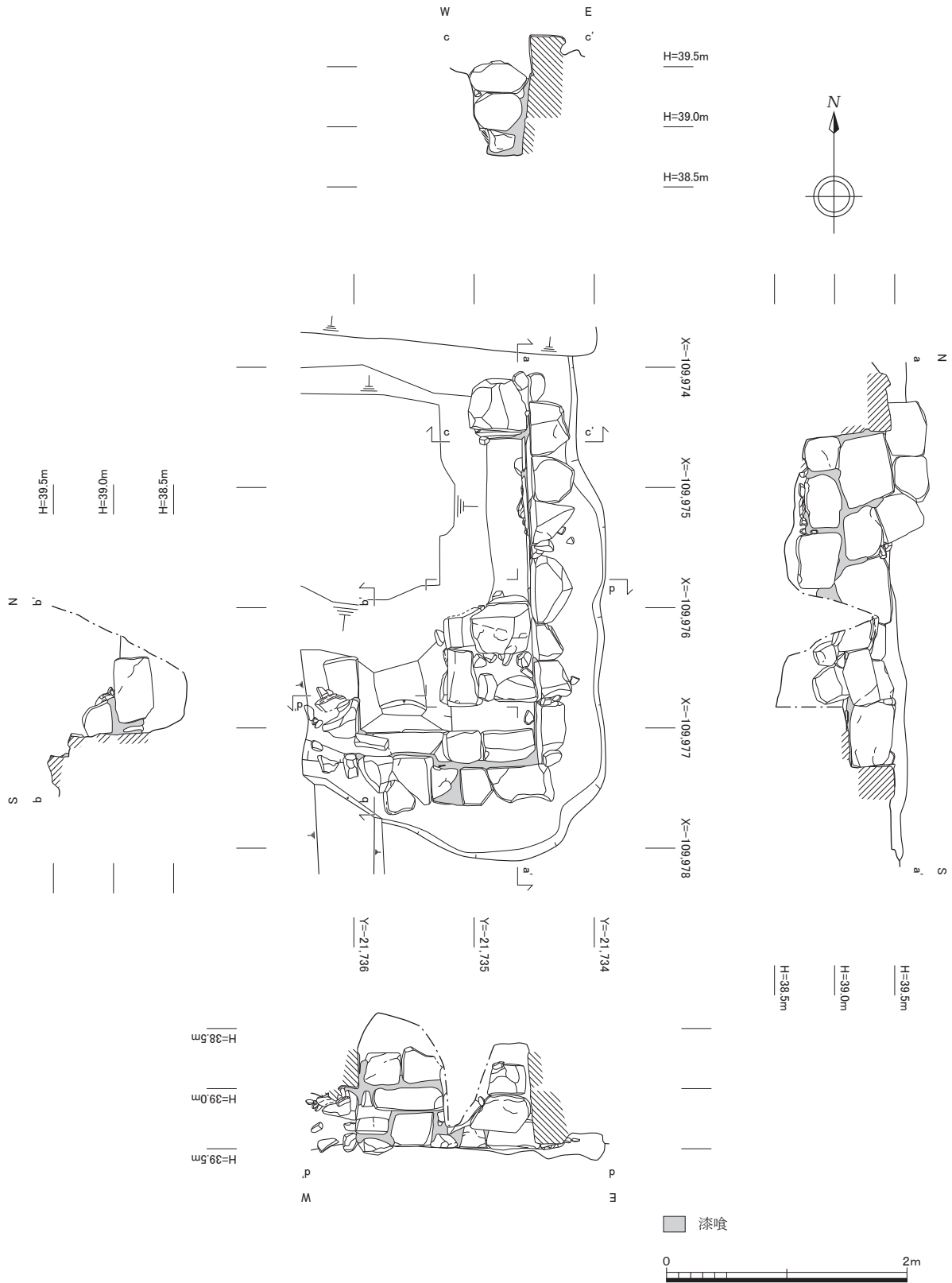
礎石列0368



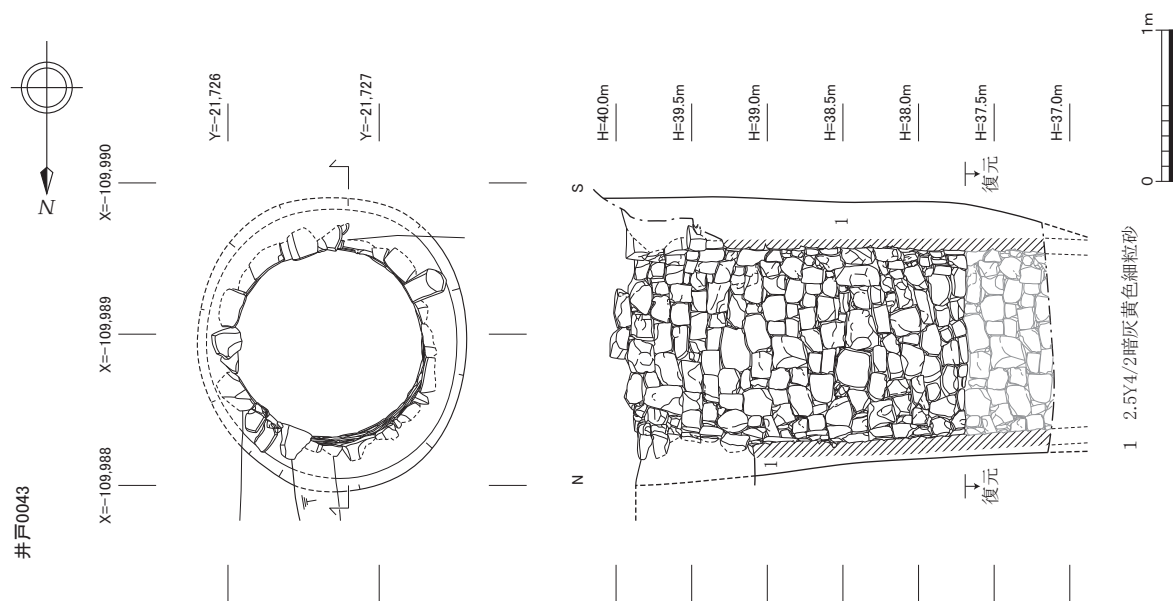
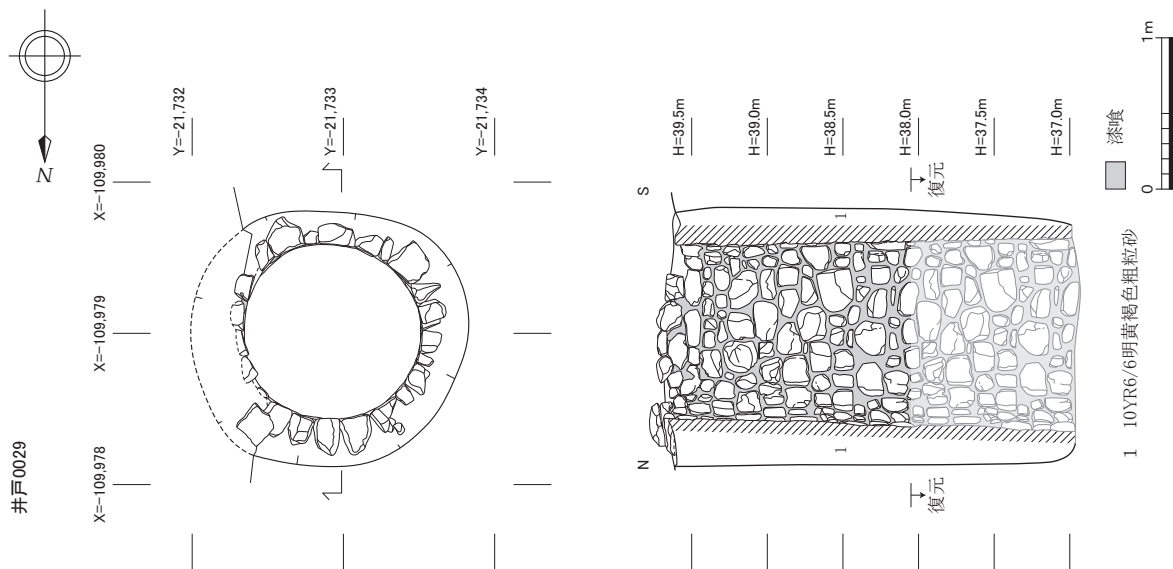
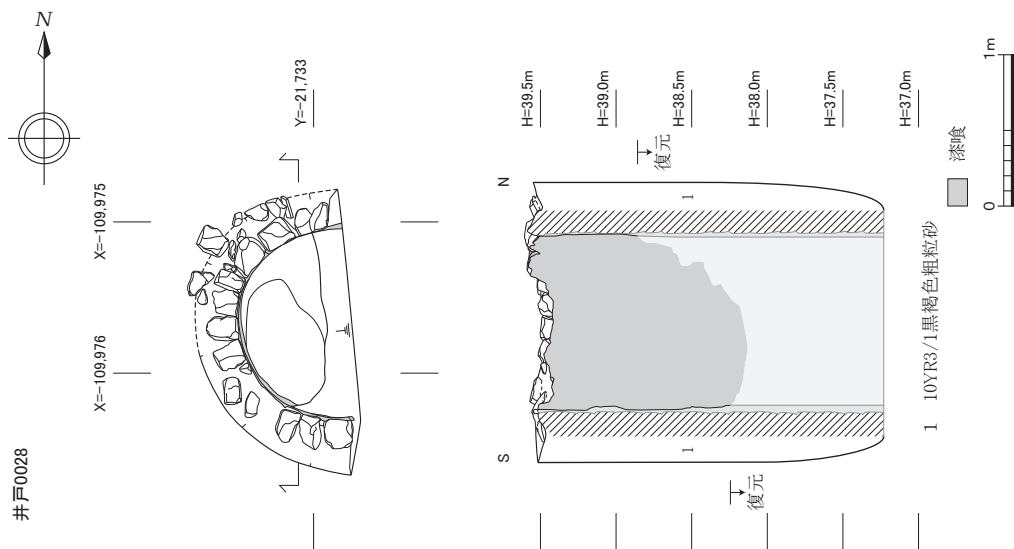
土坑0007



礎石列0368平・断面図（1：40）、土坑0007平・断面図（1：80）



石室0005平·立面图（1：50）



井戸0028・0029・0043平・立面図（1：50）

Y=-21,744

Y=-21,741

Y=-21,738

Y=-21,735

X=-109,968

X=-109,971

X=-109,974

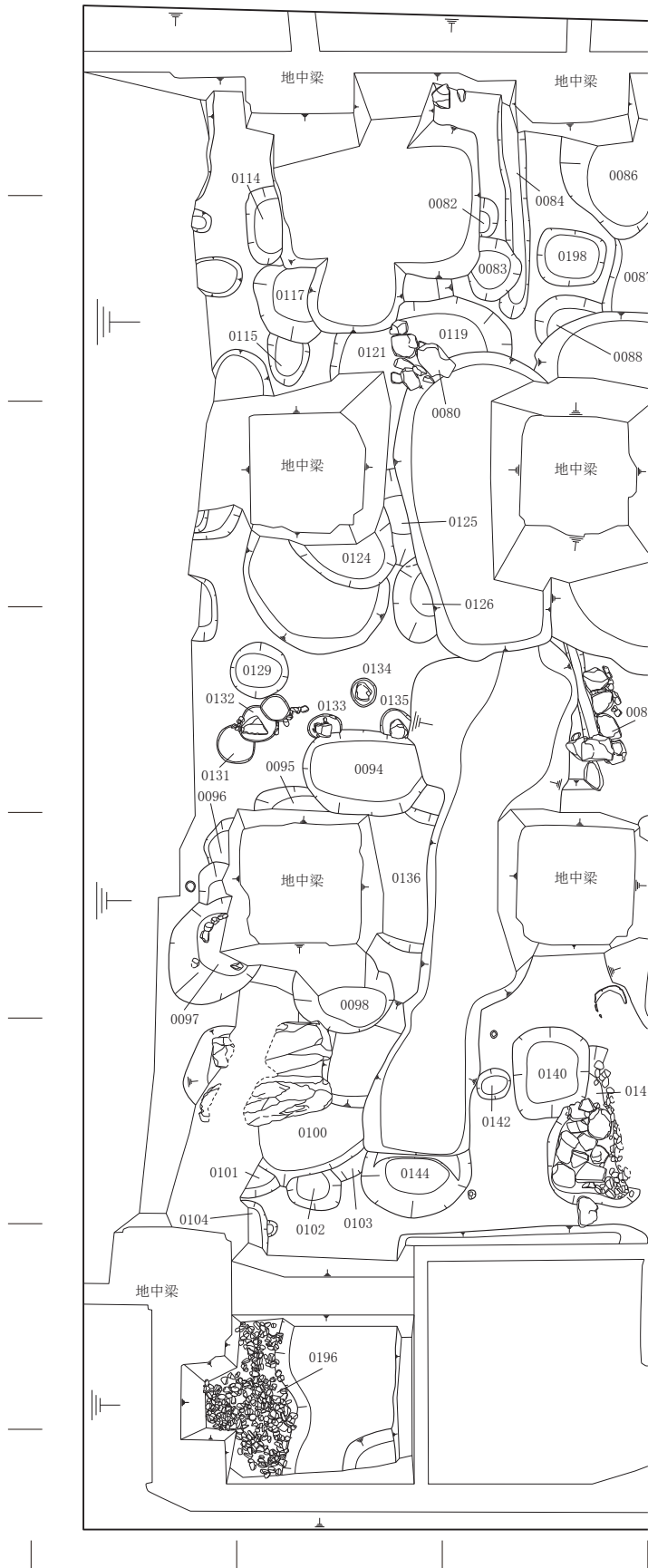
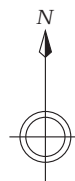
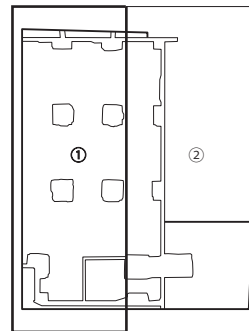
X=-109,977

X=-109,980

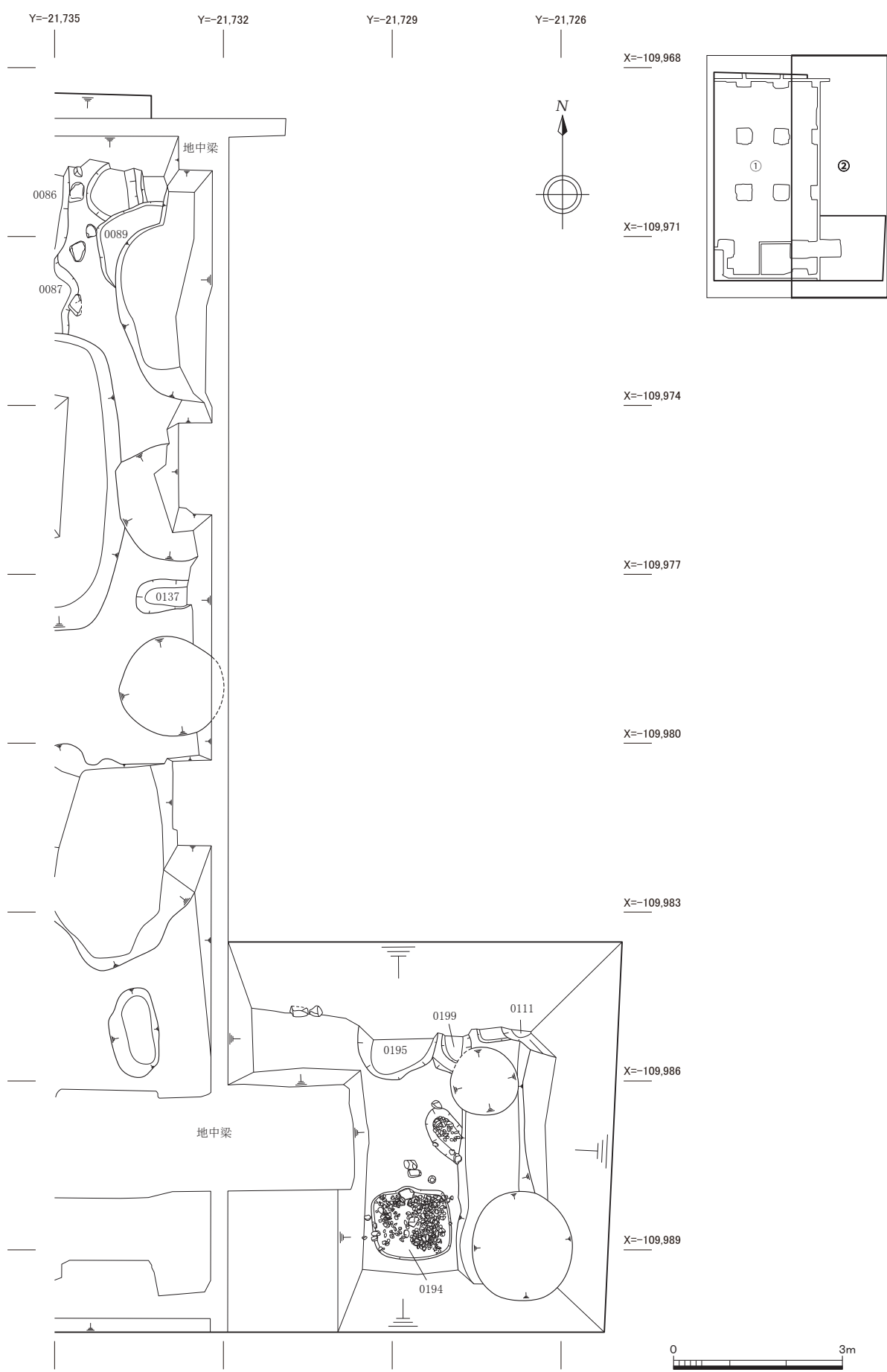
X=-109,983

X=-109,986

X=-109,989

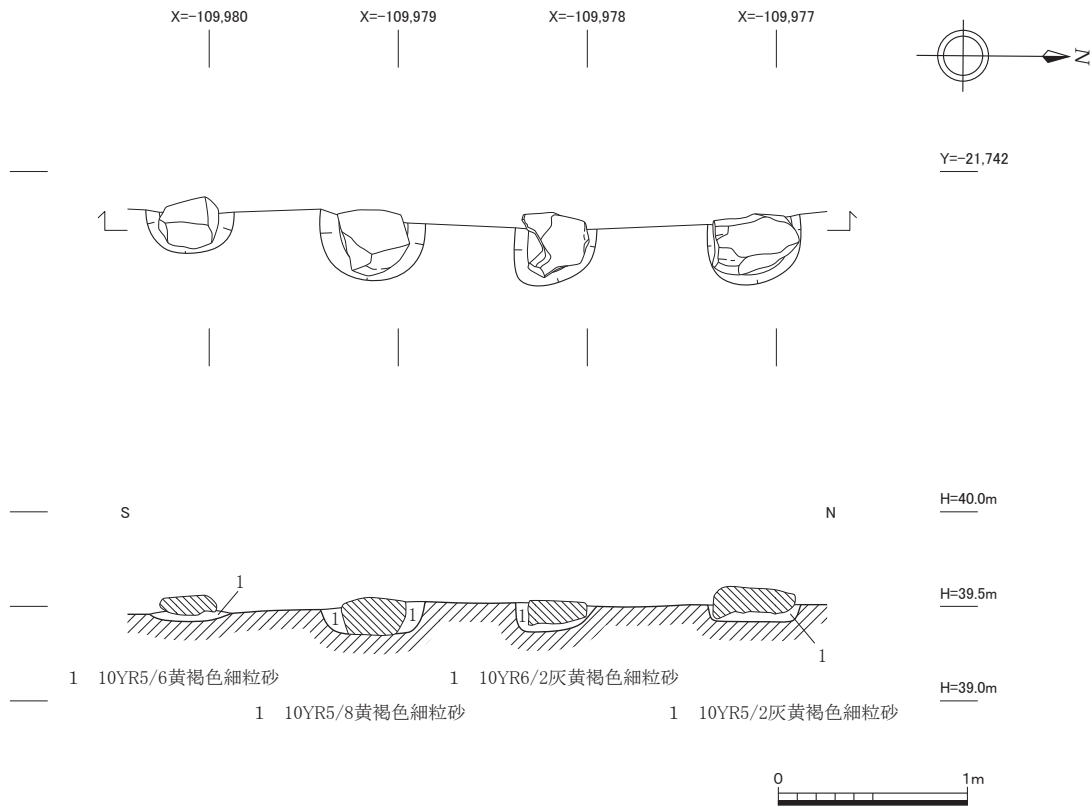


北区第2面平面图① (1 : 100)

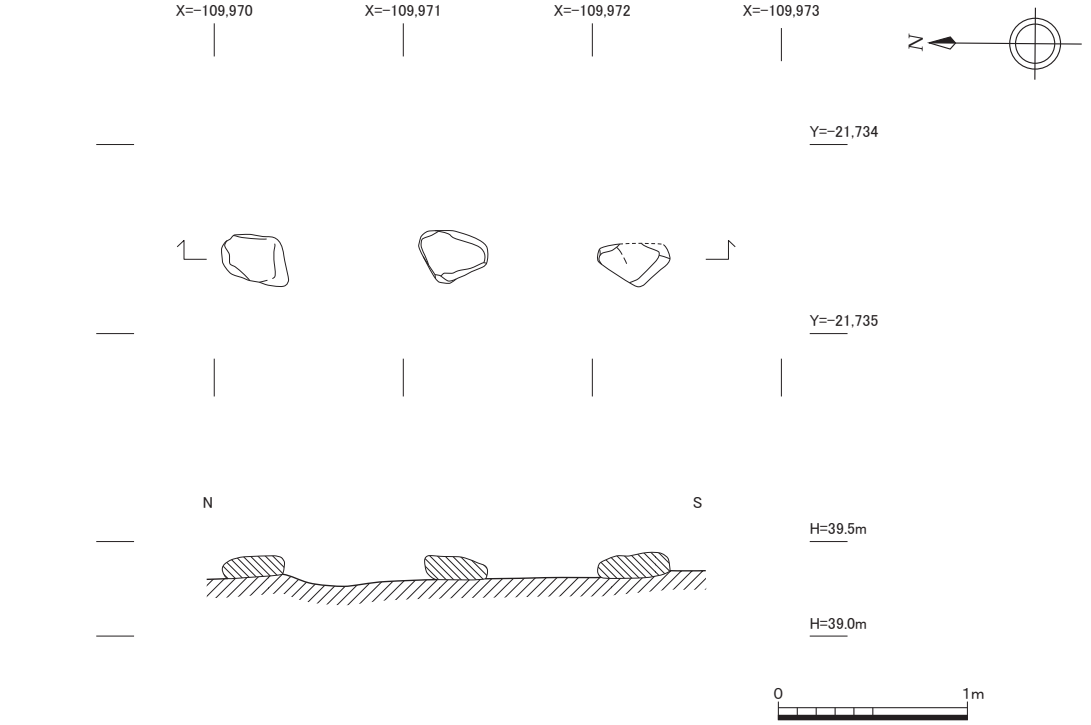


北区第2面平面图② (1 : 100)

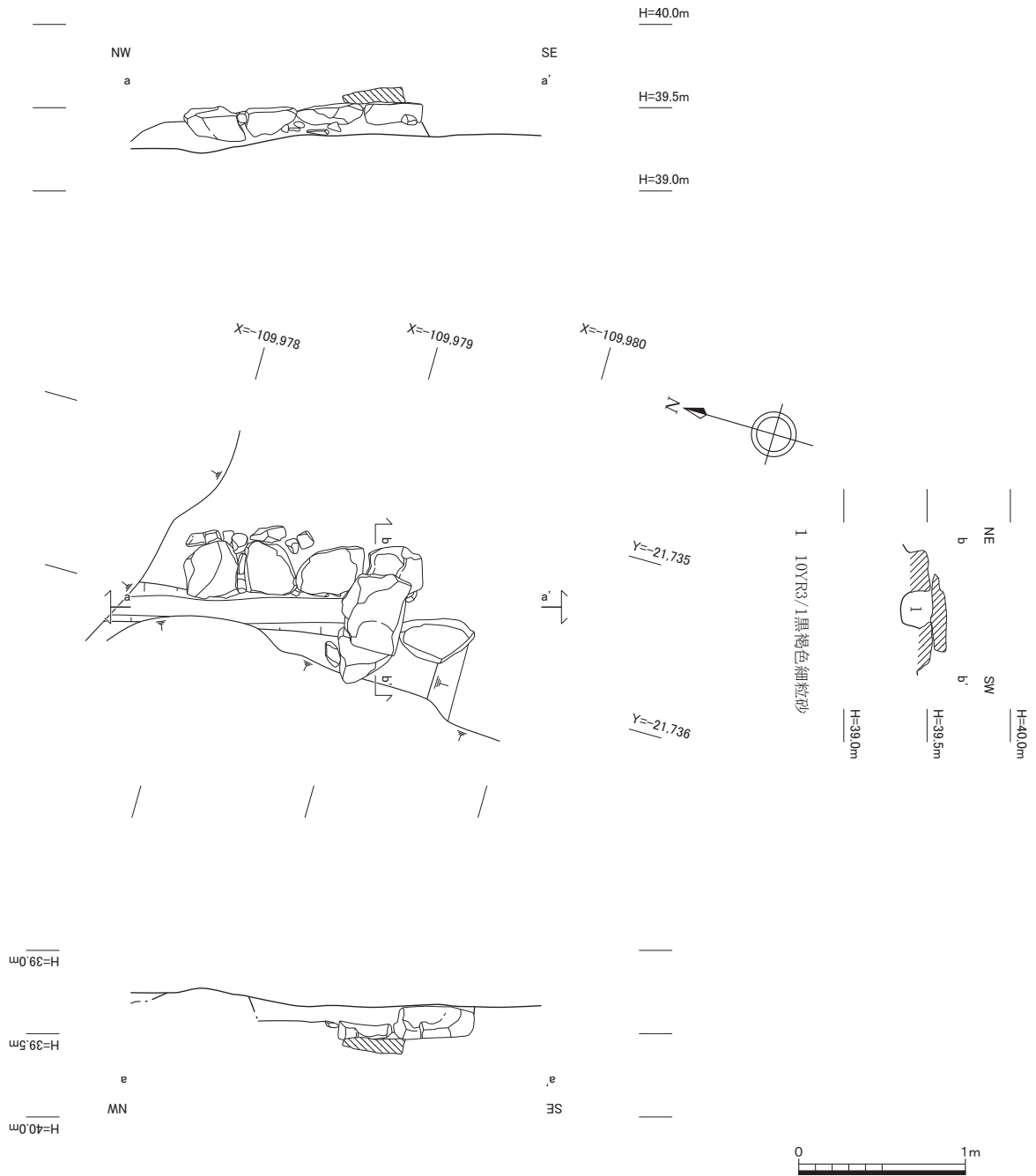
礎石列0079



礎石列0369



礎石列0079・0369平・断面図（1：40）



暗渠状石組み遺構0081 平・立面図 (1 : 40)

Y=-21,744

Y=-21,741

Y=-21,738

Y=-21,735

X=-109,968

X=-109,971

X=-109,974

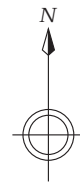
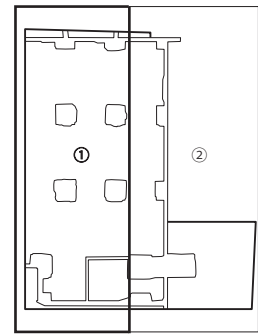
X=-109,977

X=-109,980

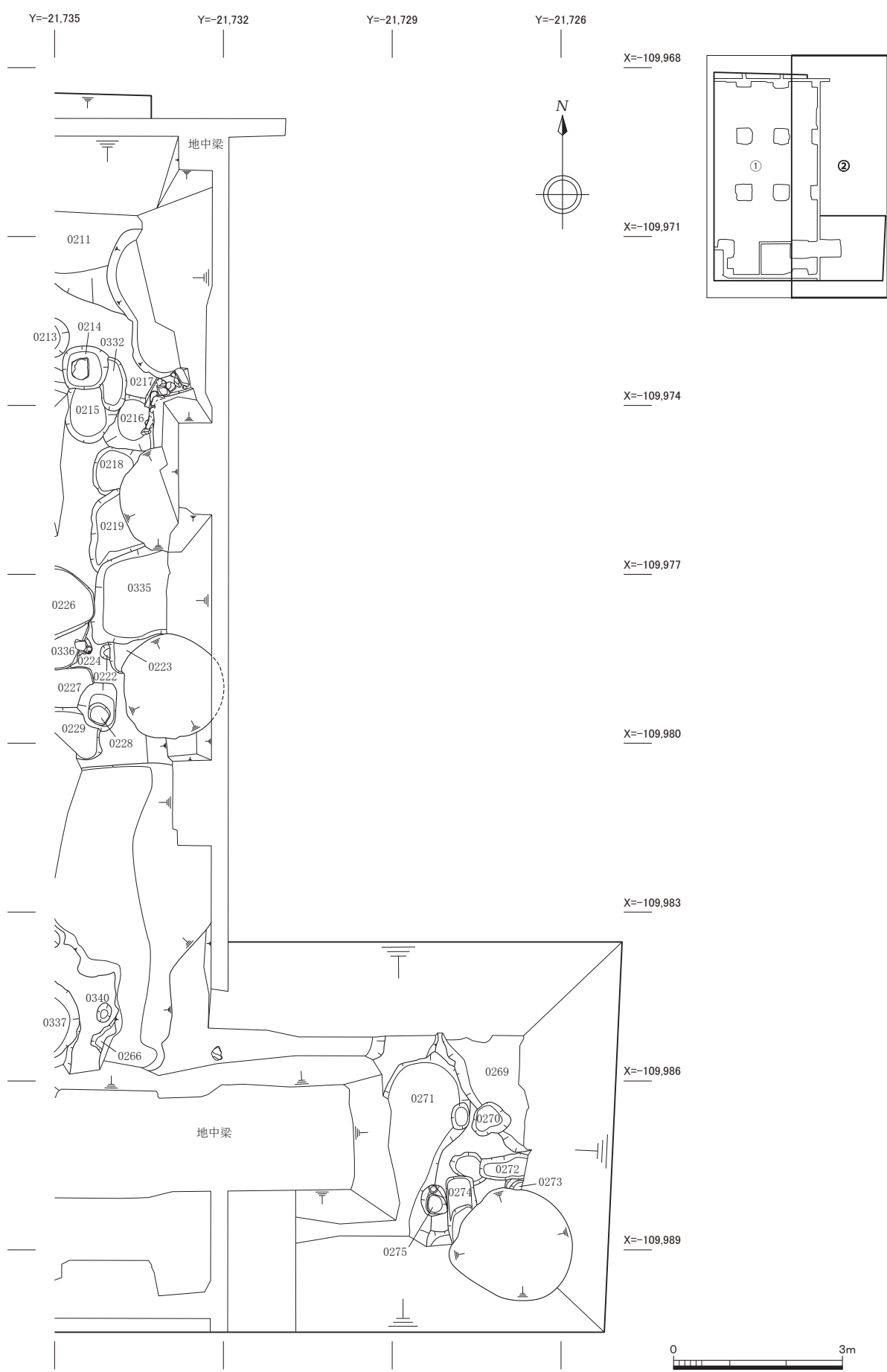
X=-109,983

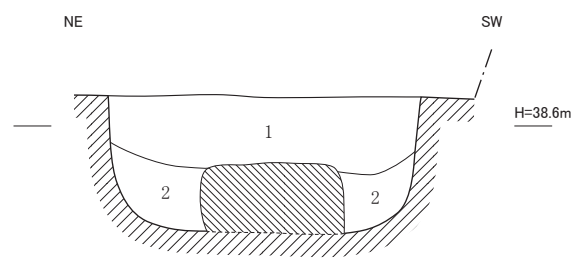
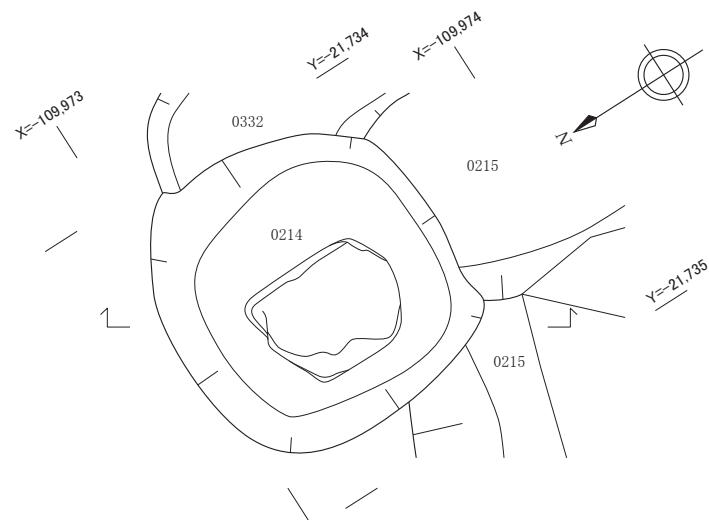
X=-109,986

X=-109,989



北区第3面平面图① (1 : 100)

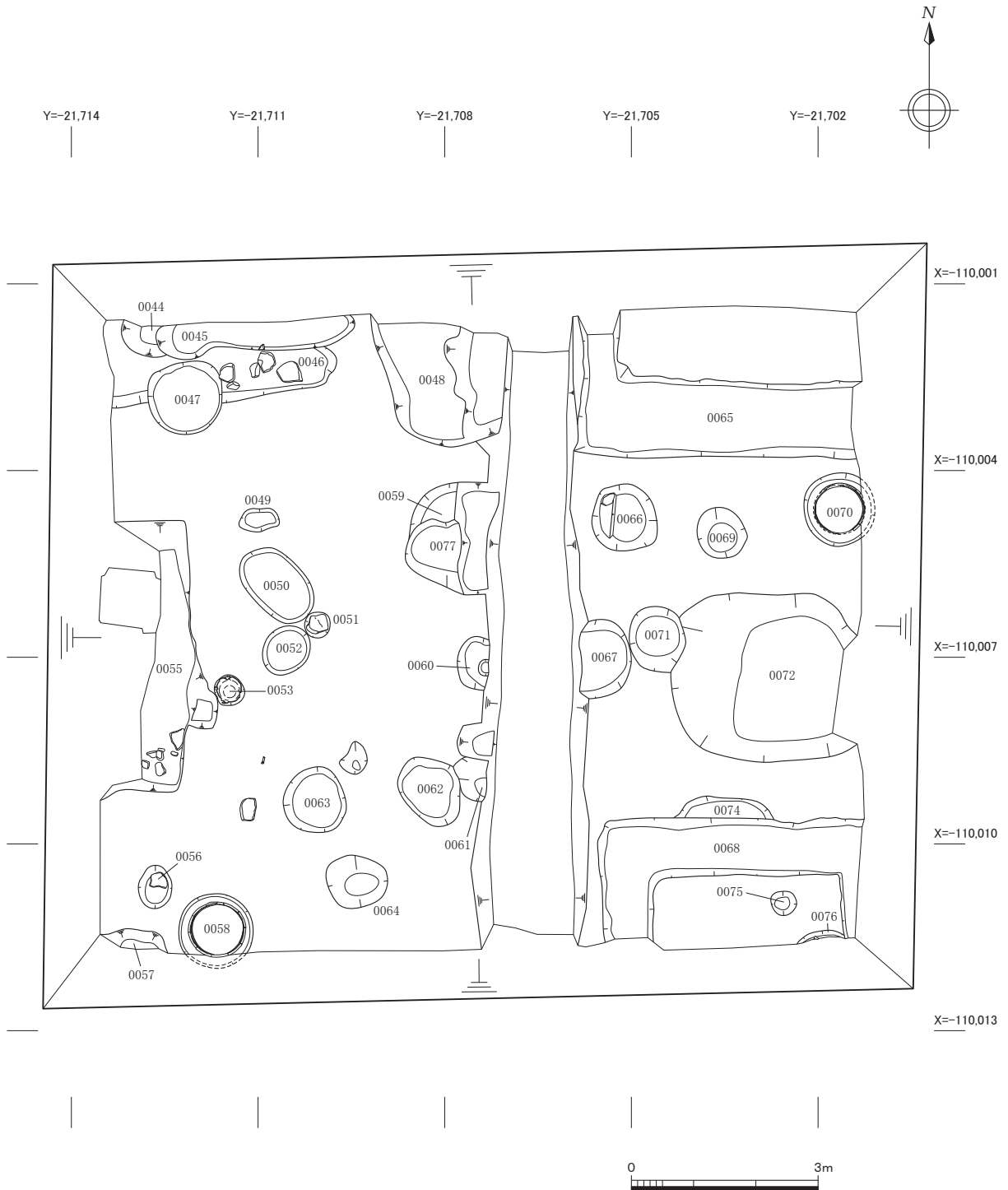




- 1 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 大礫・土器粒・炭粒・地山シルト大ブロック多量含む
2 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 土器粒・炭粒・地山シルト粒含む

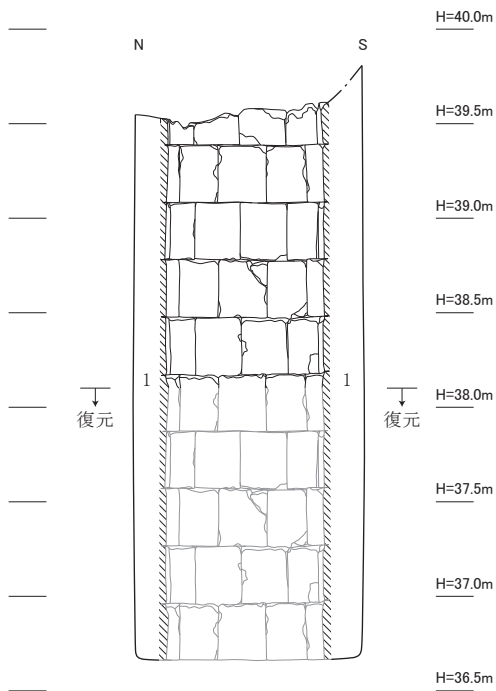
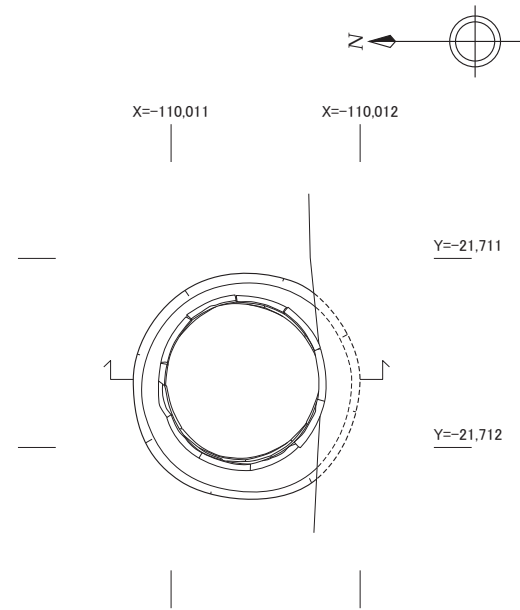


柱穴0214平・断面図（1：20）



南区第1面平面图 (1 : 100)

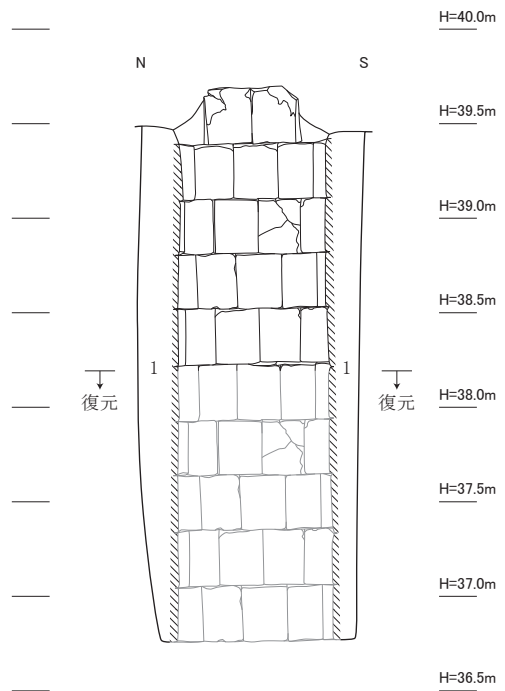
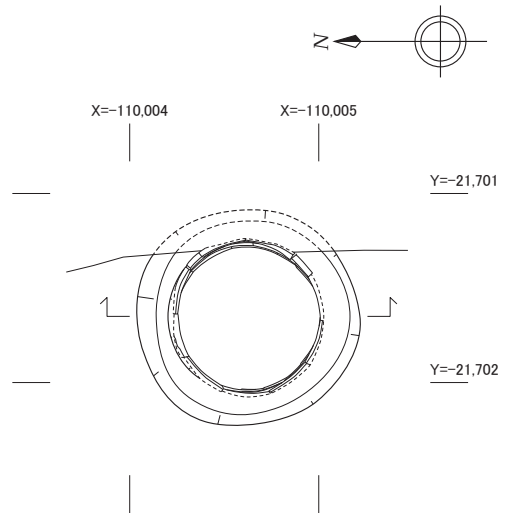
井戸0058



1 7.5YR3/4暗褐色粗粒砂 φ3cm大の礫多量含む

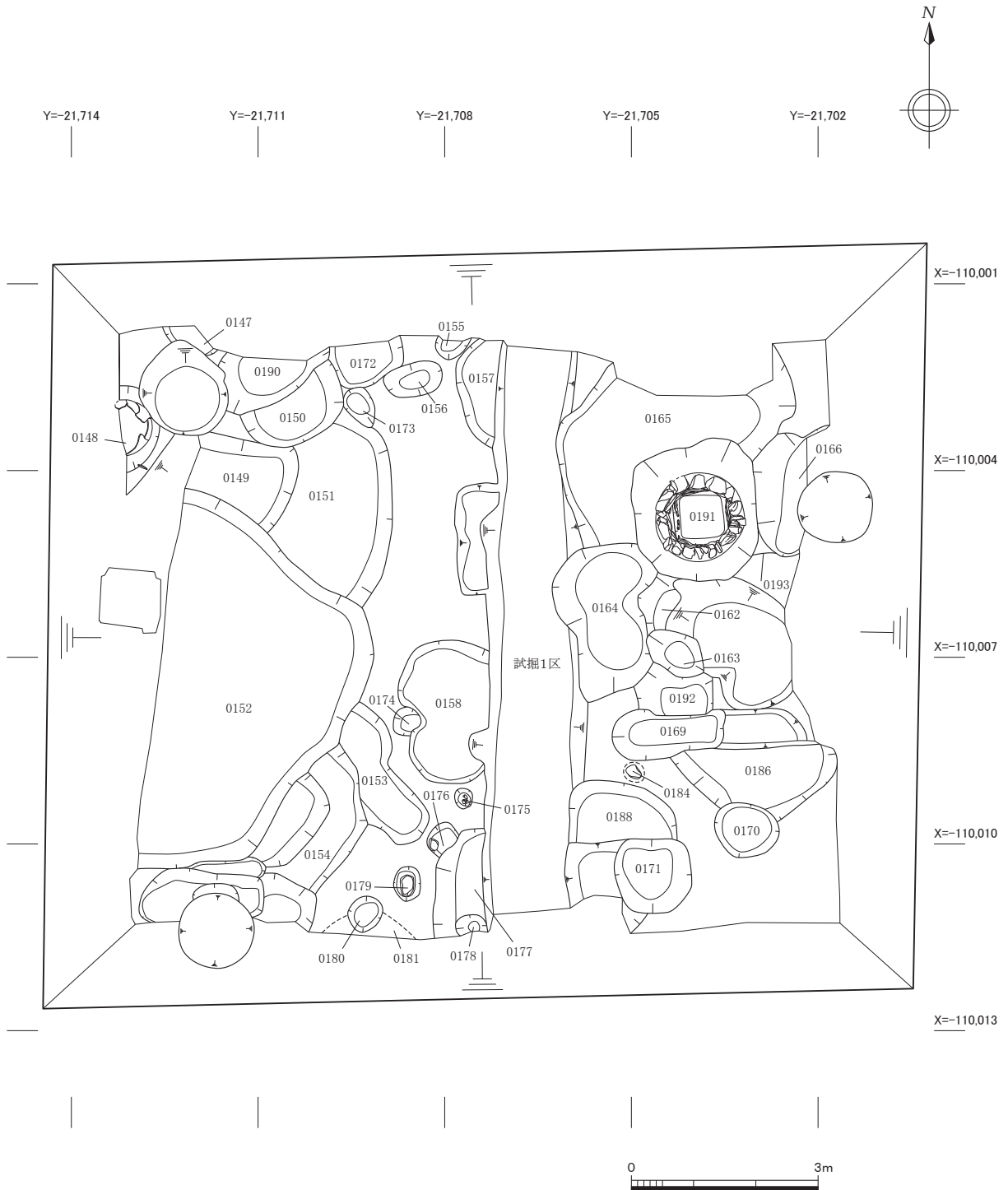


井戸0070



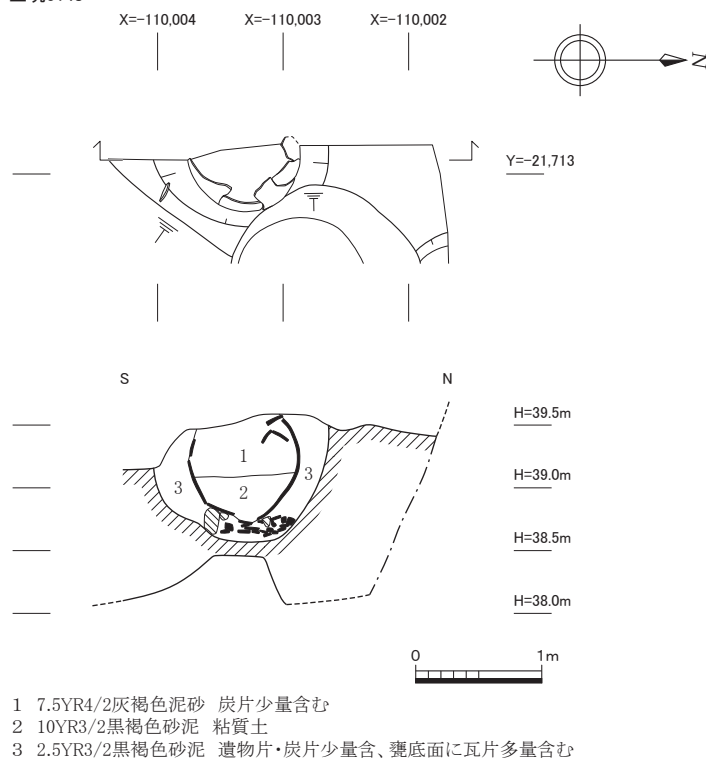
1 10YR5/3こぶい黄褐色粗粒砂 φ5cmの礫多量含む



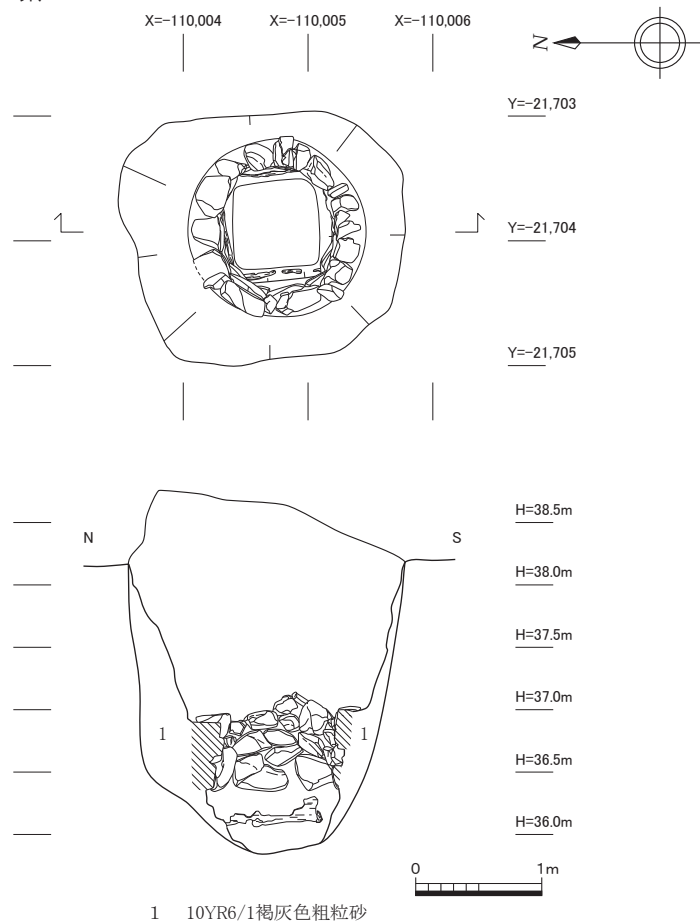


南区第2面平面図 (1 : 100)

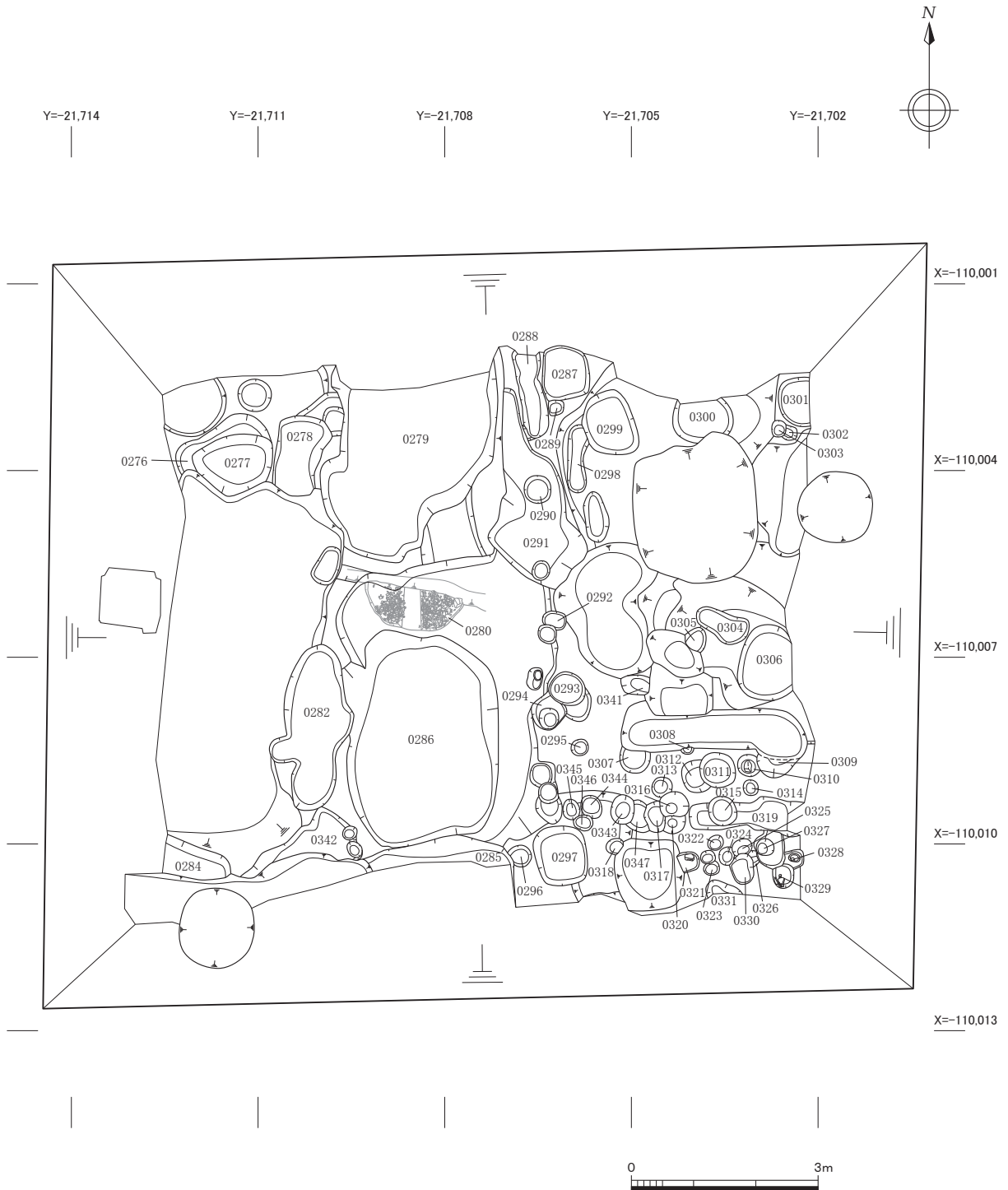
土坑0148



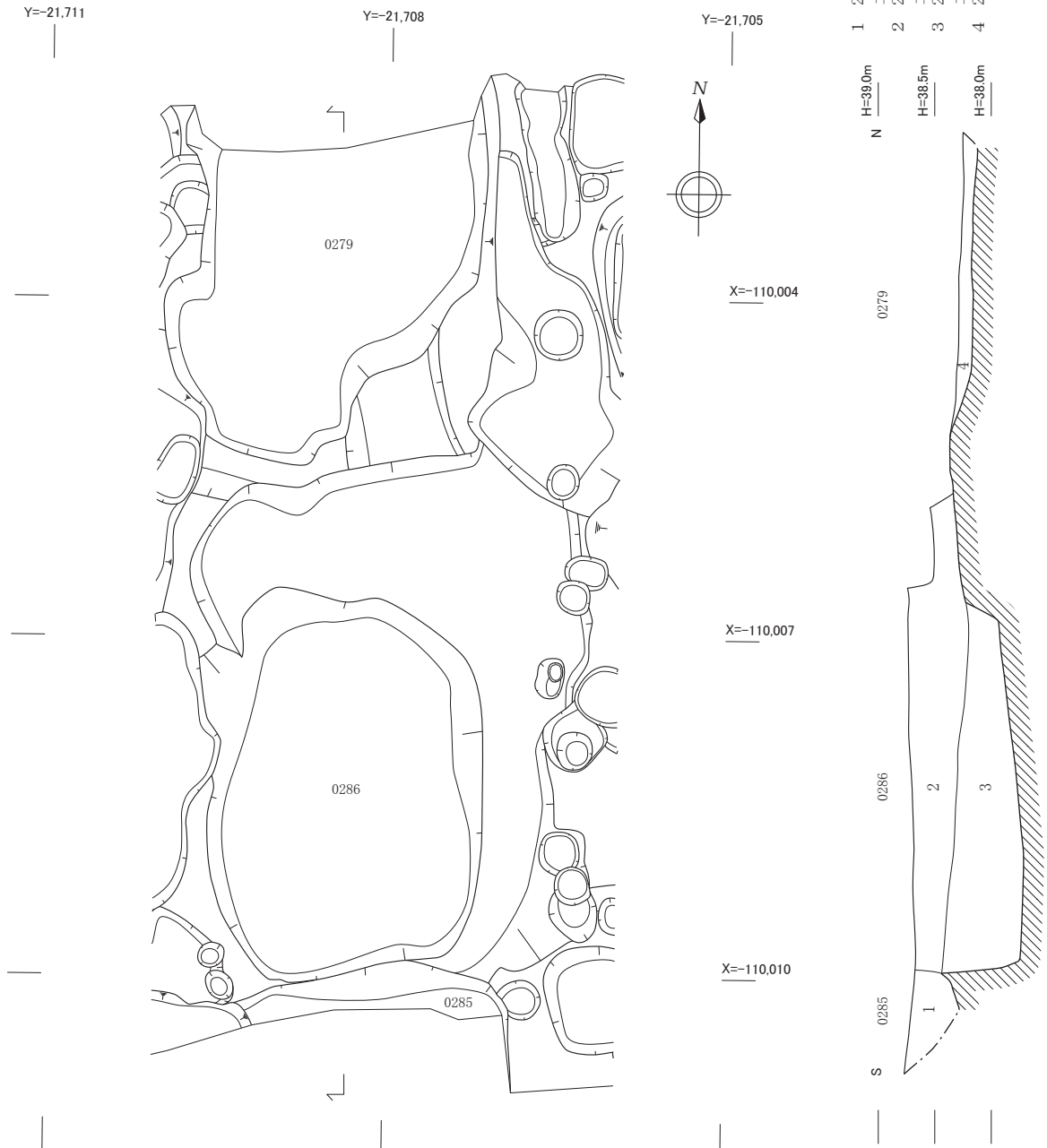
井戸0191



土坑0148平・断面図、井戸0191平・立面図（1：60）



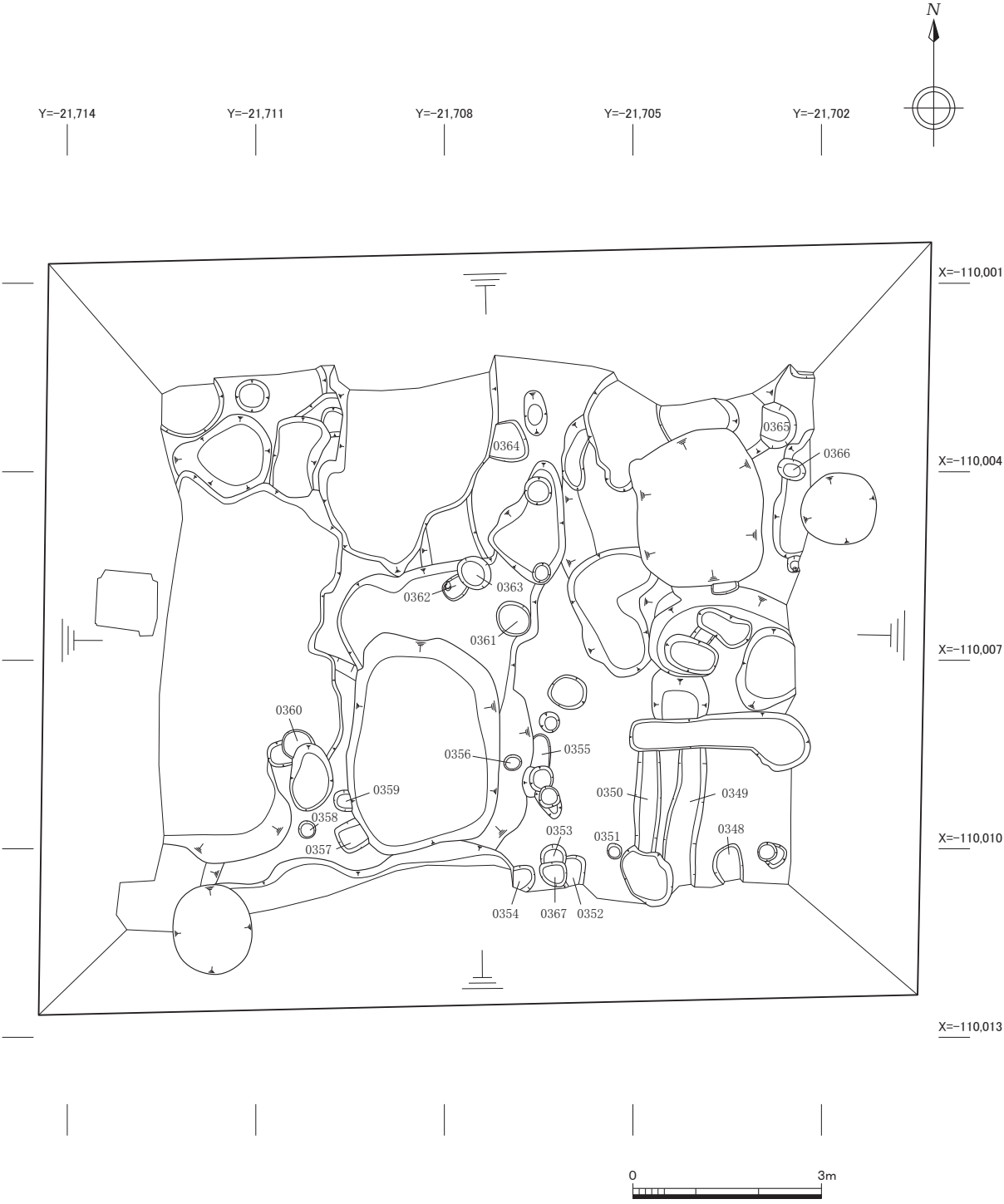
南区第3面平面图 (1 : 100)



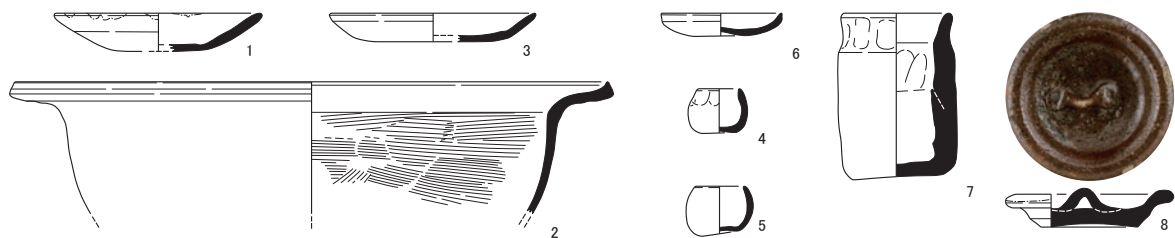
土坑0279・0286・0285平・断面図（1：60）



土坑0280遺物出土状況平・断面図（1：20）

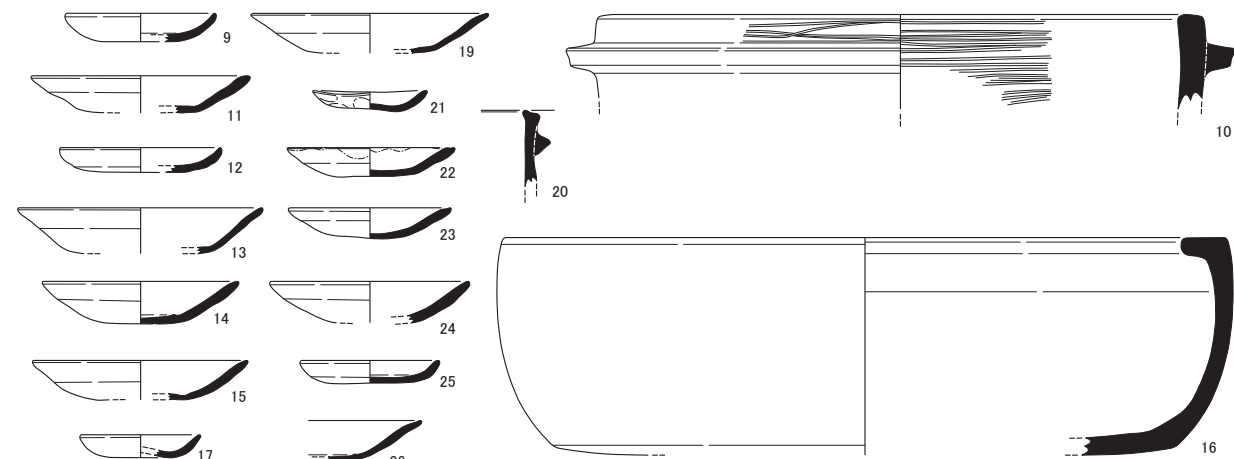


南区第4面平面图（1：100）



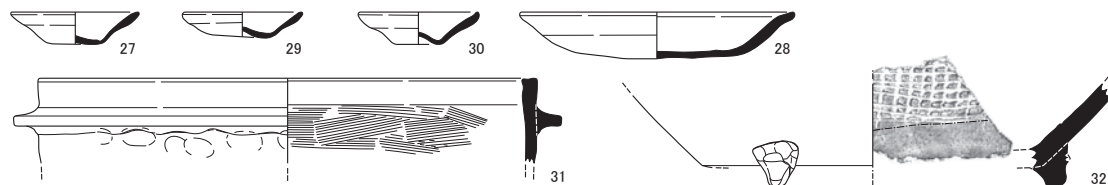
1、2 : 土坑0007出土遺物
3 : 土坑0022出土遺物

4~8 : 北区第1層出土遺物

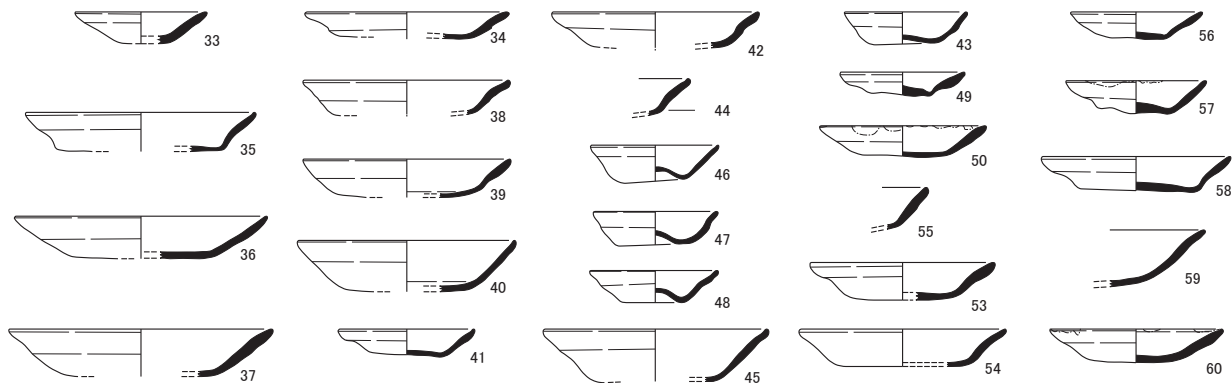


9、10 : 土坑0086出土遺物 15、16 : 土坑0109出土遺物
11 : 土坑0087出土遺物 17、18 : 土坑0114出土遺物
12、13 : 土坑0088出土遺物 19 : 土坑0120出土遺物
14 : 土坑0094出土遺物 20 : 土坑0124出土遺物

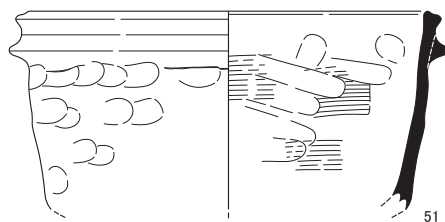
21~23: 土坑0144出土遺物
24 : 土坑0196出土遺物
25、26 : 土坑0197出土遺物



27~32 : 北区第2層出土遺物

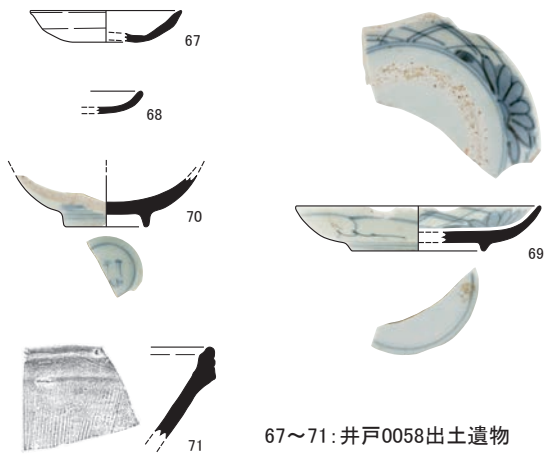


33 : 土坑0202出土遺物
34 : 土坑0208出土遺物
35~37 : 土坑0210出土遺物
38~41 : 土坑0211出土遺物
42、43 : 土坑0215出土遺物
44~48 : 土坑0216出土遺物
49~52 : 土坑0226出土遺物
53~55 : 土坑0227出土遺物
56 : 土坑0334出土遺物
57~60 : 土坑0336出土遺物

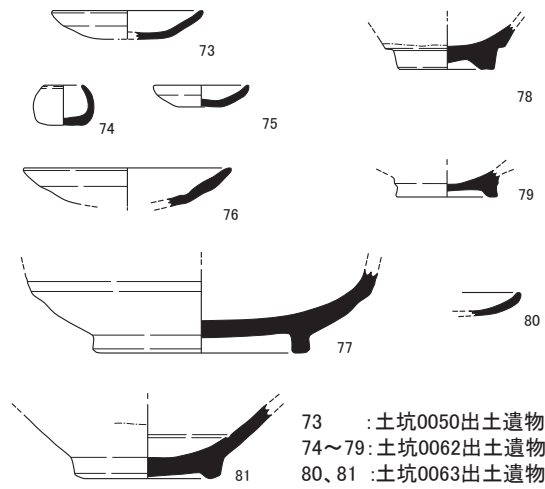




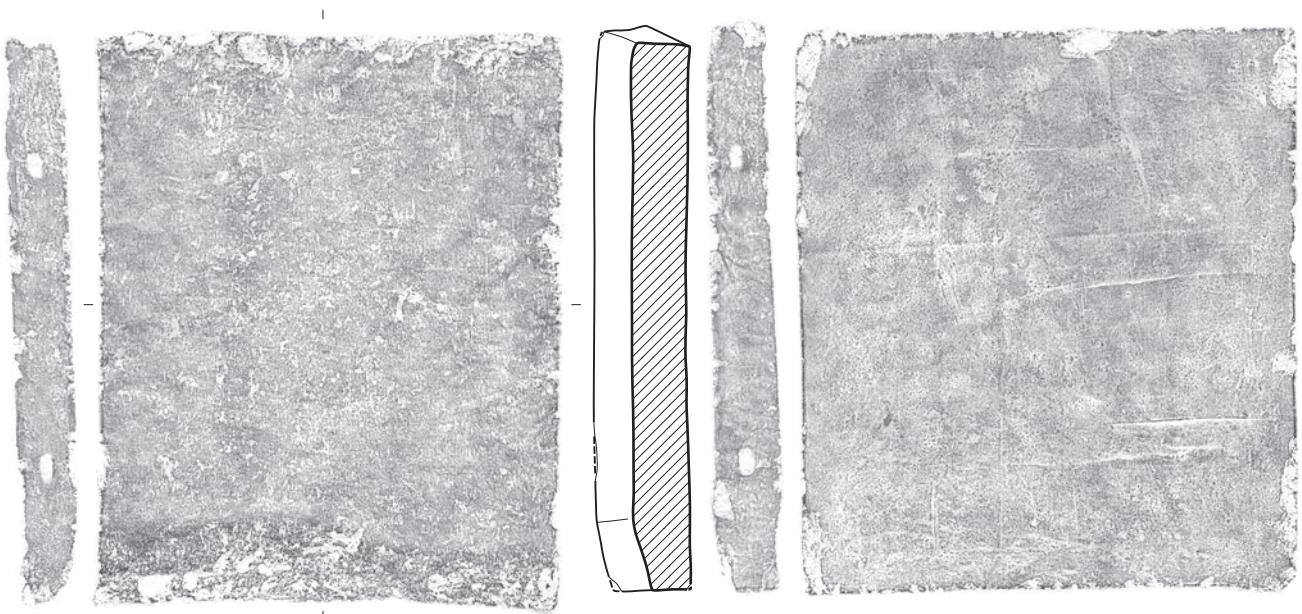
61、62 : 布基礎0046出土遺物
63～66 : 布基礎0065出土遺物



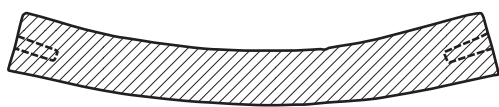
67～71 : 井戸0058出土遺物



73 : 土坑0050出土遺物
74～79 : 土坑0062出土遺物
80、81 : 土坑0063出土遺物

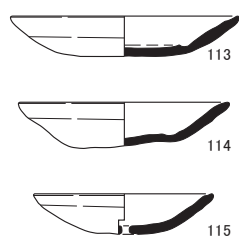
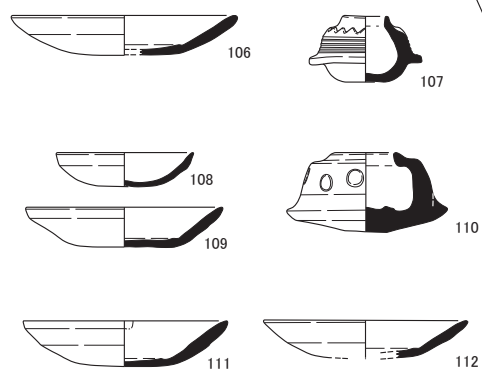
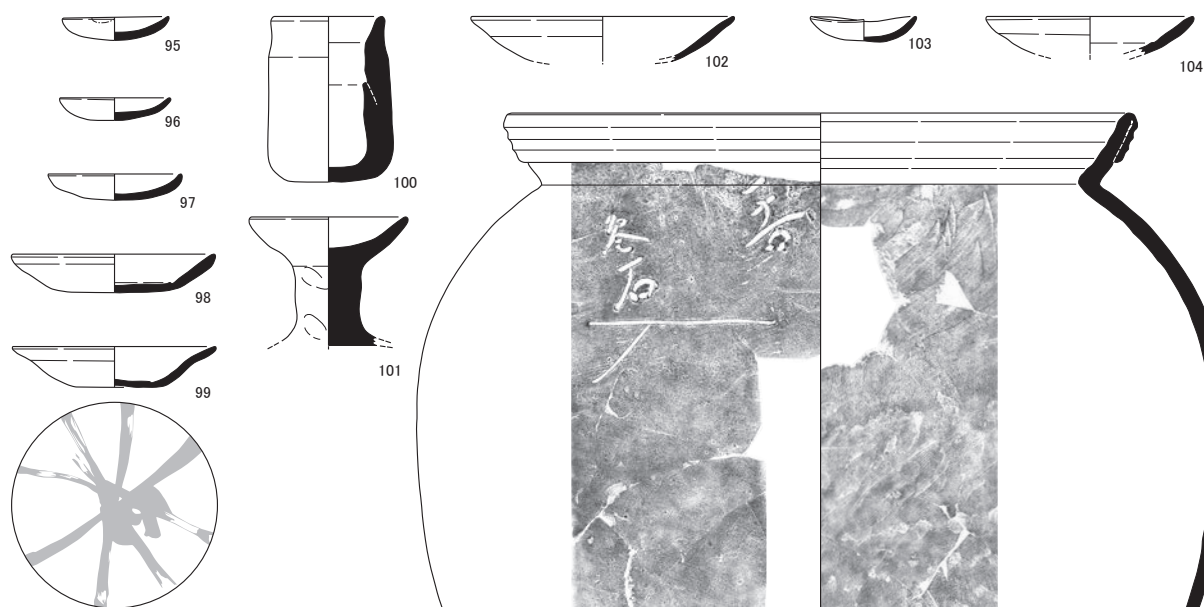
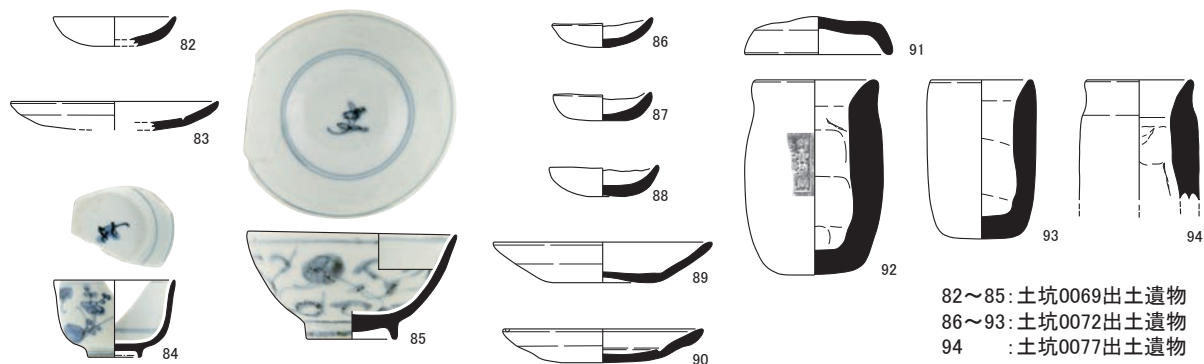


72



72 : 井戸0070出土遺物



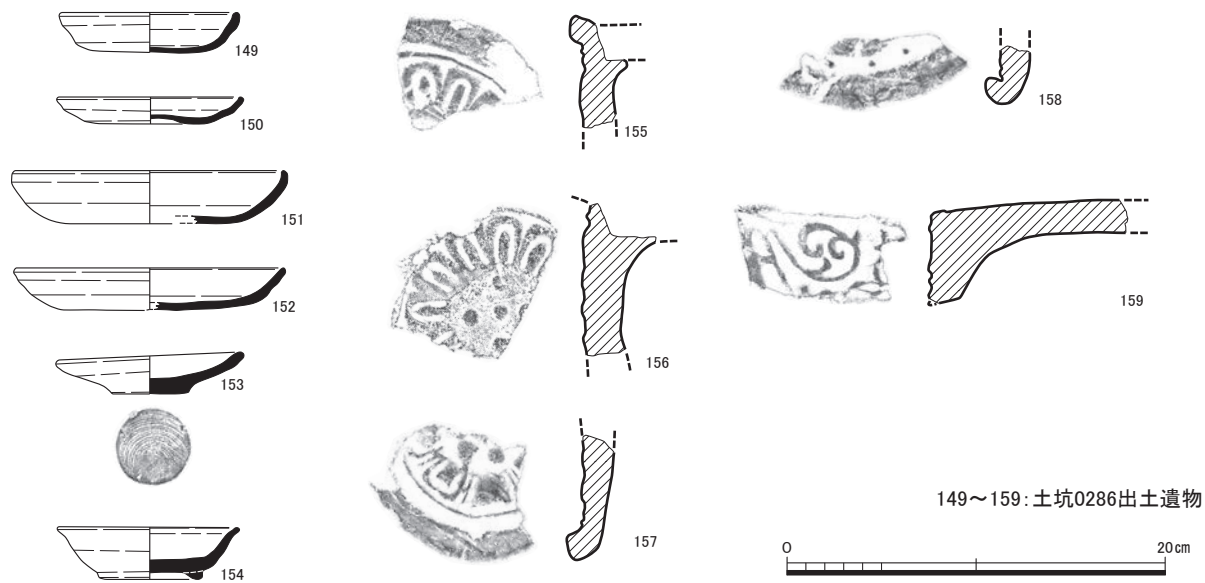
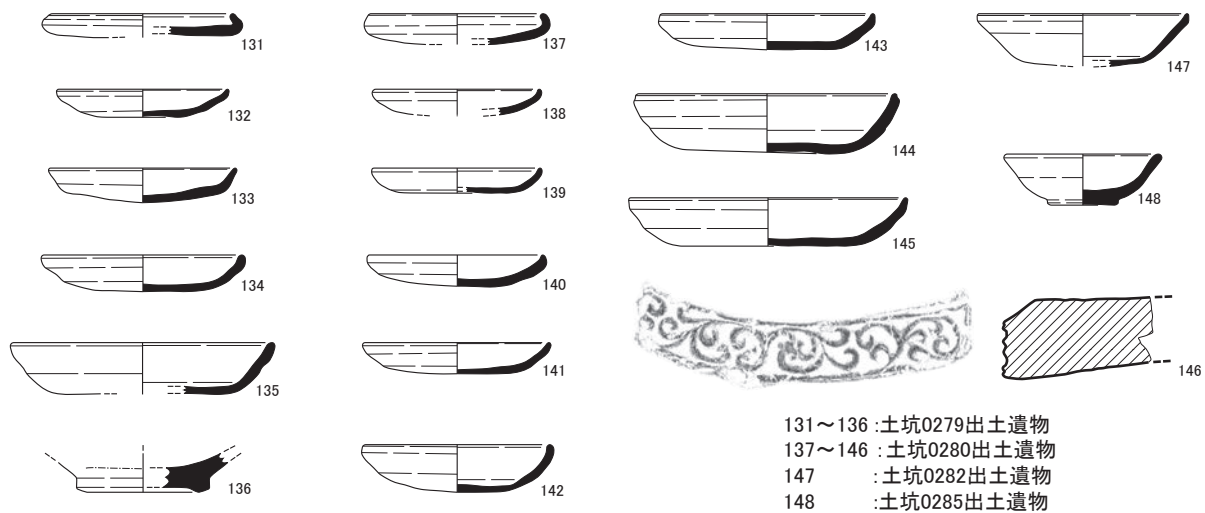
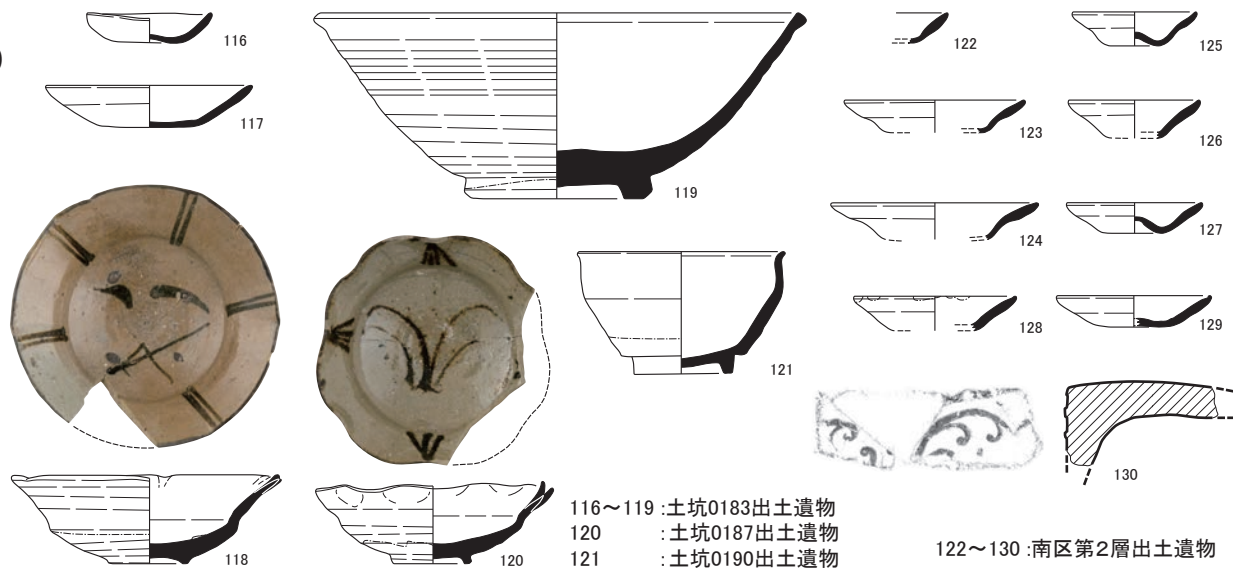


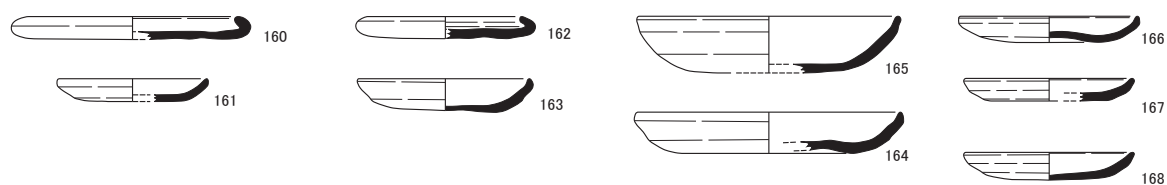
106 : 土坑0150出土遺物
107 : 土坑0151出土遺物
108~110 : 土坑0152出土遺物
111 : 土坑0160出土遺物
112 : 土坑0163出土遺物
113~115: 土坑0165出土遺物



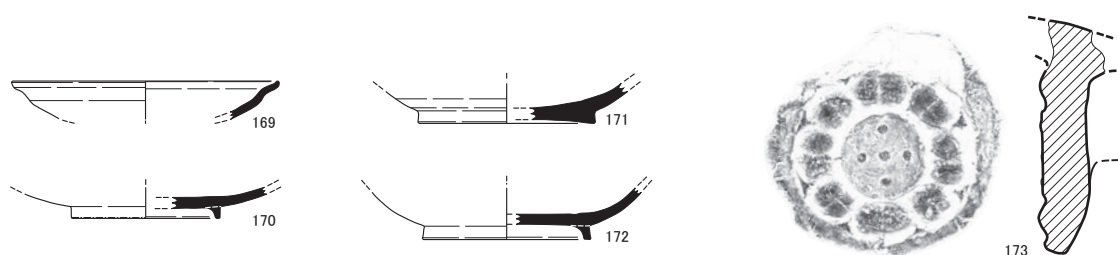
102 : 井戸0191出土遺物
103~105 : 土坑0148出土遺物



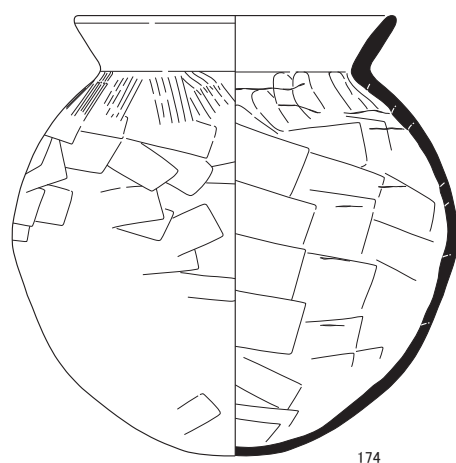




160、161 :土坑0287出土遺物 166 :土坑0297出土遺物
162～165 :土坑0291出土遺物 167、168 :ピット0325出土遺物

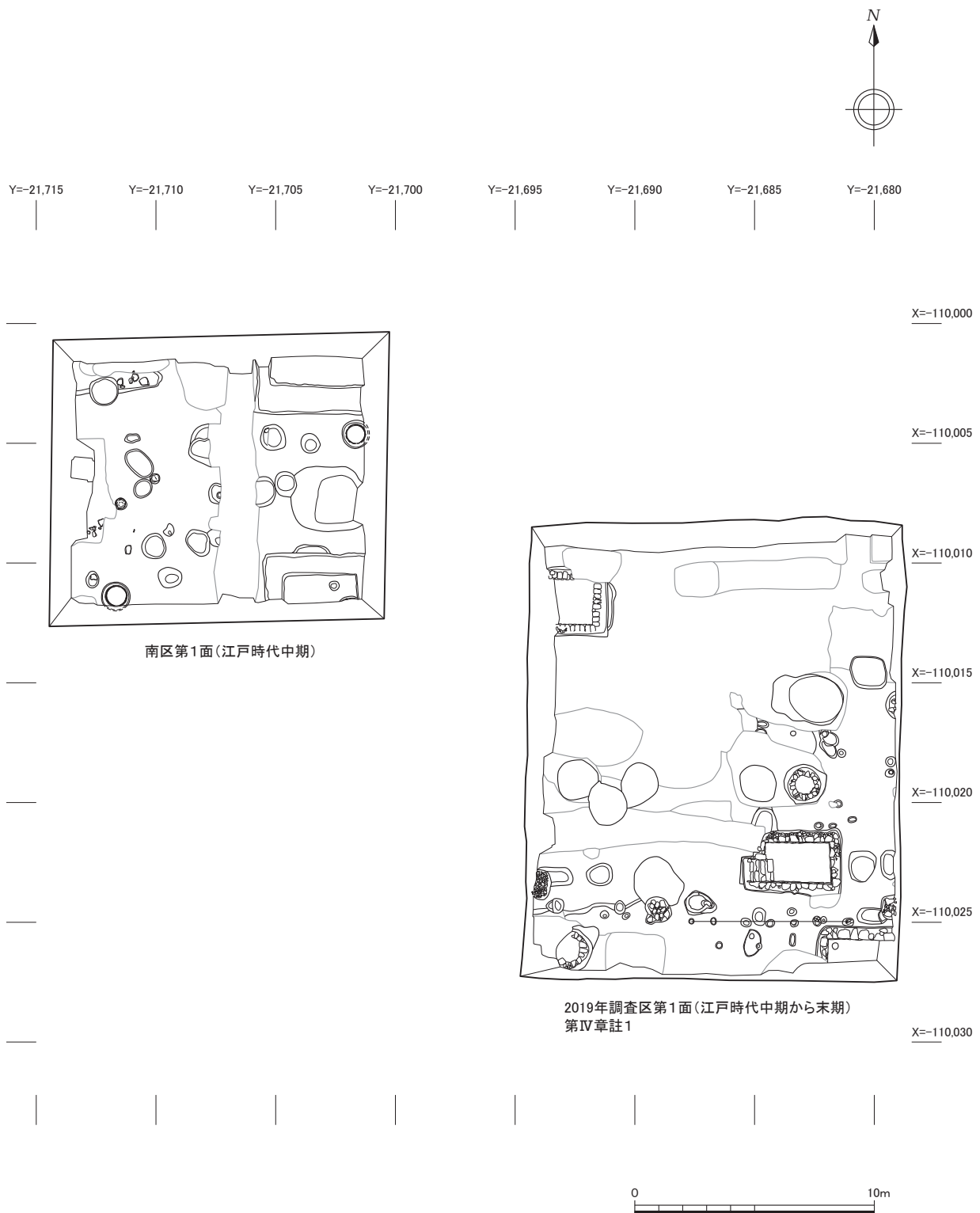


169～173 :南区第3層出土遺物

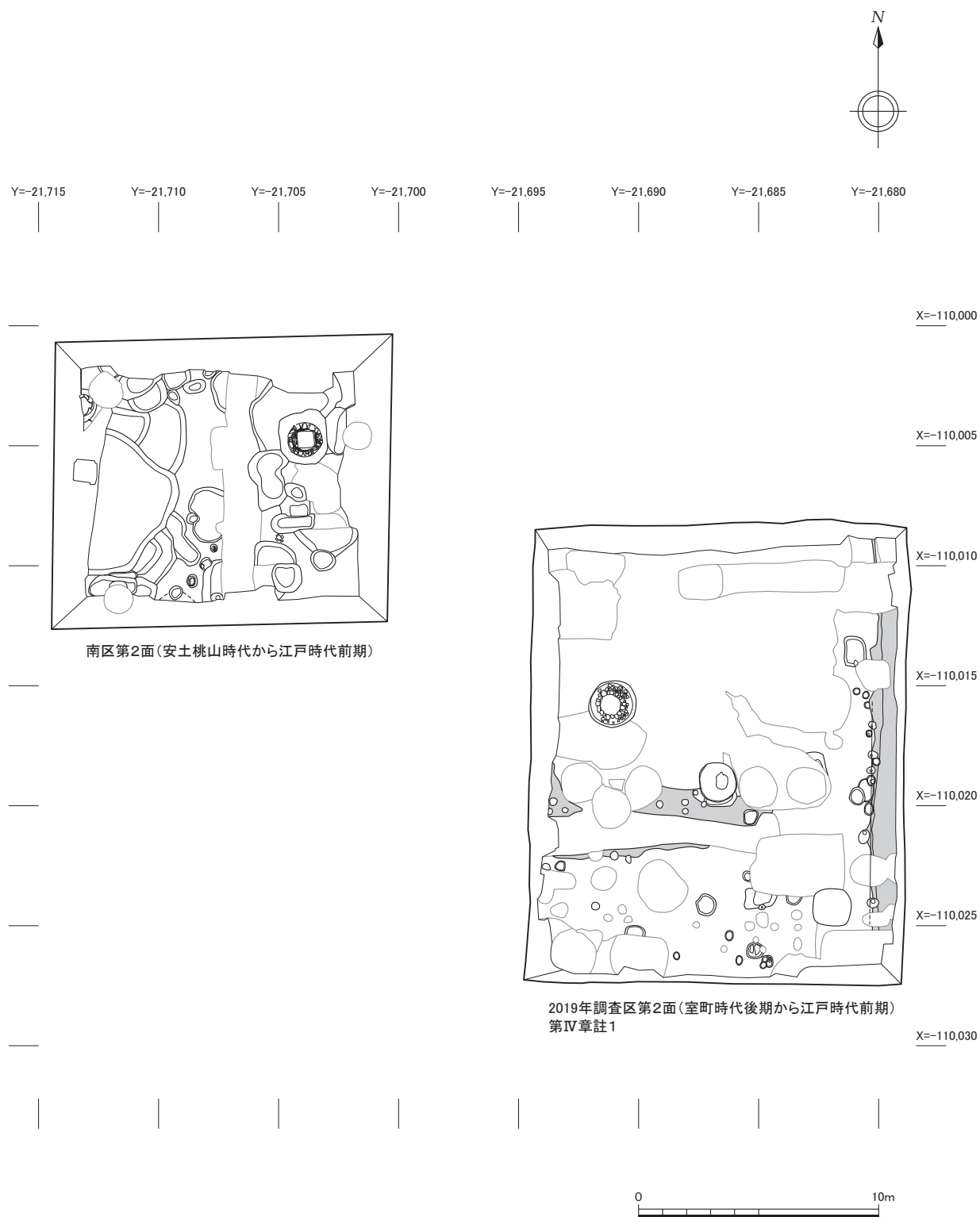


174 :土坑0357出土遺物

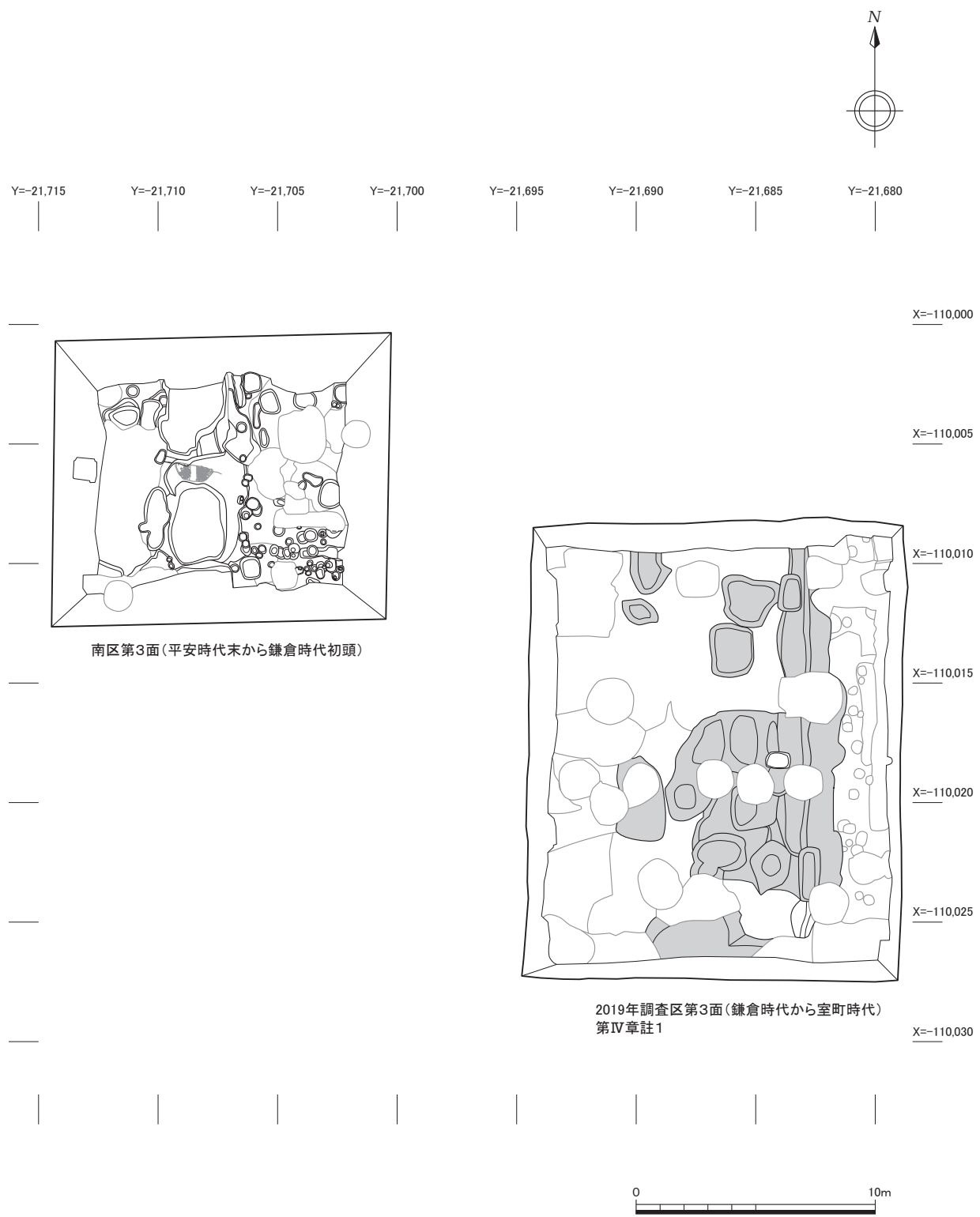




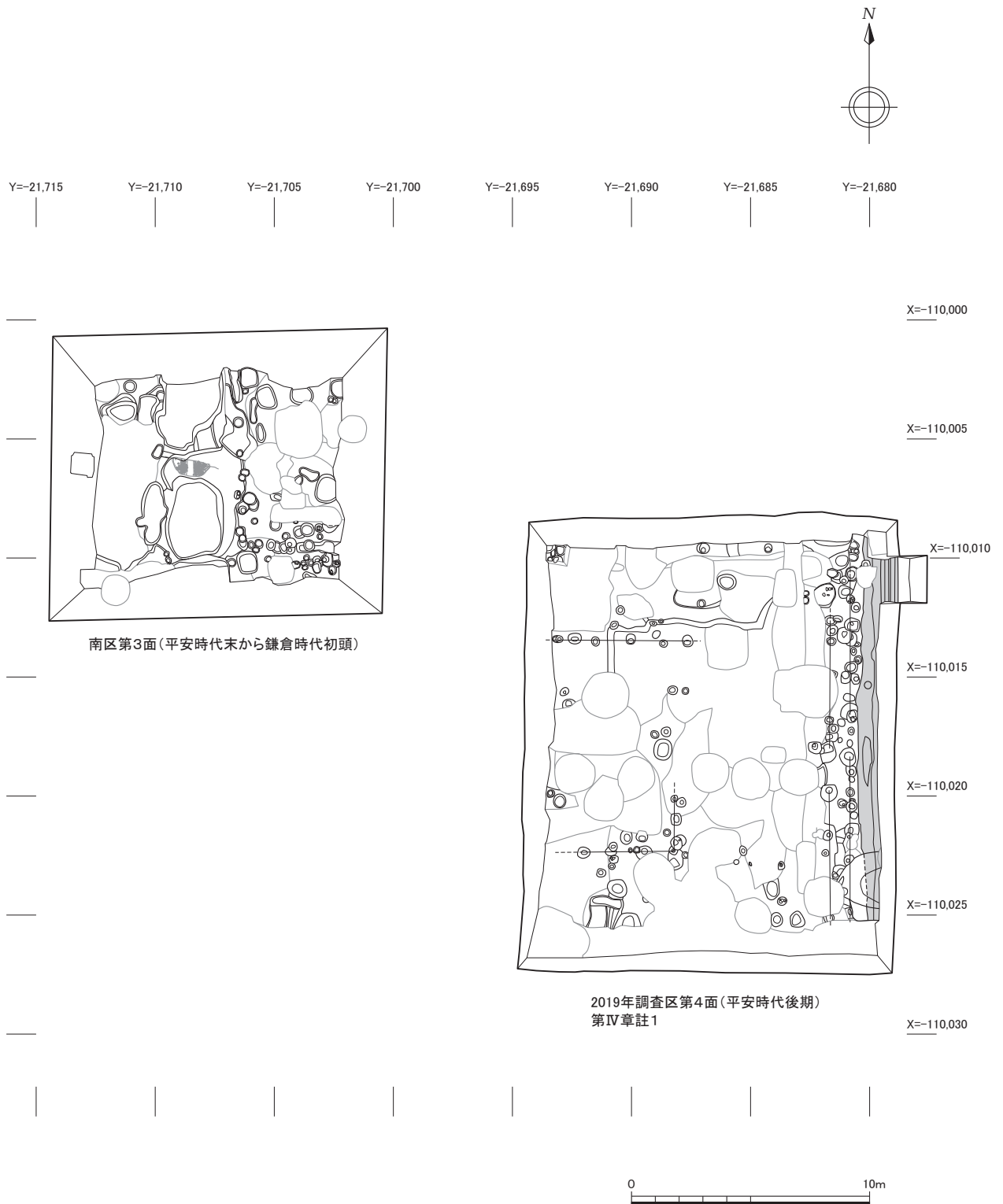
南区・2019年調査区遺構概要図1 (1 : 250)



南区・2019年調査区遺構概要図2 (1 : 250)



南区・2019年調査区遺構概要図3（1：250）



南区・2019年調査区遺構概要図4 (1 : 250)



1. 調査地全景（調査地上空より三条通を望む）



1. 北区 第1面遺構完掘状況（上が西）



2. 北区 第1面 土坑0007景石検出状況（南東から）



1. 北区 第1面 石室0005検出状況（南西から）



2. 北区 第1面 石室0005検出状況（北西から）



1. 北区 第2面遺構完掘状況（上が西）



2. 北区 第2面 暗渠状石組み遺構0081検出状況（南東から）



1. 北区 第3面遺構完掘状況（上が西）



2. 南区 第1面遺構完掘状況（上が西）



1. 南区 第2面遺構完掘状況（上が北）



2. 南区 第2面 土坑0148甕検出状況（北から）



1. 南区 第2面 井戸0191完掘状況（南から）



2. 南区 第3面遺構完掘状況（上が北）



1. 南区 第3面 土坑0280検出状況（南東から）



2. 南区 第4面遺構完掘状況（上が北）



32

1. 北区 第2層出土遺物



52

2. 北区 第3面 土坑0226出土遺物



1. 北区 第3面 土坑0211出土遺物



2. 北区 第3面 土坑0336出土遺物



1. 南区 第1層出土遺物



2. 南区 第2面 土坑0148出土遺物



115

1. 南区 第2面 土坑0165出土遺物



118

2. 南区 第2面 土坑0183出土遺物



1. 南区 第2面 土坑0187出土遺物



2. 南区 第3面 土坑0279出土遺物



1. 南区 第3面 土坑0280出土遺物



2. 南区 第3面 土坑0286出土遺物



1. 南区 第3層出土遺物



2. 南区 第4面 土坑0357出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうしほういっちょうあと・からすまいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	辰巳陽一 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2021年10月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうしじょうしほういっちょうあと・四坊一町跡・烏丸御池遺跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 たかくらどおりさんじょうさが 高倉通三条下る まるやちようばんち 丸屋町160番地 2ほか	26100	1 464	35度 00分 82.7秒	135度 76分 19.7秒	2021年 4月1日 ～ 2021年 7月13日	444㎡	民間開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京左京四条四坊一町跡 烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	江戸時代	礎石列 土坑 井戸 石室		土師器 焼締陶器 施釉陶器 染付 瓦		・安土桃山時代から江戸時代の礎石列、土坑、井戸、石室等を検出し、上京惣構の堀埋没後の平安京左京四条四坊一町跡において、宅地としての土地利用が活発に行われていたことが明らかになった。 ・建物を確認することはできなかったが、室町時代前期の遺物を包含する土坑を複数検出し、当該期の平安京左京四条四坊一町跡において、何等かの土地利用が行われていたと考えられる。 ・平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺物を包含する土坑を複数検出し、当該期の平安京左京四条四坊一町跡において、何等かの土地利用が行われていたと考えられる。	
		室町時代	土坑 井戸		土師器 瓦質土器 焼締陶器 施釉陶器 陶磁器類			
		鎌倉時代初頭	土坑		土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 陶磁器類			
		平安時代			土師器 須恵器 緑釉陶器 瓦			

文化財サービス発掘調査報告書 第20集

平安京左京四条四坊一町跡・ 烏丸御池遺跡発掘調査報告書

発行日 2021年10月29日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961